
流星のロックマン4 B E A S T X

BEAST X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン4 BEAST X

【Nコード】

N8113L

【作者名】

BEAST X

【あらすじ】

メテオGの事件から2年がたち、中学生になったスバル。しかし、200年前倒されたはずの2体の獣^{ビースト}が復活し危機が訪れる！次の物語へと繋がる序章が今始まる……！新システム「BEAST X」システムも導入され、物語はさらに熱くなる！

この物語はEXE6とはちがう時空線で起きる物語です。いわゆるパラレルワールドで、電脳獣が封印された世界です。現在、第7章を連載していますが、こちらのテスト結果の都合で更新速度を大幅に低下させて頂きます。詳しいことは作者ペ

ージの「活動報告」に記載しております。<http://mypage.soyosetu.com/86039/> ↑作者ページ。又は小説の「BEAST X」のところをクリック！

D a t a S e r v e r N o . 1 B e s u t E a r t h (u p d a t e

「我々のデータだと？」

「どつやらそのようですな」

「平和な庶民どもに我々の事を良く知ってもらつチャンスかもな…」

…」

「ついでに恐怖してもらつといいな」

Beast Earth

ハント

BAのボス。推定年齢は29歳ほど。部下たちから「ボス」と呼ばれており、「ハント様」と呼ばれることはほとんどない。左目に眼帯をしており、「隻眼のハント」「隻眼の狩人」と呼ばれることもある。「狩人」と呼ばれる由来は、戦場で無数の敵を1人ですべて薙ぎ払ったことから呼ばれるようになった。左目はこの時に負った怪我である。電波変換なしで強力な技や体技を繰り出す。光と闇を操り、それを混合させた技は基地を全壊させるほどの威力。腰には鋼鉄をも粉々に切り裂く名刀がさげられている。

レイ

BA幹部。ディバインの姉弟。人口電波体の“バーン”と電波変換をしてレイ・ズ・バーンとなる。炎を自在に操ることで、自分と同じ戦闘力をもった人形、フレイムロイドを大量に召喚できる。AM三賢者のバーニング・レオの力を使える。現在、WAXAの病棟で入院中。

バーン

レイのウィザード。バーニング・レオのデータを埋め込んであり、レオの技を使用できる。ただし、最大限には発揮できない。人口電波体だが、アシッドと違って、使用者の体は酷使しない。WAXAの調査ではレオのデータではなく、レオそのものが埋め込んである可能性があると言われている。

ディバイン

BAの幹部。レイの姉弟。電波変換は一人で可能。腕のアーム部分

には大量の電気を蓄電でき、主力武器の銃に電気をチャージすることとで強力な一撃を放つことができる。現在、WAXAの病棟で入院中。WAXAの調査では、過去にウィザードと一体化していた可能性がある。

アラン

BAの研究員。仲間信頼されている。ウィザードの“ブリザード”と電波変換して、アラン・ブリザードになれる。氷を自在に操り、相手を凍結させて動きを封じる。

ブリザード

アランのウィザード。FM星人だが、ウォーロックとは面識がない。地球にきてアランと出会い、意気投合。いつもは無口だが、アランにだけは口をきく。隊員たちの噂では、ブリザードはアランに何らかの恩があるのではないかと言われている。

アフリコット

BAの幹部。以前、WAXAで暁を倒すほどの実力をもつ。しかし、今はジンジャーと共に組織と別行動をしている。ディバインやソロと同じく、個人で電波変換が可能。変身後はジャック・コーヴアスに似た翼を有し、強力な拳で敵を圧倒する。ジャックとなにか関わりがあるらしい・・・？

ジンジャー

BAの隊員。アフリコットと行動中。生まれながら風神の力を宿しており、電波変換することで、雷、水、風の力を変幻自在に操り、敵を翻弄する。現在、ロックマンとの戦いの傷は完治しており、情報を集めている。

ソロ

ムー人の末裔。現在、ファルザーを体内に取り込んでおり、B Aと謎の交換条件により、力を貸している。ウィザードはラプラス。ファルザーとの戦いで左目の視力が落ちている。（ブライ：シークレットエピソードにて、まだこの部分は更新していません）

ラプラス

ソロのウィザード。ブリザードと同じく無口で、戦闘時にブライの剣に変身する。単独で戦う場合でもその戦闘力はすさまじい。最近ブリザードと仲良くなったとか、そうでないとか……。

Data Server No.2 WAXA(前書き)

「これで俺のファン増えること間違いなしっ！」

《ないですね》

「ないね」

《ありません》

「てめーら黙ってる！ シドウにはまけねーかららな！」

「お前のそういうとこ面倒くせー」

「なんだとおおお！？」

「それぞれ」

「シドウっ！ 後で表へ出るお！」

「だからなんでそうなるんだよっ！」

《二人はほっというて、始めましょうか》

Data Server No.2 WAXA

WAXA Standard Data Server

暁 シドウ

ウィザード：アシッド

詳細：WAXAおよびサテラポリスのエース。以前はディーラーに所属していたが、後にWAXAに加入した。ディーラーとの戦いでジョーカーと共にアジトごと自爆し、一時は生死不明となったものの、生存が確認された。メテオGの事件から2年経った今はアシッドとの電波変換による体の負担も大幅に軽減され、長時間戦えるようになった。電波変換後は“アシッド・エース”となる。

アシッド

オペレーター：暁 シドウ

詳細：WAXAによって人工的に作られた電波体。初めはシドウとの電波変換でシドウの体かなりの負担をかけてしまっていたが、現在はだいぶ軽減されたもよう。シークレットサテライトサーバーにアクセスでき、強力なバトルカードを使用できる。

ヨイリー博士

詳細：WAXAの科学者で、WAXAの頭脳。最近、老いてきたせいか行動が2年前よりおっとりしてきているというが、本人は「心配いらない」と言っている。

ジャック

ウィザード：コーヴァス

詳細：元ディーラー幹部。幼いころにキングの養子としてクインティアと共に育った。現在はWAXAにクインティアと共に働いている。コーヴァスとはディーラーを出てから喧嘩が絶えない様子。ス

バルとの再会を楽しみにしている。コーヴアスと電波変換して“ジャック・コーヴアス”となる。

コーヴアス

オペレーター：ジャック

詳細：FM星人でウォーロックとは（悪い意味での）顔なじみ。カラスのような風貌でヴァルゴと共に名の知れた犯罪者。現在ではWAXAにジャックのウィザードとして勤めており、性格も以前と違い、凶暴ではなくなった。急な環境の変化にジャックとの喧嘩が絶えない。

クインティア

ウィザード：ヴァルゴ

詳細：元ディーラー幹部。ジャックと同じくキングの養子でジャックの姉。必要以上の事は口に出さず、性格は冷静。現在はWAXAで働いており、シドウに思いを寄せている（？）が、シドウは気付いていない様子。ヴァルゴと電波変換して“クイン・ヴァルゴ”となる。

ヴァルゴ

オペレーター：クインティア

詳細：コーヴアスと同じく名の知れた犯罪者。性格は残忍で人の苦しむ姿をみて喜ぶほど。今もその性格が治らず、WAXAも手を焼いている。ウォーロックとはなんらかの因縁があるようで、敵視している。

風丸

ウィザード：ウインド

詳細：この2年間で新しくWAXAのエースになった。しかし全体的に言えばシドウより劣る。本人はシドウとはライバルと言い張っ

ているが、シドウは相手にしていない。性格はやんちゃで口が悪い。しかし、戦闘の面では風を思うままに操り、敵を薙ぎ倒す。電波変換して“ウインド・ボレアス”となる。ボレアス（ボレアース）とはギリシャ神話の「北風の神」であり、「むさぼりつくす者」を意味する。

ウインド

オペレーター：風丸

詳細：アシッドと同じく人工的に作られた電波体。アシッドと体は酷似しているが、水色のカラーリングで、風を操る。アシッドとは違い、風丸との電波変換を前提に作られたため、電波変換による風丸への体の負担はかからない。アシッドとは気があう。

D a t a S e r v e r N o . 2 W A X A (後書き)

《ん、そついうえは初めに“Standard”ってあるな》

《アップデートを重ねるにつれて、増えていきますよ》

「え、ぼ、僕のデータ？」

そうだよ、スバル君。何か問題でも？

「ないけど・・・なんか恥ずかしいな」

《俺は大賛成だぜ！》

ちゃんとスターフォースの頃からだから安心しなよ。

「安心できないよ・・・」

それじゃあ、見ていこー！

「僕の話聞いてよ！　ねえ！」

Shooting Star Rockman datafile (update)

Shooting Star Rockman Lv.1

オペレーター：星河スバル

ウィザード：ウォーロック

変身機能：アイスペガサス・グリーンドラゴン・ファイアレオ

装備：トランサー・ウォーロックバスター・ビジライズバイザー・ウェーブトウスデバイス・シューティングスターエンブレム

詳細：AM星人ウォーロックと電波変換することで流星のロックマンが誕生した。バスターを使用し、チャージショットやバトルカードを駆使して戦う。サテライト管理者のペガサス、レオ、ドラゴンの力を借りて変身することが可能。アイスペガサスは氷を操り、相手を凍結させて動きを封じる。ファイアレオは炎を操り、圧倒的なパワーで相手を焼き尽くす。グリーンドラゴンは自然を操り、葉の竜巻を作って相手を吹き飛ばす。アンドロメダを倒し、FM星人の地球侵略を阻止した。後に宇宙空間でAM三賢者を倒すほどの実力になった。

Shooting Star Rockman Lv.2

オペレーター：星河スバル

ウィザード：ウォーロック

変身機能：サンダーベルセルク・ファイアダйнаソー・グリーンシノビ（この3つはダブルトライブが可能）・トライブキング

装備：スターキャリアー・ウォーロックバスター・ビジライズバイザー・ウェーブトウスデバイス・シューティングスターエンブレム

詳細：前回と違い、オーパーツの力を得て変身することが可能。サンダーベルセルクは雷を操り、巨大な剣を使用し、敵をなぎ倒す。ファイアダйнаソーは炎を操り、紅蓮の炎とケタ違いの破壊力を誇る。

グリーンシノビは疾風のように攻撃し、敵を翻弄する。ラ・ムーを倒し、ムー大陸の復活を目論むドクター・オリヒメらから地球を救った。後に、パラレルワールドにてアポロンフレ임을倒し、その世界を救った。

Shooting Star Rockman Lv.3

オペレーター：星河スバル

ウィザード：ウォーロック

変身機能：ブラックエース・レッドジョーカー・ノイズチェンジ（マジノイズ可能）

装備：ハンターVG・ウォーロックアーム・ビジュライズバイザー・ウェーブトウスデバイス・シューティングスターエンブレム

詳細：ノイズと同調する力を得てさらに力を増した。ブラックエースはエースプログラムによってファイナライズすることで得られる力。ノイズの翼を駆使した空中戦が得意でその完璧な戦略と超速なスピードから逃れるのは至難の業である。これに対抗可能なのはジョーカープログラムでファイナライズを遂げた、レッドジョーカーのみである。レッドジョーカーは圧倒的な攻撃力と防御能力を併せ持つ。妨害となるすべてのものを重戦車のごとく破壊していく。メテオGから地球を守り、英雄となった。後に、FM星を救うべく、ブラックホールに入り、シリウスと激突。見事勝利し、FM星を救った。

Shooting Star Rockman Lv.4

オペレーター：星河スバル

ウィザード：ウォーロック

変身機能：グレイガフォルム・ファルザフォルム（ノイズチェンジと組み合わせ可能）

装備：ハンターVG・ウォーロックアーム・ビジュライズバイザー・ウェーブトウスデバイス・シューティングスターエンブレム

詳細：獣化プログラムを使用することにより、グレイガとファルザーの獣化が可能。グレイガフォームは鋭い爪と俊敏な動きで敵を切り刻む。闇と同調すると残像を残すほど移動速度が速まる。ファルザーフォームは大きな翼を使い、空を自由に飛び回る。鋭く貫通力のあるフェザーシユートはどんな状況で使用しても効率が良い。闇との同調能力は不明。アメロッパでのブライとの戦いで“ビーストアース極獣化”を習得、獣化の能力が大幅にアップした。現在、BEの計画を防ぐべく戦っている。

第1話「転校生はアイドル？」（前書き）

はじめまして。阿修羅です（銀もつけてね）。初めての小説ですが、実は

！頭にもう5話分のストーリーが浮かんでおります！読んで下さい。（流星のロックマンについてはけっこうなんでも知ってます！）

第1話「転校生はアイドル？」

メテオGの事件から2年後、スバルたちは中学生になり、入学式をおえ、教室にいた。

「また同じクラスね♪」

みんな知つてのとおり、この人は白金ルナ、僕らは委員長と呼んでいる（未だにねwww）

「今回もだれも変わりませんでしたね（笑）」

この人は、最小院キザマロ。物知りだけど、背が低いところを気に掛けている。

少し戻るけど、変わってないというのはこの1-A組は51-A組と同じだからだww。

「あゝあ。なんかつまんねゝな。だれも変わんないっていうのは。」

こいつは、牛島ゴンタ。食いしん坊で乱暴。でもいざという時には頼りになるやさしいやつだ。ちなみにウォーロックと同じFM星人のオックスがウィザードで電波変換して「オックス・ファイア」になれるんだ。

「別にいいじゃん。変わらなくて。みんなと接しやすいしね。」

「まあ、そうよね。中学になって人が変わると不安になるけど、人が一緒なら安心できるしね」

「そうですよ。ゴンタ君だって本当は一緒になれてうれしいんじゃないんですか？」

「おう！」

「やっぱりゴンは、分かりやすいわね」

と4人でやり取りしていたら、先生が入ってきた。

「授業はじめるぞー。はやく席に着け」

は い

「今日は転校生が来ている。」

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

と・・・みんな驚いた。転校生が教室に入ってきた。

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

「今日からこのクラスと一緒に授業を受けることになった、響だ」

「こうにちは。今日からこのクラスに転校してきました、響ミソラです。みんなよろしくね」

「じゃあ、響の席は……つと」

「はいはいはい！ミソラちゃんは僕の隣でー！！！」

クラスの男子はいつせいに言い放った。

「先生。私、スバル君の隣を希望します」

「ん。そうか。おい星川。隣いいか？」

「え・・・？あ、別に・・・」

ギリリ！

男子全員の目が光った。ちょっとした殺気を帯びていた。

「ベ・・・別にいいですよ（これでよかったのか？）」

「じゃあ、響は星川の隣だ。」

「やった！」

「スバル君よろしくね」

「え・・・あ・・・うん。よろしく」

「それじゃあ授業始めるぞー」

↳放課後↳

「ふう〜。やっと終わった〜。中学の授業って長いし難しいね」

ミソラは少しスバルを見つめながら言った。

「え？あ・・・そ・・・そうだ・・・ね」

スバルは照れくさそうに言った。

「スバル君。ちょっと屋上に来てくれない？」

「え？うん。分かった・・・」

第1話「転校生はアイドル？」（後書き）

屋上へ、呼ばれたスバル。いったいどうなるのか？

感想まってるよ。

第2話「謎の電磁波」(前書き)

前回、屋上によばれたスバル。この後どうなるのか？

是非読んでいってください

第2話「謎の電磁波」

〽屋上〽

「ミソラちゃんなんの用事だろう?」

《さくな。なにか重大なことかもな》
ロックは少し笑って言った。

「あ!スバルくん。こっちこっち。」

「ミソラちゃん。……………で、何の用事なの?」

「ちょっとその前に、なんで私がこの学校に転校してきたか知ってる?」

「え?そんなの急に聞かれても……………分からないよ(笑)」

「そうだよな?じゃあ言うよ」

「うん……………」

スバルはドキドキしていた。

「実はね、私……………スバル君と会いたかったからなの……………」

「え……………?ぼ……………僕に?」

「うん……………そうだよ」

「それでね？ スバル君……実は……」

ミソラが言いかけたとき、スバルのハンターに電話が来た。

「あ・電話だ。ちよつとまってね？ ブラウズ！」

「あら。スバルちゃん。お久しぶりね。」

「ヨイリー博士！」

「ちよつとその辺の電脳で変な電波を感じない？ ロックちゃん」

《別に……！！！！！！！！な……何だこの電波は！！！」

「感じるみたいね・・・ちよつと悪いけど調べてきてくれない？
何か、悪影響な電波だったら困るから」

「分かりました。」

「じゃ。あとをヨロシクね。あとで連絡ちょうだいね」

そう言うつと、連絡が切れた。

「じゃあミソラちゃん、ちよつと行ってくるね。」

「あ
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
○」

こうしてスバルは電波変換して行ってしまった。

《ポロン。どうだったの？ミソラ。》

「ううん。だめだった」

《そう……。まあ仕方ないわよ。次があるわ》

「ハーブ……………うん！ありがとう」

第2話「謎の電磁波」(後書き)

なんか急いでいたのでヨイリー博士の説明省きました。

感想待ってます

第3話「200年前の電腦獣」(前書き)

今回はバトル入りです。

第3話「2000年前の電腦獣」

「ロック」

《ん？なんだ？》

「その電磁波を発信している電腦ってどこ？」

《正確には電腦じゃねえな。ノイズウェーブってとこだ》

「え？じゃ・・・じゃあまたあの中に行くことになるの？」

《ああ。そういう解釈になるぜ。ここから1番近いのはあの女の近くのノイズウェーブ1だ》

スバルはルナの家の際にきた。

《ここだな》

「ここだね・・・。久しぶりだからドキドキしてきた・・・」

《弱気になるんじゃないやねえ！ホラ！さつさといくぞ》

「うん・・・」

「ノイズウェーブ1」

「う・・・ここ・・・2年前よりノイズがひどいよ・・・」

「

《た．．．．．確かに．．．．．たぶんこの妙な電磁波のせいだろう．．．．．》

「あ．．．．．あそこに．．．．．な．．．．．なんだろう．．．．．あれ．．．．．」

《石．．．．．？なのか？ あれが電磁波を発していやがる．．．．．さっさと破壊しちまおうぜ》

「うん．．．．．」

「？」

《どうしたんだ？ズバル》

「なにか書いてある」

「200X年．．．．．この電脳に．．．．．獣を．．．．．する．．．．．この封印が．．．．．解かれ．．．．．前に．．．．．発見者は．．．．．GMを．．．．．取り出してほしい．．．．．その者が．．．．．心優しき者と願う．．．．．
光・斗．．．．．」

「なんだろう？これ」

その石碑はところどころ文字が消えていて読みにくかった

《要するに、見つけたらPGMを取り出せばいいんだろ？》

「でも僕って心優しき者なのかな？ まあ、やってみよう」

しかし、ズバルがデータを取りだそうとした瞬間に、ズズズズ．．．．．と地鳴りがした。

「な．．．なんだこの音は？」

グルルルルルルル．．．．．

《も．．．．．猛獣の鳴き声だぜ？こりゃあ》

「な．．．．．なにか来る！」

その時、石碑にヒビが入った。

グギヤアアアアアア！

獣の叫びと共に石碑が砕け散った。

「な．．．．．何？」

《気をつけるスバル！来るぞ！》

煙の中から出てきたのは、2体の獣だった。

1体は青く、ライオンのような体つきで鋭いつめと牙を持ち、もう1体は赤い翼で鳥というより鷹に近い。

「な．．．．．なんだこいつらは！　ものすごいノイズだ．．．．．」

グラアアアアアア！

すると急に謎の電波体はスバルを切り裂いた。

「うわあああああああ！」

スバルは衝撃で後ろへ飛ばされた

「ぐ……なんてスピードだ……」

《ただの電波体じゃねえな》

「でも、やるしかない。 ノイズチェンジ！ジェミニ！」

ロックマンはジェミニノイズへと変身した。

「タッグ機能！エドギリブレード?!」

スバルは左手をブレードに変えて切り付けた。

「やああ！」

グガアアアアア！

青い電波体には命中したものの、スバルはもう1体には気づかなかった。

ギアアアアアアアス！

赤い電波体は鋭い羽を放った。

《スバル！避ける！》

「!!!! うわああああ」

2枚の鋭い羽はロックマンに命中した。

「ぐ………はぁ……はぁ……」

《な……なんて強さだ》

………グルルル………グガアアアア！

青いほうの電波体は急に苦しみだした

「？ どうしたんだ？」

ギヤアアアアアス………！

もう1体も苦しみだした

「く………苦しんでいるのか？」

そして、2体は突然暗闇の中に消え去った。

「き………消えた？」

《ん？ なにか落ちてるぞ？》

ロックは2体のいた場所にキラんと光るチップを見つけた。

「なんだろう。WAXAに持って行ってヨイリー博士に調べてもらおう」

第3話「200年前の電腦獣」(後書き)

変なところできました。

感想待ってます。

第4話「獣化PGM」(前書き)

今日は、いろいろアイデアが浮かぶので本日2回目の投稿です。

第4話「獣化PGM」

「ノイズウェーブ1」

「早くウェーブアウトしよう……もう……ノイズに耐え切れない……」

《俺も同感だ……》

「コダマタウン」

「あ、スバル君！おかえり……。て、どうしたの？疲れてるみたいだけど？」

「うん、ちょっとね。僕WAXAに行って調べたいことがあるんだ。」

「私も行く！」

「え？み……ミソラちゃんはだめだよ。」

「ダメ？」

「ミソラちゃんは僕を見つめて涙目でいった。もちろん演技とすぐに分かった。でもミソラちゃんには勝てなかった。」

「はあ、じゃあいいよ。ついて来て」

「やった！」

それから数十分……

く WAXA にほんしぐく

「あの・・・ヨイリー博士。」

「あら。スバルちゃん、ミソラちゃんも、いらっしやい」

「ちょっと調べてもらいたいことがあるんですが」

「どうしたの？　もしかしてあの電磁波のことですか分かったことが？」

「ええ。どうやらあれは、2000年前に封印された電波体が発して
いたらしく・・・」

「スバル君。なんの話？」

ミソラが覗き込んで聞いた。

「あ・・・ちょっとミソラちゃんは席を外してもらえろ？」

「ええくくくくく？　なんで？」

「いいから！　ちょっと外に出てるだけでいいから」

「分かった・・・」

《スバル相当疲れてるな。大丈夫か？　ミソラ扱うのに苦勞してたが・
・》

「まあね・・・ははは」

「スバルちゃん、こっちで調べましょう。ついて来てちょうだい」

「ハイ！」

「それで、どうだったの？」

「それで、その電波体の1体は青いライオンみたいなので、もう1体は赤い鷹のような電波体でした。」

「ふむ・・・200年前で青い電波体と赤い電波体ねえ・・・」

「それで、そこでその2体の落としていったのがこのデータです。」

スバルは、ハンターからデータを送った。

「ふむ・・・なにか複雑なデータで構成されているわ。メインコンピューターで調べましょう」

「お願いします。」

数十分後・・・

「解析できたわ。200年前のものだったから解析が難しかったけど、逆にセキュリティが古かったわ。」

「それで、なにか分かりましたか？」

「あの2体の電波体は、200年前に暴れた電腦獣……グレイガとファルザーよ」

「ぐ……グレイガ……ファルザー……なんですか？それは」

「簡単に言えば、凶暴でコンピューターの中に入って暴れ、めちゃくちゃにしていたらしいわ。だから電腦獣というの。そしてこれがあのデータから取れた、”グレイガP G M”と”ファルザーP G M”よ。」

「グレイガP G M……ファルザーP G M……それはエースP G MやジョーカーP G Mのようなものですか？」

「いいえ。これはノイズと同調するプログラムも入っているけど、完全に同調は出来ないから、エースやジョーカーとの併用は出来ないわ。」

「……ということは、そのP G Mで変身も出来るんですか？」

「ええ。でもまだ不完全なP G Mだから、まだ使わない方がいいわ。」

《そんなことどうでもいいぜ！はやく変身させろ！》

「早まらないで。無理に変身すると制御しきれずに暴走してしまうかもしれないのよ」

「その確立は？」

「6割の確立で暴走するわ。」

「た・・・高い・・・」

「またあの電脳獣と出合ったらそのPGMが共鳴して、無意識に機動してしまう可能性も・・・」

「その暴走をしてしまうと？」

「我を失い、辺り構わず破壊しつくすわ。その後の反動もかなりのもので、スバルちゃんの体だけじゃなく、ロックちゃんにも影響が・・・とにかく、まだそれには変身しちゃだめよ。」

「分かりました。今日は、ありがとうございました。」

「いいのよ。こんなことならなんでも聞きにきていいわよ」

「ありがとうございます」

スバルは博士にお礼を言っ て部屋をあとにした。

スバルが部屋をでた後、暁が入ってきた。

「博士」

「シドウちゃんどうしたの？」

「ウォーロックのことだ、たぶん試しに変身するかもしれないのに

なぜPGMを渡したのです？」

「それはね……………」

ヨイリー博士は少し笑みを浮かべた。

第4話「猷化PGM」（後書き）

以上です。

感想まっています

第5話「新たなる組織」

（WAXAにほんしぶ・外）

「もう！スバル君遅すぎ！1時間近くまっただわよ！」

「ご……ごめん。」

スバルはミソラに頭が上がらなかった。

「まあ、新しい曲ができたからいいから許してあげる。」

「（あんまり怒ってないような……）」

「ところで、何の話してたの？」

「えっ……と……（どう話したらいいんだろう、ロック）」

《しゃーない。俺が話してやる！》

こうしてウォーロックは10分くらいややこしい話をした。

「ふうん。スバル君もいろいろ大変だったんだねえ」

「う……うん。そうなんだ」

「とにかくもう遅いから帰ろう。」

「え……あ、うん……ところでさ」

「？」

「ミソラちゃんの家ってどこ？」

「それは、コダマタウンに戻ってからの楽しみだよ。」

そうして、2人はウェーブライナーに乗って行ってしまった

　　↓
WAXA：メインコンピュータールーム

「ぐ……はあ……はあ……」

《シドウ！もう無理です。ここは逃げましょう》

「だ……だめだ……ここでやつを逃がしたら……ぐふ！」

「へっ！なっさけねえの。こんなやつがサテラポリスを守っていたのかよ」

「消えな！」

男が鋭い刃を飛ばした。

「……………！」

それはシドウに命中し、辺りに血が飛び散った。

————時はさかのぼり、20分前————

「ふふふ……」

「！！！！貴様！博士じゃないな！」

「ふふ！よく分かったな・・・」

「博士をどこへやった！目的はなんだ！」

「あのバアさんは倉庫で眠ってるぜ。そして俺の名はアフリコット。目的は・・・」

バツ！博士に変装していた男が姿を現した。

「俺の組織の名は”ビースト・アース”。そして目的は電腦獣をコントロールし、ロックマンをつぶし、そして世界を破滅させることさ。」

「く・・・そんな組織が・・・だがそんなことはせん！アシッド！」

《分かりました。アクセスポートを開きます。》

「今日は特別だ。流星サーバーを開け。1v24だ」

《流星サーバーデータ受信中・・・完了。カードダウンロード。》

「よし。トランスコード001、アシッド・エース！」

「なんだ。お前も電波変換できたのか」

「お前も・・・だと？」

「見せてやるぜ！俺の力！はああ！」

「な．．．なに？ソロと同じだ．．．一人で電波変換するやつなんて．．．」

すると衝撃と共に闇の中から人影が現れた。

「ふふ．．．どうだ．．．これこそ電波体なしで変身できる技術、俺たちのボスが作り上げた技術だぜ」

「な．．．なんというノイズだ．．．」

「まずウォーミングアップだ．．．死にな！」

アフリコットは刃を飛ばした。

「はや．．．」

シドウはなんとか反応したが、避けきれずに当たってしまった。

「ぐ．．．．．あ．．．」

シドウは横っ腹を抑えた。

「なんだよ．．．これくらい．．．よけやがれ！」

アフリコットは今度は刃を数本飛ばした。

「ぐあああ!」

シドウはそのまま壁へと吹っ飛ばされた。

「ぐ・・・・・・・・ウイングブレード!」

「!?!?!」

シドウの攻撃がアフリコットに直撃した。

「へ・・・・・・・・なかなかやるじゃねえか。だが・・・・」

アフリコットには直撃したものの、ほとんど答えていなかった。
油断したシドウは背後から頭をつかまれた。

「な・・・・・・・・放せ!」

「もう逃がさないぜ・・・・・・・・。くらいな!アイアンスマッシュ!」

鉄の拳がシドウを直撃した。

「ぐあああああああああああ!」

「ダメ押しだぜ!ストレートスマッシュ!」

今度は直進する拳が直撃した。

「あぐ・・・・・・・・」

「これでしまいか?」

「ぐ．．．はあ．．．はあ．．．」

《シドウ！もう無理です。ここは逃げましょう》

「だ．．．だめだ．．．ここでやつを逃がしたら．．．ぐふ！」

「へっ！なっさけねえの。こんなやつがサテラポリスを守ってたのかよ。」

「消えな！」

アフリコットは鋭い刃を飛ばした。

「！！！！！！！！」

それはシドウに命中し、辺りに血が飛び散った。シドウは電波変換を解かれ、その場に倒れこんだ。

「死んだか？まあどうでもいいや。早くデータとっととととと」

アフリコットはアシッド・エースとの戦いの記録を集計し、基本的なデータを取り出した。

「よし！早く帰らないと．．．だいぶタイムオーバーしちまってる。こいつは．．．まあほっとこ。そのうち死ぬだろ。」

こうしてサテラポリスの一件は終わった。しかし、その後、地球に新たな危機が訪れる。

第5話「新たな組織」（後書き）

感想まってます

第6話「ミソラの家」(前書き)

だいぶ投稿が遅くなりました。

第6話「ミソラの家」

「ウエーブライナー」

「（ミソラちゃんの家ってどこだろう？）」

《さあな。たぶんとなりの空き家にも住むんじゃないか？》

「（そうかな？）ねえ、ミソラちゃん。」

「~~~~~」

「み・・ミソラちゃん？」

「~~~~~」

「だめだ・・音楽聴いててこっちにきずいてないよ。」

《降りてから聞くしかないな》

「そうだね」

「~~~~~」

ミソラはその後も音楽を聴き続けていた。

「コダマタウン」

「うん。着いたー！」

ミソラは背伸びをしながら言った。

「WAXAからここまでこんなにあったっけ？」

《あったぜ。だって最近ウェーブロード活用してただろ？》

「そうだったね。ところで、ミソラちゃんの家は？」

「あ、そうだったね。それはね」

「早く言ってよ。」

・・・

「スバル君の家だよ」

「え？ぼ・・・僕の家？」

「え？お母さんから聞いてないの？」

「う・・・うん（て言うか・・・聞いてたら聞かないよ）」

「じゃ。いこっか」

「え・・・あ・・・ちょ・・・まってよ」

ミソラはスバルより早く行ってしまった。しかしスバルは家の前でミソラに追いついた。

ミソラは玄関のドアを開けた。

「ただいまー」

「あら。遅かったわね」

「母さん。なんでミソラちゃんがここに住むこと言ってくれなかったのさ」

「だってその方がおもしろいでしょ？」

「……………」

「おじゃまします」

「ちがうでしょ？もうここの家族なんだからどうするの？」

「あ……た……ただいま……」

「フフ。それでいいのよ、ミソラ。あと30分くらいでご飯だから部屋で待つてなさい」

「「は————い」」

　　「スバルの部屋」

「ふう〜疲れた。」

スバルはベッドへ倒れこんだ。

「ス〜バ〜ル〜君〜」

「ん？何？」

第6話「ミソラの家」(後書き)

感想お待ちしています。

第7話「偵察開始」(前書き)

今回は、組織のビースト・アースが偵察を開始します。

第7話「偵察開始」

スバル家

「いただきます」

3人は夜食を食べ始めた。

「ところで2人とも、交際はうまくいってるの？」

「ぶつー……！」

お茶を飲んでいたスバルは驚いて吹いた。

「な……なんで母さんがそんなこと知ってるの？」

「そ……そうよ。」

「だって2階で話せばれよ♪」

げつ
・
・
・
・

「そんなことより、早く食べちゃいなさい。」

「はい」

3人で食事しているとソファの影からピピピ……と音がした。

〜ビースト・アース基地〜

「ふん！あれがロックマン・・・星川スバルか。あんがい弱そうじゃないか。」

ビースト・アースはスバル偵察機を送っていた。もちろんデータ収集のためだ。

「でもサテラポリスのやつよりは強そうだな。さっさと消しちまえよ。なあ、ボス」

「そうあわてるな、アフリコット。奴はノイズの力を秘めているんだ。」

「ノイズねえ？やつかいだな。それさえなければな。」

「じゃあその制御するPGMを取り除いちゃえばいいんじゃない？」

奥から組織の幹部、レイが現れた。

「げ・・・レイ！何しに来た！」

「レイか・・・なかなかいい案をだすじゃないか・・・」

「じゃあオレがやる！まかせてくれ、ボス！」

「今回はアフリコットはパスだ。レイ、やってくれるな？」

「はい。」

「ちえ！なんだよ。オレなんかサテラポリスのエースさん倒したんだぜ？」

「僕お風呂入ってくる。」

「いつてらっしゃい」

「風呂」

カポーン・・・・・・・・。スバルは風呂に入っていた。

「あのミソラちゃんと付き合えるなんて夢みたいだよ。」

《で・・・・学校でどうすんだ？》

「へ？」

《交際がばれたら大騒ぎだぜ？》

「そうだったー！どうしよう！交際がバレたらみんなからどんな目で見られるか・・・・委員長が怖い」

《（委員長かよ・・・・）》

スバルは風呂から出た。

「ふう。気持ちよかった・・・・・・・・って、あ！み・ミソラちゃん？」

「す・・・・スバル君？」

「わわわ！こ・・・・ここでなにしてるの？」

「お母さんに頼まれて洗濯物取りに来てたのよ／＼／＼／＼」

スバルは裸のまま鉢合わせてしまったので心臓がバクンバクンしていた。

「と……とにかく……着替えるからむこうに行ってよ／＼／／」

「わ……分かった……」

「（まさかミソラちゃんの前でこんな格好を見せるなんて……）」

「（まさかスバル君の裸をみちゃうなんて……）」

「（まさか！！！！）」「母さん？」「お母さんが仕掛けたんじゃ？」

『

2人の勘はズバリ当たっていた。そう、なにを隠そう、この事件は母、アカネが仕掛けたのだ！

「ふふふ」

隅っこで見ていたアカネは小さく笑った。

《なんて母さんだ……》

第7話「偵察開始」(後書き)

母さんヒドイですね
www
www
www
www

感想オンリー!!!!!!

第8話「レイ出撃！」（前書き）

ついにレイが出撃します！

第8話「レイ出撃！」

「スバル家」

前回の事件後、2人は2時間ほどたつても顔を合わせられなかった。

「（う・・・目が合わせられない・・・）」

「（なんで母さんあんなことしたのかな？）」

「（なんでお母さんあんなことさせたのかな？）」

「（謎だ！！！！）」

「2人とも。もうそろそろ寝なさい」

「はい」

スバルは返事をしてベッドへ向かってすぐに布団に包まった。

「あの・・・スバル君？」

「んんん？何？」

「私のベッドってどこ？」

「あ・・・そうだったね。え・・・っと。ここに確か毛布があったような。」

スバルはタンスを開けた。

「あつた。はい、これ」

「ありがとう。すこし汚れてるね・・・。」

「ごめんね。長い間使ってなかったから。次使うときはきれいにしとくよ。」

「うん。じゃ、おやすみ」

「おやすみ・・・zzzz・・・」

「スバル君早！」

《マジで早いわね・・・》

「私も早く寝れるようになりたいな・・・なんてね」おやすみ。」

《おやすみ》

そしてあつというまに深夜2時。

　　↓ B・A基地

「レイ、広場へこい」

レイの部屋のスピーカーから召集がかかった。

「準備が出来たようですね？ボス」

「ああ。深夜ですまん。」

「いえ、お気に召さずに。」

「ああ。それじゃあこれから例のターゲットの星川スバルからPGMを奪還する。準備はいいな？」

「はい。」

「それでは、比近くのウェーブロードへ転送する。」

そういつてボスはレイをワープさせた。

「ここが日本か・・・私の出身イタリアとは違うな。さて、星川スバルは西に500mか」

レイは歩き出した。

「Z～Z～・・・うん。なんか寝苦しいな。妙に暑いな。」

「ふふ・・・家の前に来ただけで私の熱が伝わるとは、やはり戦いは避けられないな」

「のどが渴いてきた。水、水」

「ふふ・・・このまま外へおびきだすでしょう。 電波変換・・・
・レイズ・バーン」

レイは赤いボディに腕の甲には3本のかぎ爪、ウルフノイズのフエイスの赤いバージョンのような姿だった。

「さて、エースPGMとジョーカーPGMとやらを渡してもらおう
しよう・・・」

第8話「レイ出撃！」（後書き）

次回、戦闘開始！

第9話「ファルザーPGM覚醒」(前書き)

ファルザーPGMが覚醒します!! 暴走です。
お楽しみに。

第9話「ファルザーPGM覚醒」

「うーん……ムニャムニャ……眠れない……暑いせい
か？」

《暑いせいだけじゃねえ。眠気覚ましの電波をだれかが浴びせて
やがるんだ。》

「ビジライザーで見えるかも」

スバルはビジライザーを掛けた。

「わっ！なんだこの乱れた電波は。ウェーブロードが途切れ途切れ
に続いている。」

「フッフッフ……星河スバル……上がってこいよ……」

「だ……だれだ！」

「私は、レイ。あなたのエース・ジョーカーPGMを貰いにきたわ」

「そう簡単に渡すもんか！トランスコード！003、シューティン
グ・スター・ロックマン！」

「そうこなくては面白くないわね」

「こい！」

レイは炎の跡を残して、ロックマンの目の前に現れた。

「な……」

「そんなもの？あなたの速さは？炎の刃」
フレイムクロー

「うわあああ！」

スバルは後方へと吹き飛ばされた。

《スバル！ノイズチェンジだ！》

「うん！ノイズチェンジ！ヴァルゴ！」

「ふうん。水か、私の弱点をついたか。どうやら脳みそはつてるなようね」

「なめるな！ワイドウェーブ！」

スバルはバスターから水の波を打ち出した。

「そんなもの簡単に避けれるさ！」

レイは上へ避けた。

「かかったな！」

「！！！！」

「ソードファイター3！」

4連続のソードがレイを切り付けた。

「ぐ……やるな。」

《いまだスバル!》

「うん!ファイナライズ!」

スバルは赤い球体に包まれた。

「レッドジョーカー!」

「ジョーカーか。攻撃特化という訳か。」

「うおおおおお!RGイレイザー!」

赤いノイズのレーザーがレイをめがけて放たれた。

「必殺技か。だがそれしきの技では私は倒せない……究極の業火」
エクストラ・バーニング

レイの放った業火はRGイレイザーとぶつかった。

「ぐ……なんてパワー……ノイズ率がどんどん下がっていく……」

「そんなものかい。私はまだ4割しか出していないよ。」

「何?こっちはフルパワーなのに!なんてパワーだ」

「じゃあ5割に上げようか」

「な・・・耐え切れない!ぐ・・・うわあああああ!」

スバルは業火に焼かれ、その場に倒れこんだ。

「う・・・あ・・・くそ・・・このままじゃ・・・PGMを奪われる」

《心配するな!PGMは俺の体の中だ!》

「知ってるよ」

レイは姿を突然消した。

《どこへ行きやがった。・・・ドクン!》

「どうしたの?ロック。」

《まさか・・・あいつ・・・俺の体の中に?・・・うあああああ
ああ!」

「ろ・・・ロック!しっかりして!」

《ぐおおおおおお》

ロックの口の中から赤い物体が出てきた。

「レ・・・レイ!ロックに何をした!」

「なに。ちよつとジョーカーPGMを取り出ただけよ?」

「な・・・なんだって?それじゃあエースPGMはどうなったの? ロック」

「ああ・・・いらなかったからぶつ壊しといたわよ」

「な・・・そんな・・・」

「勝機なしだな!だが今回は消せという命令は出ていないから半殺しにしてあげる」

「ち・・・ちくしょう!」

《いいや!まだ勝機はあるぜ!(スバル。あれだ!あのPGMだ!)》

「え?だってあれはまだ使ったらいけないんじゃない?」

《そんなこと言ってる場合かよ!死んだら元も子もないんだ!》

「わ・・・分かった・・・」

スバルは腹をくくった。

「いくぞ!ファルザーPGM起動!」

「了解・・・PGM起動・・・ヴーヴー!ヴーヴー!
しかし起動したはずのシステムは警告信号を出した。」

「ど……どうしたの？」

「――警告！警告！PGM不調のため正常に機動できません――」

「な……なんだって？」

《やっぱりだ。こうなることを予想してやったんだからもう後には退けないぞ》

「わかって……！！！」

スバルが言いかけた瞬間だった。

「グ……ガガガ……」

不気味な声が響いた。スバルの声だ。

「なんだ？何が起きている？」

「ギャアアアアス！」

「――ファルザーPGM暴走！制御不能！制御不能！ビースト・オーバー――」

「なるほど……電腦獣のパワーか。面白くなりそうだ」

スバルはロックマンエグゼ6のファルザーの姿へと変貌した。まさに化け物に近かった。

「が・・・グギヤアアアア・・・！」

第9話「ファルザーPGM覚醒」(後書き)

ついに変身！姿は想像してください。
感想待ってます。

第10話「獣化暴走（ビーストオーバー）の脅威」（前書き）

前回のファルザーの姿説明は少し分かりずらかったでしょうか？
エグゼ6の獣化状態のファルザーのようなものです。（オーバー状態）
正確には公式サイトをご覧ください。

第10話「獣化暴走（ビーストオーバー）の脅威」

「グギャアアアア！」

《グララ．．．．．》

「なるほど．．．．．周りのノイズを吸収して攻撃力を上げる特性か．．．」

「ギャアアアアス！」

暴走したスバルはレイに余興もなく襲い掛かってきた。

スバルの目は理性を失っていた．．．．。

「早いわね．．．．こつちも素早さを倍にするよ」

レイはさつきよりも素早さが上がり、スバルと同格の速さにした。

「ガアアアアア！」

スバルは鋭い爪でレイを切り裂いた。

「つく！こつちにも爪があるんだよ！獅子の爪！レオ・クロー！」

レイも負けずと激しく切り付けた。

「グガアアア！」

その後も2人で切り裂き合った。

10分くらいが経ち、ぼろぼろの2人はもう気が持たなかった。

「ガ……アアアア……」

スバルの獣化が解け、その反動でスバルは悲鳴を上げた。

「ああああああああ！うああああ！な……なんだ……この痛みは……」

「どうやら……はあ……あなたの負けのようね……はあ……」

「ぐ……あああああ！はあ……はあ……」

「でも今回はさっきも言ったように、消せという命令は出ていないわ。目的は達成した。さようなら……」

「ま……まで……」

シュン！

レイは基地に戻ったらしく、姿を消した。

「ちくしょお。エースPGMも……ジョーカーPGMも無くなった……いたいどうすれば……」

《心配すんな……電腦獣のデータを集める他にねえだろ》

「いったいどうやって……」

《簡単さ……奴らの出没先のデータを集めてばあちゃんの所に持つてればいいだろ》

「ナイスアイデアだね。でも今はこの怪我をどうにかしなきゃ。」

「家にWAXAからもらった万能治療薬貰ってるだろ？あれ使えよ。」

「（そんなのいつ貰ったっけ？）そうだね、ミソラちゃんにばれてなきゃいいけど」

「スバル家」

「ミソラちゃん起きてないね」

《熟睡してるな。早いとこ治療薬飲もうぜ。》

「うん。」

その後、スバルは治療薬を飲み、起きた頃には傷がすっかり治っていた。

「すごいね、この傷薬」

「なんのこと？」

ミソラが聞いた。

「ううん。なんでもないよ。それより学校……の前に、3つ

約束してくれる?」

「何?」

「1つ、学校では付き合っていることを言わないこと。2つ、僕の家に住んでいることを見られちゃだめ。3つ、学校への出発は電波変換していったね。」

「分かった。じゃあ先言ってるね。トランスコード!004ハープノート」

こうしてミソラは先に学校へ行き、校門前の隅っこで電波変換を解いた。

「行つてきまゝす」

「行つてらっしゃい」

「いそがないと、遅刻しちゃうよ」

《ほら急げ、急げ》

「のんきだなあ、人の苦労も知らないで」

《しらねえ》

「はあ……あ、学校だ。」

キーン・コーン・カーン・コーン×2

「ギリギリセーフ！」

「遅かったわね、スバル君」

「い・・・委員長・・・すいません」

「よろしい。ところでスバル君、私ここでも委員長になろうと思っているんだけど、どう？」

「ど・・・どうって、いいと思うよ」

「ありがとう。これでクラスの全員が賛成してくれたわ。」

「ぜ・・・全員！？そんなにも支持が？」

「ええ。だって当然でしょ？この私が委員長になるんですもの。フフッ」

「（なんか性格変わったような）」

その時先生が入ってきた。

「授業始めるぞー。席に着けー。」

こうしてスバルの中学生生活&ミソラとの交際生活が始まった。

第10話「獣化暴走（ビーストオーバー）の脅威」（後書き）

戦いと主生活の両方が始まりました。

第11話「ファルザー出沒!？」（前書き）

P G M返還とはW A X Aに保管してもらうつといふことです。

第11話「ファルザー出沒!？」

「学校」

「……で、ここがこうなって……」

今の授業は数学だった。スバルの苦手な教科だった。

「はあ。中学校って50分授業になったから疲れるな」

「しょうがないよ、スバル君。中学校だもん。小学校よりは、きついよ」

「早く部活に入りたいな」。

「何に入るの？」

「ここは望遠鏡があるから、天文学部があつたよな。やっぱりそこかな？」

「私は、吹奏楽部だね。まだ音楽でも知らないこといっぱいあるし」

……と、2人で授業を無視して話している時に、

キーン・コーン・カーン・コーン×2

学校の6時間目を終えるチャイムが鳴った。

「やっと6時間目が終わった。早く帰ろ。」

「じゃあいつしょにかえ・・・」

「まった。約束したでしょ、電波変換してからって。」

「ムウ~~~~。分かった。。。じゃ、先帰ってる。」

こうしてミソラは先に帰った。

「じゃあ僕たちは・・・」

《そうだな、これ以上あれを持っていたら、何が起こるかわからないからな。》

「WAXAへ出発だ」

　　↓
WAXAにほんしゅ

「こんにちは」

「よく来たな、スバル。で、今回は何の用だ？」

「あ・・・晁さん！ど・・・どうしたんですか？その怪我」

「ん、ちよつとあつてな。アフリコットってやつに電脳獣のデータ
争奪ってやつだ」

「電脳獣・・・もしかしてレイもその仲間かも。」

「お前も奴らの組織と接触したのか」

「奴らの組織？何ですか？それは」

「奴らはビースト・アース、電脳獣を操って、この地球をめっちゃにしようとしているらしい。」

「なんてことを……。」

「それより、今日の用はなんだ？」

「そのことで、実は、レイってやつにエース・ジョーカーPGMを奪われて……。それで今もっているファルザーPGMが暴走しまして、完全なPGMにするために電脳獣の出没先を調査して、PGMを完成させたいんです」

「そうか、それでそのPGMは今どこに？」

「ここにいます。それでこれを預かってもらいたいんです」

「ほう、じゃじゃ馬ってわけだな。これからどうするんだ？」

「まだ検討がありませんが、このまま電脳獣が出てくるまで待ちます。」

「そうか、なら……。」

と、シドウが言おうとしたとたん。

ヴーヴーヴー！警告！WAXAおよびサテラポリスに告ぐ、近くで電脳獣による電波障害発生！至急現場に向かってください！

「さっそくだな」

「さっそくですね」

《さっさと行くぜ！データ収集だ》

「うん、トランスコード！ シューティングスターロックマン！」

電波変換したスバルは現場に向かったがすでに電脳獣はいなかった

「く……もういないか。ロック、データは落ちてる？」

《あつたぜ、被害を受けた電波たちから微量だがファルザーのデータが取れたぜ》

「さっそくPGMと同期だ」

第11話「ファルザー出沒!？」（後書き）

終わり。

次回予告：

ファルザー PGM 6 割完成！制御 PGM 完成真近！

第12話「制御PGM完成真近！」（前書き）

完成まであと少しです。それと、今回は超短いです!!!

第12話「制御PGM完成真近！」

「WAXAメインコンピュータルーム」

「ヨイリー博士、データを持ってきました」

「ありがとう、スバルちゃん。さっそくPGMにつけたすわね」

ピピピピピピピピピピ……データ同期完了。

「このデータは貴重だわ。1番制御に大切な部分が入っているだけじゃなくって、ファルザーの戦闘データも入ってるわ」

《やったな。スバル、これでこのPGMを制御できるな》

「うん。そうですね、ヨイリー博士」

「少しは制御できるようになったけれど、まだ暴走するおそれもあるのよ」

「そうですね。あと何割程でPGMが完成するのですか？」

「そうですね……あと4割ってところかしら」

「おお！もうすぐ完成するということですね？」

「ええ。あと残りの戦闘データと制御データ、残りの掛けている部分はここのデータで補うわ」

「……だそうだ、スバル。今日も遅いし早く帰ったほうがいい

ぞ」

「ありがとうございました」

スバルはこの言葉を残し、コスモウェーブでコダマタウンへと帰っていった。

～B A 基地～

「ボス、只今帰還いたしました。」

「それで例のP G Mは？」

「はい、これです」

「ジョーカーか・・・なかなか悪くない・・・これを使えば電腦獣を打ち負かすことができるやもしれん・・・」

「奴の使い方では未だにすべてのパワーを使いこなしていない模様でした」

「そうか、だがその傷はどうしたんだ？」

「これは・・・」

「どうした？言ってみろ」

「奴は新たなP G Mを持っていた模様で、電腦獣のデータがプロゲラミングされていました」

「さしずめ、グレイガP G MとファルザーP G Mというところか・・・

・
」

「ですが、まだ不完全のようで制御しきれず暴走……そしてこの結果に」

「そうか……」

第12話「制御PGM完成真近！」（後書き）

変なところでまりました。

感想待ってます

第13話「初デート」(前書き)

実は前回短くした理由はこの回を書くために短く切りました。タイトルは決めていましたが、内容は、勉強をしながらねってました。

第13話「初デート」

～BA基地～

「レイ、さがってよい。いろいろ大変だったようだな。休め」

「分かりました」

レイは広場から出た。

「まさかレイがあんなに苦戦せるとは……予想外だった。次はアフリコット……いや、次は……」

扉の影で聞いていたアフリコットは、その言葉を聴いて悔しかった。

「くそ！なんで俺じゃねえんだ！……そうか！ボスは俺の真の強さに気がついてないんだ。よし、ならば今からでもボスに成果を見せれば！」

こうしてアフリコットはBAの計画と同時進行で別の計画を練り始めた。どうしたらロックマンを倒せるか……どうやらボスに認めてもらえるかを……。

～コダマタウン～

「ただいま」

「おかえり。遅かったわね」

「ん、ちよつとWAXAまで行ってたんだ」

「また事件で呼ばれてたの？」

「え？あ・・・まあそんなとこ」

「最近また電波障害が多いわね。あなたも気をつけなさい」

「はい」

スバルは階段を上って自分の部屋へと入った。

「おかえり」

「ミソラちゃん。ただいま。何読んでるの？」

「スバル君の本。おもしろね、宇宙って」

「うん。だって無限に広がり続けているから無限の可能性を秘めているんだから」

「すごいね、宇宙って」

「他にも宇宙の本がいっぱいあるんだよ。土星とか木星、銀河系、ブラックホールもあるし、あとそれから星ってどうやって出来るか知ってる？」

「知らない」

「じゃあ教えてあげる。まず星は・・・・・・・・・・・・・・・・」

その後ミソラは30分にもかけて宇宙の話を聞かされた。

「それでね……」

「スト~~~~ップ！ながい！ここでストップ！」

「え？でもまだまだいろんなことが」

「1日で話さなくてもいいでしょ。それよりさ、明後日の日曜日、いつしよにデートしよ」

「え？デ……デート？別にいいけど……どこに行くの？」

「この前、新しく出来た町があるの。そこでショッピングとか御茶とかしたりしていつしよに過ごしたいな」

「いいよ。明後日なら」

「やった。ありがとうスバル君」

ミソラはスバルに抱きついた。

「ちょ……また？その抱きつくのはいいけど、いきなりはやめてよ」

「抱きつくつてのはいきなりなのよ」

「はあ……」

スバルは少し納得のいかない声でため息をついた。

「ご飯よ」

『はい』

そしてあっという間に日曜日。

「それじゃあ行ってきました」

「はい。行つてらっしゃい。2人共がんばってね」

「そんなこといいから。」

「お母さん、行ってきました」

「ウェーブライナーで行ったら、怪しまれるから電波変換していい」
「う」

「うん」

『トランスコード!』

2人はコスモウェーブでその町へと向かった。

「ここがそうか」

「きれいでしょ?お花がいっぱい」

ここは町のいたるところに花が植えられている町、”フラワース

イドシテイ”だ。

「あ・・・あそこにきれいなカフェがあるよ。あそこいこ」

「うん。」

2人はカフェへと入っていった。もちろんミソラはちゃんと変装している。

「じゃあこのパフェ1つ、スバル君は？」

「えーっと。じゃあぼくはこれで」

「かしこまりました」

店員が行くとすぐにミソラはスバルに話しかけた。

「ねえ。この後どうする？ ショッピングする？ フラワー園に行く？」

「そうだな。ショッピングでも行こうかな？」

「決まり！ この後はショッピングだね。」

その後、パフェを食べた2人は町の中央にあるデパートへ行った。

「あ、この服可愛い！ こっちのも！ どれにしようかな」

「ねえミソラちゃん。もういいんじゃないの？」

「ダメ！ もっと買うの！ あ、こっちも可愛い。」

当然荷物係のスバルは両手がいっぱいだった。

「もう無理。持てない……。」

「なに寝ぼけてるの？ハンターに荷物を分子化して入れたらいいじゃない」

「あ……。そういえばそんな機能あったな」

スバルは即荷物を分子化してハンターに入れた。

《うお！なんだこの膨大なデータは！》

《わがまま言わないの。》

そしてあっという間に時間が経ち、夕方。

「今日は楽しかった」またこようね」

「うん。」

スバルにとっての初デートはとても楽しかった。

第13話「初デート」(後書き)

終わりです。

感想まっています。

第14話「ソロ激怒」(前書き)

ビースト・アースがアポロンのデータを元にノイズシステムを組み込んで、ダークアポロンを製造します。

第14話「ソロ激怒」

「スバル家」

「ただいまー。」

「おかえり。2人共どうだったの？」

「まあまあ。」

ミソラがご機嫌に言うと、あかねは「満足そうね」「と心の中で思った。

「晩ご飯はどうするの？」

「あ、もう食べてきたよ。」

「そう。じゃあもう寝なさい。」

「はい。」

「今度は私がお風呂入ってくるね」

ミソラはそう言って1階へ行った。

《俺たちはどうすんだ？》

「暇だからウェーブロードを散策しよう」

《そうだな。ウィルスでも倒して腕を上げとくか》

「トランスコード、シューティング・スター・ロッキマン」

スバルはミソラが風呂から出てくるまでの間、ウェーブロードを散策することにした。

（B A 基地：研究所）

「製造の調子はどうだ？」

「はい。順調ですボス」

「アラン、お前の成果を見ていて思っんだが、お前は研究員をやめて戦闘部隊に配属しようと思っんだが・・・」

「構いませんが、この研究が終わってからでいいでしょうか？」

「ああ、いいだろう。それにしてもこんな弱い電波体があのムーに作られたかと思うと笑えるぞ・・・ククク・・・」

「そうですね、フフフ・・・。」

「ノイズデータの組み込みは済んだか？」

「あと少しです。データが複雑でしたので組み込みが遅くなりました」

「フフフ・・・この作戦が成功したら電脳獣などひとひねりだ。」

「そうですね。名づけるなら”ダークアポロン”というところでしようか」

「フム……なかなか悪にいい名じゃないか」

「ありがとうございます」

「ムーなどこいつがいればすぐに潰せるほどの弱い組織だったようだな」

「ツク！さっきから黙って聞いてたら……貴様ら！」

奥から突然ソロが現れた。

「貴様……確かソロとか言うムー人の生き残りの子孫か。どうやってここを突き止めた」

「そんなことはどうでもいい！貴様らは俺の中に流れている”血”が今の言葉を許さない……！」

「アラン……厄介だ、殺れ」

「了解。電波変換、アラン……オン・エア！」

「トランスコード001……ブライ！」

2人は電波変換して構えた。

「ラプラス！」

「剣を使うのか……近接戦闘だな。だが俺は遠距離向きでね。相性最悪さ。この俺、アラン・ブリザードには勝てないぜ」

「それはどうか？ブライブレイク！」

ブライはラプラスソードを勢いよく地面へたたき付けた。

「なかなか力強い攻撃だね。こっちも行くぜ。バスターエディット、アイス・キャノン！」

アランは氷の玉を撃った。

「そんな攻撃食らうか！」

ブライはソードで氷の玉を砕いた。

「なっ！」

ブライは自分のソードを見て驚いた。なぜなら砕いたはずの氷がソードに張り付いていたからだ。

「フフ…それでは使えないね。使えたとしても砕け散るだけだよ」

「つく！ならばラプラス…休め。俺の技が近接戦闘だけじゃないことを教えてやる！ブライナックル！」

ブライは右腕のここのヤミからいくつものパンチを出した。

「打撃が飛んでくる！」

アランは受身をとって防いだ。

「まだまだ！ブライバースト！」

今度は闇のグラウンドウェーブが3つ飛んできた。

「く……」

アランはかろうじて避けた。しかし避けたせいで製造中のアポロンを包んでいたガラスが割れた。

「しまった！まだ完全でないのに！」

完全ではなかったが89%は完成していた。

「……………」

「アポロン！ついに復活してしまったか」

「ブライ……貴様はムーの生き残りか……生き残りは俺一人で十分だ……消えろ！」

「なんだと！邪魔をするなら倒すまでだ！」

「ダークトルネードフレア！」

赤黒い竜巻がブライを襲った。

「は……早い！」

ブライは避けきれずに竜巻を受けた。

「まだだ！ダークメテオフレア！」

今度は隕石がブライの上から落ちてきた。

「ぐあああああ！」

2つの攻撃を立て続けに受けたブライは倒れこんだ。

「終わりだ……サン・フレア！」

アポロンは巨大な炎の球体を出すと、ブライにぶつけた。

「ぐああああああ！」

「なんと強い力なんだ！フハハハハ！いいぞ、アポロン！その調子で電腦獣を潰してしまえ！」

「はい……」

「あぐ……くそ！」

「アラン……ソロは牢へぶち込んでおけ」

「了解」

第14話「ソロ激怒」(後書き)

ソロが敗れました。

感想まっています。

第15話「アポロン、ノイズ率急上昇！」（前書き）

今回は完全ではないアポロンが暴走します。

第15話「アポロン、ノイズ率急上昇！」

～B A基地：監獄塔～

「ここでおとなしくしておくんだな」

「つく！だまれ！」

「はいはい。ソロ君、そういうのを負け惜しみというんだよ」

「まだお前との決着はついてない！」

「正確に言えばお前はこの組織に負けたんだよ」

「つく！」

「ボスが来るまでおとなしく待つてな」

アランは部屋から出て行った。

「くそ！なんとかここから出る手段を見つけないければ」

ソロは電波変換を試みたが、牢の中は特殊な電磁波が発せられていたらしく電波変換できなかった。

「くそ！こうなったら奴が来るまで待つか……」

～B A基地広場～

「ボス。ソロを監獄塔へ連衡しました」

「ご苦労。さて、事情徴収をしてくるとしよう」

そついうと、ボスは出て行った。

「さて、俺は何をしようか。まだ完全じゃなかったアポロンでも整備しておくか」

アランはアポロンの整備に取り掛かった。

「アラン様。アポロンの状態は正常です」

「分かった。ジョーカー PGM の送り込みを続ける」

「はい。」

研究員が PGM の送り込みを再開したとき、コンピューターにエラーの文字が浮き上がり、アポロンを固定していたパイプから煙が噴出した。

「なんだ！どうした！」

「はい！どうやら、アポロン体内のノイズ率が上昇し始めたようですね、上昇をストップできません！」

「何！」

「だめです！ノイズ率が300%を越えました！」

「くそ！なんとか止める方法は？」

「ありません！」

その時、警報が鳴った。

「!!!!!!!!!!」

「今度はなんだ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああ・・・・・・・・ア・ア・・・・アポロンが・・・・」

研究員はその言葉を残して、炎に包まれた。アポロンが暴走したのだ。

「くそ！電波変換！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・た・・・・お・・・・す・・・・」

アランはその後、考えることもなく研究塔は一瞬にして赤い光に包まれた。

～牢獄塔通路～

「！！！！いたいなんだ！」

「報告です！どうやら研究塔にいたアポロンが暴走したらしく、研究塔そのものが崩壊寸前です」

「ふふ・・そんなこと私の計画のうちだ。あわてることはない。」

「ですが．．．アラン様も瀕死の重体で．．．」

「分かった。私が出よう」

「．．．ですが、あの破壊力だとこの基地が．．．」

「構わん。この基地が壊れようと知ったことではない。この基地全域に伝える。避難して別の基地へ移れと」

「りよ．．．了解しました」

そういうと1人は放送へと取り掛かった。

「さて．．．私も久しぶりに暴れるとするか．．．」

第15話「アポロン、ノイズ率急上昇！」（後書き）

ついにボス始動！あ……ボスの名前言ってませんでしたね。名前……名前………なにか良い案があれば感想にかいてください！

第16話「ジェネシス・ブラスト」(前書き)

ボスの名前募集しましたが、その前に思いついたので発表！ハントです。

第16話「ジェネシス・ブラスト」

「研究塔」

「ぐ……はぁ……はぁ……」

アポロンはその後も研究塔で暴れ続けた。

「ああああああああ！ここは……どこだ……！私は……
……いたい……」

記憶を失くしていたらしく辺り構わず燃やし尽くした。

「ああ……。私たちの研究所が……」

避難していたものは、虚しい気持ちだった。

「いままでのデータが……全部……」

いままでの研究データをなくした研究員たちは、心の奥から悲しんだ。

「はぁ！はぁ！ぐおおおおお！」

「そこまでだ……。アポロン……。おとなしくしてもらおうか」

「なにを……。この私が負けるとでも……。はぁ……。思つか！」

「今に見せてやるぞ。」

「この！サン・フレア！」

アポロンは太陽の玉を投げつけた。

「その程度か？」

「甘い！プロミネンス・フレア！」

今度は、部屋の4方8方からプロミネンスが吹き出した。

さすがのハントでもこれには気づかず、攻撃を受けた。

「ぐ・・・やるな・・・。だが貴様はもう攻撃はできんぞ！」

「なに？そんなわけない！いくぞ！トルネード・フレ・・・！！？
??」

アポロンは攻撃を出す前に今の状況に気づいた。

「なんだこれは！体が・・・動かない・・・！」

「スパーク・ロック！」

アポロンは電気を帯びたワイヤーで動きを封じられていた。

「くそ！これでは！電流のせいで、身体が動かない・・・」

「その電流を浴びると、身体機能が麻痺するんだ・・・。これで終わりだ！」

ハントがその言葉を言うと、研究塔の真上に黒い穴が現れた。

「ジェネシス・ブラストオオオオオ！」

その技は、一瞬にして研究塔を破壊した。その光線は地面に当たったら、周りにつてもない衝撃波を飛ばした。

「うわああああ！と・・・飛ばされる！」

それこそ、基地が一瞬にして破壊された。

「ボスの奴・・・また派手にやりやがった。まあ、これでしばらく俺の行動には気づかれないさ。」

遠くで見ていたアフリコットは基地がやられて追跡機能で探されないことを喜んだ。

「さて・・・計画を実行に移すか・・・いいか？ジンジャー」

「はい。アフリコット様」

ジンジャーと呼ばれる人物はアフリコットの部下である。

「いよいよ、ロックマンを潰す時がきた・・・ククク・・・」

第16話「ジェネシス・プラス」(後書き)

終了!次回をお楽しみに。

感想まっています。

第17話「組織から出た悪魔」(前書き)

前回より2週間くらいすぎていました(・
□・
) ?

第17話「組織から出た悪魔」

「B A基地跡地」

「ハント様！お怪我は？」

「無い。大丈夫だ。それで、これから行く場所は？」

「はい。そのことですが、B Aの勢力で一番高いのがオーストラリア地区、一番近いのがマリアナ海溝海底基地です」

「そうか。確かオーストラリア地区にはレイの双子のレンがいたな」

「はい。ですが只今はWAXAオーストラリア基地を奇襲中ですの
で2日ほど基地にいません」

「構わん。いくぞ」

「了解しました」

B Aはオーストラリア地区へ向かった。

「スバル家」

「起きて！ねえ！起きてっばー！」

「うーん。まだ眠いよ・・・」

「そんなこと言っていないで、遅刻するよ！今何時だと思ってるの？」

「ん・・・」

スバルは時計を見た。

「あ~~~~~！やばい！遅刻する！」

スバルが見た時はもう8時頃だった。

「私先に行ってるからね」

「うん。僕もすぐ行くから」

「じゃ、学校でね」

ミソラは電波変換して学校へ行った。

《俺たちも急ぐぞ。早く食べる》

「分かってるよ。」

スバルはお茶でご飯を飲み込んだ。

「いってきま〜す」

「いってらっしゃ〜い」

スバルは全速力で走り出した。

「急がないと」

「ふん！あいつ前とまったく変わってないな」

ビルの屋上からアフリコットが見て言った。

「アフリコット様。準備が整いました」

後ろからジンジャーが言った。

「よし。じゃあ今から星川スバルのいる学校へ行く。おもいきり暴れてやる！」

2人は学校へと向かった。

「ふう〜ギリギリセーフ！」

「おい！星川！おもいきり遅刻だぞ」

「え？なんで？」

その時、委員長が言った。

「スバル君。昨日先生が言ってたでしょ？学校の都合で早く始めるって」

「あああ！そうだった！忘れてた」

「いいから早く席につけ」

スバルはしぶしぶ机に向かった

「それじゃあ授業を再開する。まずここは・・・・・・・・・・・・・・・・」

スバルはそのまま授業を受け始めた。これから起こることをしらす・・・・・・・・

キーン・コーン・カーン・コーン・・・・・・・・

「はい！これで午前の授業は終わりだ」

「やっと午前が終わった」

「私売店に行つて来るね」

「うん」

「ククク・・・・いよいよだ。ジンジャー、始めるぞ」

「了解しました。電波変換、ジンジャー・オン・エア」

ジンジャーは黄色い帯に包まれ、数秒経って出てきた。

「ストライク・ジンジャー」

その姿は、全体的に黄色く、体の側面にある白色は速さを引き立たせた。ポケモンでいうデオキシスのスピードフォルムみたいだった。

「いきます！スラッシャー・ボール！」

ジンジャーの放った無数の球体は学校中の壁、扉、柱などを切り裂いた。

「きゃあああ！何？」

「うわあああ！なんだ？」

「なにがおこっているんだ？」

学校中の生徒たちは叫んだ。

「ロック！これはいったい？」

《わからねえが、この学校のどこかに犯人がいるはずだ！それにこの球体は学校中に散らばってるみてえだから気をつけるよ》

「うん！トランスコード！シューティング・スター・ロックマン！」

スバルは電波変換して搜索を開始した。

「ついに動いたな、ロックマン。ジンジャー、もっと攻撃範囲を拡

大しろ」

「了解しました。 はあああ……… ゆけ！スラッシュ
ヤー・モスキート！」

今度はジンジャーの手のひらから20cmほどの電気を帯びたモスキート（蚊）が大量にとびだした。

「モスキートたちよ、攻撃範囲は構内にとどまらず、町へも範囲を広げる！」

モスキート達は半分に分かれて学校と町に分かれた。

《くそ！奴らめ！また何かを出しやがった。こんどはすばしっこい奴みてえだから気をつけろよ》

「うん！ロックバスター！」

スバルの放ったバスターは3つの球体を破壊した。

「このままじゃ学校どころか町まで………」

《スバル！この電波たちの発信源をつきとめたぜ！町のハイタワービルの屋上からだ！この学校から近いからあそこを選んだんだろうな》

「急ごう！早く止めなくっちゃ！」

第17話「組織から出た悪魔」(後書き)

学校大ピンチ！ミソラの出番が少なくなったような？

感想まっています。

第18話「流星VS疾風」(前書き)

みてにえ

第18話「流星VS疾風」

「スバルサイド」

「あ！あそこだ！」

《見つけたぜ！あそこから妙な電波をばら撒いてやがるんだ！》

「とめなくっちゃ！いくよ！」

《おう！》

「学校：3人組サイド」

「なあ、委員長。さつさどこ逃げたほうがいいぜ？」

「そうですよ！スバル君ならたぶん先に逃げてますよ」

「いいえ！グラウンドも見ても町を見下ろしてもスバル君の姿が無いのよ！さつさと見つけ出して逃げるわよ！」

「いないって事は・・・まさか、ロックマンになってるんじゃないでしょうか？」

「ありえるな」

「ロ・ロックマン様に？だったら急いで逃げましょう！私たちが死んだらどうするの？」

「（さつきまで逃げないって言ってたの誰だよ・・・）」

「ほら！さつさと来なさい！」

「あ！待ってください！委員長」

　　ミソラサイド

「何なのよ！これ！」

《どうやら逃げたほうがよさそうね》

「あれ？スバル君は？」

《そついえば見当たらないわね・・・》

「もう！スバル君は彼氏なんだから！まず1番に彼女を助けにくるでしょ？」

ミソラは激怒した。

《ま・・・まあまあ。落ち着いてミソラ。今はここから離れるのよ》

「分かった」

そのままミソラは電波変換した。

「スバル君の電波。感じる？」

《うっん。感じるけどここから遠いわね。学校の外みたい》

「OK!じゃあ行くわよ!」

「スバルサイド」

「やめるんだ!」

「ん?星河スバル・・・ロックマンか・・・予定より早いな・・・」

「そうですね。隊長、殺っちゃってもいいですか?」

「・・・ギリギリ生かしておけ」

「ラジャー
了解・・・」

「何をごちゃごちゃ言っているんだ!」

「せつかちだな。じゃあ・・・こっちから行かせてもらっよ・・・」

「

その瞬間ジンジャーは姿を消した。

「!!!! どこだ、どこへ行った!」

《スバル!後ろだ!》

「え?」

スバルが気づいたときはもう遅かった。

「遅いよ・・・!雷神の槍!」
ライジングスピア

その時、ジンジャーの手に突然雷の槍が現れ、ロックマンを突き刺した。

「ぐああああ！」

《スバル！》

「あれ？隊長・・・話と違いますよ？」

「本当だな・・・」

「く・・・がは！・・・」

スバルは横腹を刺さっていて並のダメージではなかった。

「ぐ・・・はあ・・・ああ・・・」

《スバル！ アレをやるぞ！》

「うん・・・わがった・・・」

「アレ・・・ってなんだい？」

「今みせてやるさ！」

第18話「流星VS疾風」(後書き)

感想まってます

第19話「流星VS疾風 第2ラウンド」(前書き)

前回は無理やり持ってきた感じですね

第19話「流星vs疾風 第2ラウンド」

「うおおおお！」

叫んだスバルの周りには砂埃がたっていた。

《うおおおお！いくぞ、スバル！》

「うん！獣化システム！」

スバルは獣化システムを起動した。

「隊長」。なんか奥の手つてのがでてきましたよ」

「――獣化システム・・・起動・・・ファルザー・・・オン！ピース
トアウト・・・――」

スバルは赤い球体に包まれた。

「ふん・・・・・・・・。これが奥の手？」

スバルは球体を破って現れた。その姿は、暴走した時とは違い、
うすい赤色をし、赤と白の翼、鋭い爪が備わっていた。

「それは・・・電腦獣の力を使ったな？」

「そつだ！」

《成功だな！》

「うん！それじゃあ次はこっちから行かせて貰うよ！」

「お手並み拝見か・・・」

「いくよ！フェザーシュート！」

次の瞬間、スバルの翼から6枚の鋭い羽が飛んできた。

「早い！」

ジンジャーはとっさに避けたが、4枚の羽がジンジャーの腕に刺さった。

「ぐっ！なかなかのスピード攻撃だね・・・でもこれを避けられるかな？極龍ドラゴン・ボイスの咆哮！」

その攻撃はジンジャーの手首の部分にあつた機器から何かが飛んできた。撃った本人にも反動があつた。

《くるぞ、スバル！》

「分かつてる！」

「それは音速のスピードだよ！避けれるものか！」

スバルは間一髪避けたが、攻撃はビルの窓で跳ね返り、再びスバルの方向へと向かってきた。

「なっ！」

スバルは攻撃をもろに受けてしまった。

「うあああ・・・くそ！」

「だから言っただろ？避けれないって・・・」

「この！・・・うつ！（体が・・・重い・・・）」

《どうした！？さっさと起きろ！》

「体が・・・重いんだ・・・」

「ハハハ！さっきの僕の攻撃はダメージだけでなく、君の神経にも影響するんだ・・・」

「くそ！どうにか起き上がれば懇親の一撃を打ち込めるのに！・・・」

「もう君に勝ち目は無いよ・・・」

ジンジャーがとどめを指そうとした時！

「ショックノート！」

どこからか、音符が飛んできた。

「くそ！だれだ！出て来い！」

ジンジャーが見上げると、そこにはハーブ・ノートが立っていた。

「私のロックマンに手を出さないで！」

「ほう．．．もう１人いたのか．．．」

「もう１つちょ！ショックノート！」

ミソラは攻撃を放ったが、簡単に避けられてしまった。

「邪魔だよ．．．雷神の槍！」
ライジング・ランス

ジンジャーは槍を取り出すと、ミソラの足元へ投げた。

「きゃあ！」

ミソラは足場を失い、そのまま下へと落ちた。

「これで邪魔者はいなくなった．．．さて．．．とどめを．．．
！！！！」

ジンジャーがロックマンの方を向いたとき、突然意識が薄れた。

「あぐ．．．なんだ．．．」

「はあ．．．やった．．．」

《どうだ！》

ジンジャーはその場に膝を突いた。

「あが・・・なんだ・・・その技は・・・!!」

気づくと、ジンジャーの体を鋭い爪が貫通していた。

「赤鳥の一撃・・・ファルザー・インパクトだ・・・」

「ファルザー・・・イン・・・パクト？」

「僕が倒れている間に、パワーを溜めていたんだ・・・この爪にね・・・そして、パワーを溜め込んでいた爪を相手に刺すことで、内部でパワーが爆発を起こすんだ・・・」

「爆破・・・だと？」

「現に・・・そんな体が吹き飛ばような技じゃないさ・・・せいぜい神経を麻痺させるような小規模な爆発だ・・・。大丈夫、刺した場所は急所じゃない・・・」

「フンツ！今回・・・は・・・俺の・・・負けだ・・・」

ジンジャーが意識を失くし、電波変換が解けた。

「フン！ジンジャー・・・失うには惜しい力だ・・・」

「さあ！次はお前だ！」

「んゝ。でも・・・今は戦う気じゃないな。WAXAのリーダー君よりは強そうだけどねえ」

「WAXAの・・・まさか！お前がやったのか！暁さんを！」

「ふゝん。あいつ暁っていうんだ・・・覚えておこう・・・」

アフリコットはそのままジンジャーのそばに来て体を起こし、背負って去ろうとしたが、呼び止められた。

「待て！まだ決着はついていないぞ！」

《そうだ！ついでにやっつけてやらあ！》

「威勢はいいけどそんな生半可な覚悟じゃあ、この先死ぬぜ？」

「なっ！」

「じゃあな・・・また来るぜ・・・」

「待て！」

しかしアフリコットは行ってしまった。

「BA・・・いったい何を考えているんだ！それに・・・さっきの言葉・・・」

スバルはその場で電波変換を解いた。

「スバルくゝん！」

「ん？」

スバルはビルの下を見た。

「ミソラちゃん!？」

「驚いてないで助けてよ」

そこには服が引つかかって降りれないミソラがいた。幸い、電波状態だったので町の人々には気づかれていない。

「はーやあーく」

スバルはもう一度電波変換してミソラを助けた。

「はあ・・・世話がやけるなあ」

「どっちがよ!朝は起きないし、学校の連絡も忘れてるし、おまけに彼女をおいてふらあーっとどっかにいっちゃうし!」

ミソラの言った言葉はスバルの胸に鋭く突き刺さった。

「(そういうミソラちゃんなんでもズバズバ言うところ・・・どうかな・・・)」

「ん?何か言った?」

ミソラの周りには黒いオーラに笑顔だった。

「な・・・なんでもない!」

「そっ!じゃあいいよ。早く戻ろ!」

ミソラはさっさと行ってしまった。

《あいつの性格どうにかならんものかな？聞いてるこっちもつかれるぜ》

「きつとハープの癖が移ったんじゃない？」

スバルはそのままミソラの後を追った。

第19話「流星VS疾風 第2ラウンド」(後書き)

終了です。

感想待ってます。

第20話「コスモウェーブのアイツ！」（前書き）

ちわっす。なかなかネタが浮かばない。

第20話「コスモウェーブのアイツ！」

「ちょっとスバル君！いたい何処いったの？」

「え．．．ひ．．．避難してた！そのビルに」

「ふゝん．．．避難．．．ね」

ルナは疑った目でスバルを見た。

「そ．．．そうだけど．．．」

「それでどうして．．．ミソラがいるの！？」

「そ．．．それは．．．」

「スバル君が敵に苦戦してて危なかったから私が助けたんだよ！」

「ちょ．．．ちょっと、ミソラちゃん」

「いいでしょ？本当のことなんだから」

ミソラは上機嫌で言った。

「ふん！まあいいわ。ところで、この学校建て直すことになったらいいんだけど．．．」

「そりゃあ立て直すだろうね。この状態じゃ．．．」

「柱も壁もボロボロらしいわ・・・このままだと危ないって」

「じゃあ私たちこれから何処に通うのかな？」

「分からないわ・・・」

《ま！どうにかなるだろ？》

「ロック・・・そう簡単に言ってるけど、学校探すのって結構大変なんだよ？1年から3年まで転校するんだから」

「そういうの集団転校っていうんですよ」

キザマロが横から顔をだした。

「そういう豆知識いちいち知らないわよ」

ルナが言った。

「うっう・・・」

キザマロの心になにかが突き刺さった。

「委員長・・・キザマロが・・・」

「ん？あつ！ご・・・ごめん」

「いいんですよ。委員長」

4人で話していると、グラウンド側からゴン太が走ってきた。

「おゝい。皆」

「あら、ゴン太。どうだったの？」

「今日はこれで解散だって。明日から学校見つかるまでの間、学校が見つかるまで休みだってさ」

「本当？やった〜！」

ミソラは歓声を上げた。

「これで想いっきり朝寝れる〜」

スバルが言った。

「スバル君、朝はちや〜んと起きるのよ」

ルナが言ったが、顔は笑顔、内容には怒りの気持ちが入っていた。

「2時間前のコスモウェーブ」

「さっさとどけ・・・」

「YO！じゃあ俺の歌を聴いていけYO！」

ハント率いるBAは、ムーンディザスターに足止めを食らっていた。

「お前の歌を聴いている暇はない・・・そこをどくんだ・・・」

「どうしても通りたいのか？じゃあ俺と勝負だYO！」

「めんどくさいが・・・いいだろう・・・」

「ボス・・・私にやらせて下さい」

「レイか・・・いいだろう」

「ありがとうございます・・・」

「なんかいろいろ話してるが、早くやろうぜ。それとも、歌のほう
がよかったかYO？」

「そんなわけないだろう？さっさとはじめろ・・・」

「YO~~~~~！」

こうして、ムーンディザスターとレイの戦いが始まった。

第20話「コスモウェーブのアイツ！」（後書き）

ムーンディザスター書いてみました。「YO」の使い方はゲーム
持ってるので大丈夫です。

感想待ってます。

第21話「リミッター解除！」（前書き）

ちわっす。阿修羅です。前回から出てき始めた、ムーンディザスターですが、「YO」がありましたよね？自分では分かっています
が、もし使いどころが間違っていたら言ってください。あと、ム
ーンディザスターっていちいち書くの大変ですので、「ムーン」に
省略します。

第21話「リミッター解除！」

「YO」。ムーンスピン！」

ムーンは三日月型のカッターを4つ放った。

「そんな攻撃！炎の柵^{ファイヤー・サークル}！」

レイは炎のバリアをまとい、攻撃を阻止した。

「YO！なかなかやるじゃないか。じゃあこれはどうかな？」

ムーンは手のひらに月のような球体を出し、

「YO！ムーン・バズーカ！」

球体をレイに向かって投げた。

「早い！」

レイは避けようとしたが、間に合わず直撃した。

「ぐああああ！くそっ！」

レイは吹き飛ばされて、着地しようとしたがバランスを崩してその場に倒れこんだ。

「つぐ！足が・・・！」

レイは膝をやられていて立つのがやっとだった。

「YO～！もう終るかYO～」

「つく！まだだ！」

レイは浮き上がり、攻撃態勢へと入った。

「（接近戦はきついな・・・なら！）」
「獅子の幻影火！」
レオ・ヴィジョンフレア

レイは、両手からライオンの形をした炎を4体出した。

「YO！ライオンか？」

ムーンは、それを華麗に避け、一瞬で何処かへ消えた。

「なっ！どこだ！」

レイは辺りを探した。

「どこにも・・・」

レイが言いかけた瞬間だった。横から金色の者が回ってこっちに
向かってくるのが分かった。

しかし気づいた時は遅かった。

「YO！ムーンサルトキック！」

ムーンは回転しながらレイを蹴り去った。

「ぐああ!」

ムーンは現れたと思ったら再び消え、今度はレイの頭上に現れた。

「まだだＹＯ〜! ムーンサルトキック、踵落とし!」

踵落としはレイの頭に直撃した。

「ぐはっ!」

「なんかもつと手ごたえのあるやついないのかＹＯ〜」

レイはその言葉を聞いてレイの中の何かが切れた。

「あゝ・・・そうかい、そうかい。じゃあ見せてやるよ・・・」

「やっべ! レイが切れぞ! 皆〜離れろ!!!」

「ＹＯ? まだ力があつたのか?」

「私を怒らせたらどうなるか分かる?」

「さあな?」

「はああああ・・・リミッター・・・解除!」

レイは手を合わせて精神を集中させた。

「はああああ!」

レイは一揆に力を爆破させ、周りには爆風が響いた。

「YO~~~~。さすがにパワーアップすぎだYO~~~~！」

ムーンは半分笑いと半分恐怖だった。

「ふん！笑ってられるのも今の~~~~うちだ！」

第21話「リミッター解除！」（後書き）

変？な所で切りました。

感想待ってます。

第22話「コスモウェーブ崩壊寸前」(前書き)

ちわっす。続々と更新中です。 ということで22話始まるよ。

第22話「コスモウェーブ崩壊寸前」

「うらああああー！獅子の業火！」
レオ・ブレイザー

「YO~~~~！ムーンスピン！」

2人の放った攻撃は中央でぶつかり合った。

「YO~~~~！まだまだいくぜ！」

ムーンはさらに回転を加え、カッターを飛ばしまくった。

「フフフ……いくら数を増やしたところで……この炎は破れない！」

「これが俺の真骨頂と思ったかYO~~~~！俺の中でもほぼ最強の技！」

ムーンは回転を止め、宙に浮かんで背後にいくつものカッターが現れた。

「いけ！ムーンカッターアア！」

「いくら数を増やしたって無駄だと言ったはず……！！！？？
何だ！」

「YO！これは数じゃないぜ？たしかに数は増しているが、1つのカッターに見えるものは普通のカッターが5つ重なって1セットになっているんだYO~~~~！！」

「なるほど．．．いくつものカッターが重なって1つに見えるわけか．．．」

「ＹＯ＼！そして回転が最大に達した時、攻撃力が最大へと変化するんだＹＯ＼！」

「くそ！確かにだんだんと攻撃力が上がっているな．．．．だが！」

レイは一旦攻撃をやめた。

「ＹＯ＼！お前は馬鹿かＹＯ＼！攻撃をやめるなんて、自殺行為に値するＹＯ＼！」

レイは目を閉じ、静かに立ち尽くした。

「とどめだＹＯ＼！！！！これで歌を聴いてもらうＹＯ＼！」

「レイ！危ない！」

見ていた仲間達は叫んだ。

攻撃はレイの目前に迫っていた。

「これで終りだＹＯ＼！！！！！」

ムーンの放った攻撃が当たろうとした時！

「はあああああ！」

ドオーン！ という衝撃派と共にカッターがすべて灰と化した。

「何っ！？」

ムーンはいきなりの反撃にどうしていいか分からなかった。

「はああああ！ 終りだ！ 貴様も灰となるがいい！ 灰化！」

レイは両手を出し、衝撃派を四方八方に放った。

「YO！ なんだ？ とにかくガードだYO！」

ムーンはガード体制に入り、カッターで周りをおおった。

「無駄！ この技の前ではすべてが灰と化す！」

「YO・・・ガ・・・ガードが・・・」

ムーンが気づいた時には周りをおおっていたガードの大半が灰になっていた。

「残りは前方と後方だけか・・・なら前方に集中すれば・・・」

ムーンは前方にガードを固めた。

「出力を上げるよ・・・これであなたもおしまいよ・・・！」

レイは忠告をした後、出力を一揆に上げた。

「YO！ さすがにやばいぜ・・・」

「はあああああ！」

辺りを眩い光が包み込んだ。

「YO・・・なかなか効いたぜ・・・」

ムーンはもう既に半壊デリート状態だった。頭の三日月は半分程に縮まっており、足も左足が膝まで無くなっていただけでなく、右腕がすべて分子化しており体力も限界だった。

「フン！そんなみじめな姿になってまでもここを通さないつもりか？」

「YO・・・そこまでして・・・ここをとめる必要はないYO・・・」

「ま・・・でもここを通らなくても、回りがめちゃくちゃだからな・・・」

そう、ここ、コスモウェーブはさっきの技の影響で崩壊していたのだ。

「レイ・・・ちょっとやりすぎじゃないか？」

「ボスも基地を丸ごと消し去ったじゃない？」

「ま．．．いいか．．．先を急ぐぞ」

B Aはそこを通り、オーストラリアへ向かった。

時を同じくして地上。

「う．．．ああ．．．」

「起きたか．．．」

「すまない．．．」

「いいさ．．．あれは予想外の出来事だ．．．誰にでも予測できないことぐらいある」

「はあ．．．で、これからどうする？」

「まずは、少しの間、奴らの行動を見張るとするか．．．」

「俺は力になれそうにないな．．．」

「心配するな。傷が癒えるまでおとなしくしてろ。次は俺が出る．．．」

•
•
L

第22話「コスモウェーブ崩壊寸前」(後書き)

ムーンディザスターがやられちゃいました。でも復活させます。
感想待ってます

第23話「修行へ・・・」(前書き)

ちわっす。スランプ脱です(^ ^ *) ! とうわけで23話始
まります。

第23話「修行へ・・・」

「うあゝゝ。今日から休みゝゝゝ！」

スバルはベッドの上で伸びた。

「この1ヶ月ほど、なにしようかな？」

《俺は休みよりバトルのほうをしたいぜ》

ロックはさりげなくスバルを誘った。

「いやだよ、ロック。こんなことめつたにないんだから」

《ちえ！（奴らからいつ襲撃がくるか分かんねえ時に・・・）》

2人が話していると、部屋にミソラが入ってきた。最近ミソラ用の部屋も出来たようだ。

「おはよう、スバル君。今日から連休だね♪」

「うっ！-」

スバルは感じた・・・。

「連休中どこいこつか？デパート？遊園地？」

「（やっぱり・・・）」

スバルはミソラのおねだりする時の感じを認識していた。

「ミ・・・ミソラちゃん。せ・・・せっかくの連休だし、戦いの時に備えて修行に行こうと思ってるんだけど・・・」

《よっしゃ！》

ハンターの中でロックが歓声を上げた。

「修行ね？？私は遠慮しておくよ」

ミソラは部屋から出た。

「（よかった）。逃れられた。」

《で・・・修行の話は本当だろうか？ス・バ・ル？》

「ギクツ！そ・・・それは・・・（しまった！ミソラちゃんを誤魔化すために適当なこといっちゃったんだ！）」

《本当だろうか？》

「ほ・・・本当だよ」

《じゃ、今からでも出発しようぜ》

「ええええ？今から？」

《そつだ。お前が言ったんだろ？》

「うっ……分かった。じゃあせめて午後から」

《OK》

「（どうしよう……まずは、Z^{ゼー}の確保からだ……）」

スバルはリビングに下りて、アカネに修行のことを話した。

「と、言う訳で修行に行くことにしたんだけど……」

「スバル、修行に行つて強くなるのはいいんだけど、どうして今までのこと話してくれなかったの？」

「そ……それは」

「まあいいわ。それで、お金はあるの？」

「それが……」

スバルはハンターの画面に残量を表示した。

「5000Z……あなたそれだけしか持ってなかったの？」

「この前、カードとか買っちゃったから……」

「いいわ、10000Zは出してあげる。それ以外は自分でね」

「分かった。」

スバルはハンターで受け取り、早速街で出た。

《どうした？スバル》

「やっぱり今から行こう・・・」

《なんだよ急に》

「僕がここにいたらこの街の皆が危険な目にあうからね・・・」

《そうか・・・で、どこに行くんだ？》

「八木君に鍛えてもらおう、アメロツパだ！」

第23話「修行へ・・・」(後書き)

次回、アメリopp&番外編スタートです。

感想待ってます。

第24話「長旅」(前書き)

お久しぶりっす〜！この1ヶ月間練りに練って考えた修行編です。
(1ヶ月の内1週間程はポケモンにはまってましたwww)

第24話「長旅」

「コダマタウン」

「……………で、スカイウェーブからだったけ？」

《アホか。今はコスモウェーブがあんだろうが！》

スバルは長い間アメロッパへ行つてなかったので行き方を忘れていた。

「ゴメン、ゴメン」

《しっかりしやがれ》

スバルは気を取り直してコスモウェーブに入った。

「コスモウェーブ」

スバルは電波商人に道を聞いていた。

「フムフム……………アメロッパかあ。ちょっと遠いなあ。ココからじゃ」

「遠くてもいいので教えて下さい」

「わかった。じゃあ言うで。ココから……………」

その後10分程の案内が続いた。

「……………いう道順や」

「は・・・はあ・・・（なんか途中で話それまくったなあ・・・）」

《無駄な部分が多いんだ！》

「よくいわれるわいな」

商人は笑った。

「で、道教えたんやし、なんか買って行ってや」

「じゃあ、これを・・・」

「まいど！3000Zになりやす！」

「ほい」

スバルは3000Zを渡した後、アメロッパへ向かった。

《ちゃんと道順覚えてんだろうな》

「うん。ちゃんと覚えてるよ」

スバルは周波数を変え、高速で向かった。

第24話「長旅」(後書き)

いちおう1話目はここで区切ります。

感想待ってます。

第25話「アメリッパでの出来事」(前書き)

ちわっす。修行編2話目です(^ ^ ☆)

第25話「アメロッパでの出来事」

「日本ーアメロッパ間」

「それにしても・・・」

《あんがい遠かったんだな・・・アメロッパって》

「別の場所にすれば良かったかな？」

《今頃そんなこと言うなよ・・・ここまで来て》

スバルとウォーロックのみ
スバル一行はアメロッパの20キロ前まで来ていた。

「やっぱり最初に周波数移動を使ったのが響いたか・・・」

《だからやめろっていったらさ》

「ロックも調子に乗って、『もつといけ！』とか言ってたくせに・・・」

《ギクッ！そ・・・それは・・・》

ロックは対処不可能だった。だって事実なのだから。

「しょうがない、歩いて行くか・・・」

《そうするか・・・って》

「どうしたの？ロック」

《おい、アレ前スカイウエーブでもあったワープゾーンじゃないのか?》

「ん? あっ! 本当だ! 確かにスカイウエーブでも似たような緑色をしたワープゾーンあったね」

《さっそくアメリッパに行けるかあの管理人デンパに聞きに行こうぜ》

スバルは早速そこへ向かった。

「あの……」

《ン? ナンデショウカ?》

「このワープってアメリッパと繋がってますか?」

《アメリッパデスカ? ン……。ソレナラココカラ西二二キロホドススنداトロロニワープデキル場所がアリマスヨ》

「（ほぼ全部カタカナだ! やっぱ外国だあ……）あ……ありがとう」

スバルは西へ歩き出した。

「オキヲツケテ。ア、チナミニココハナンスカトツナガッテオリマス」

「ナンスカ!？」

スバルはビックリした。

「まさかナンスカと繋がっているなんてね」

《ああ……。驚いたぜ……》

「でも直接じゃないと思うよ」

《だろうな》

そしてスバル一行はワープゾーンにたどり着き、アメリッパコスモウェーブへワープした。

「アメリッパ・コスモウェーブ」

「うわぁ……。な……。なんだ、これは……。!」

《なんちゅうこっちゃ》

2人は着くと早々に大声を上げた。なんとコスモウェーブの上に瀕死ウイルスが散乱していたのだ。

「どうなってるんだ!？」

《わからねえ。でもだれかがやったに違いねえな》

2人が辺りを搜索していると、向こうの方で人影とウイルスの影

があつた。

「あ！あそこだ！」

《ん？でもどこかで見たことのある影だな・・》

「いわれて見れば・・・・・・・・・・」

「メエエエエ！」

奥で羊の鳴き声みたいなのが聞こえた。

「やっぱり！あれは八木君だ！」

《ゴート・カンフーだな》

スバルはすぐさま八木のもとへ向かった。

「おい。八木くん！」

「ん？あつ！スバル君！」

八木の方も驚いて駆け寄って来た。

「久しぶり！」

「こっちもだよ。で、そっちはどう？アメリッパは」

「うん・・・」

八木は急に黙った。

「どうしたの？らしくないけど・・・」

《ゴートもどうした。なんかあったのか》

《メエエエ・・・》

2人共黙りこくってしまった。

「実は、数日前に・・・アメリッパが襲われたんだ・・・」

「ええっ！？襲われたって？どういうこと？」

《ウイルスか？》

「いいや。あれはウイルスなんてレベルじゃないさ。獣だよ」

スバルは獣と聞いた瞬間なんのことか分かった。

「それってもしかして青いライオンみたいなの？」

「えっ！？なんで分かったの？」

「もうこんな所まで来ていたのか！」

《このままだとすぐ世界中をまわっちまうぞ！》

八木とゴートは2人の会話についていけなかった。

「いったい2人でなんのことを話してるの？」

《メエエエエ。教えるよ。何のことか》

「分かった。教えるよ。でもここじゃあなんだから下に下りよう」

2人はコスモウエーブを降りた。

くアメロツパく

スバルとウォーロックは下に下りて啞然とした。アメロツパの町がほぼ全壊していたのだ。展望台と牧場を除いて……。

「あんなに家や屋台が立ち並んでいたのに……奴が現れて数分でこのざまさ。僕も電波変換して応戦したが、オーラに弾かれて近寄れなかったんだ」

八木とゴートはしんみりと語った。

「それであそこでウイルスを倒してパワーアップしてたんだ。」

「僕と同じかもしれない……」

「え？」

八木はスバルを見た。

「僕も電脳獣や新しい敵に圧倒的なパワーを見せ付けられ、自分のパワーアップが必要と思ったんだ」

「それでここに？」

「うん。ツカサ君にと思ったけど、どこにいるのか不明だね。ここに来たんだ」

スバルは笑いながら言った。

「そうか……スバル君となら強くなれるかもしれない」

「そういえば説明がまだだったね。どこか話せる場所は……」

「展望台に行こう。あそこなら落ち着ける。ちょうど観光客もいないしね」

2人は展望台に向かい、スバルは電脳獣のこととBAのことを話した。

「そうか……スバル君もいろいろ大変だったんだね」

八木とゴートは同情してくれた。

「そつだ！どこか修行に最適な場所ってないかな？」

スバルは相談した。

「うん。今町でやると危ないから、やっぱりあそこかな？」

「どこ？教えてよ」

「蒼燕流の塔だよ」

「いつてみよう！そこへ！」

「でもあそこは未だに最後まで勝ち抜いた人はいないんだよ。僕でも3人が限界なんだから……。危険だよ」

「勝ち抜くって？3人？」

「蒼燕流の塔には9人の番人がいてね、1人目から草・水・岩・炎・闘・雷・霧・闇・氷の剣術の使い手がいるんだ。そして最後の10人目は龍を手なずけているという噂だよ」

「りゅ……龍！？」

《龍って……ドラゴンか？》

《メエエエ。龍といっても噂だがな。だれもたどりついたことは無いが、過去に4人ほど10人と戦い、勝利を収めている》

「4人！？たつたそれだけ？」

「その4人は今世界各地に飛び散っているって噂だけど」

「噂……ってまだ生きてるの？」

「らしいよ」

《腕が鳴るぜ！さつさとその10人と倒しに行こうぜ！スバル！》

「ま……待つてよ。まだ強さも未知数なのにいきなり行ったらコテンパンにされちゃうよ」

《つべこべいうな！さつさといくぞ！》

「さてよ。落ち着けサー。スバル君の言うとおりだよ。今から行ってもすぐやられちゃうだけだよ」

《……つけ！なら、さつさと修行しようぜ》

《メエエエ！じゃあまず手合わせからだな！》

「うん。」

「じゃあ……」

2人は息を合わせて言った。

『電波変換！』

2人の周りを光が包み込んだ。

第25話「アメロッパでの出来事」(後書き)

終了です。長かった。途中で休憩しまくった。

感想まっています。

第26話「vsゴート・カンフリー」(前書き)

こんにちは(^ ^ *) !テスト期間も終わったことなので、
更新を再開いたしまふ。

第26話「vsゴート・カンフー！」

「メエエ……。やっぱり迫力が違うサー……」

「そうかな……。いつもと変わらないけれど……。？」

《おいスバル。いきなり獣化はマズイだろ……。》

「え？わっ！いつのまに？」

スバルはいつのまにか獣化していたことに気づいていなかったのだ。

「やっぱり不完全だということも起きるんだね」

《だな……。》

「《だな……。》っじゃなくって、早く戻してよ！」

《そういわれても……。いろいろ回路が複雑だからよお……。》

「あっ……。あの……。」

「《ん！？》」

話しかけてきたのは八木だった。どうやら2人の会話についていけなかったらしい。

「ああ。ごめん、ごめん。手合わせが先だったね」

《もうこのままでいいんじゃないや・・・》

ロックが言おうとした瞬間だった。

「ああ！解けたよ。ロック。獣化が！」

《そりゃよかったサー。こちらもいきなりその格好でやられるとヤバそうだったからサー」

4人の会話はゴートの言葉で途切れ、ビリビリとした空気が漂った。

2人は10分程その場で立ちすくんでいた。沈黙が続いたがその空気を破る音がロックだった。

《うがああああ！もうなんだ！この空気！さっさと始めるよ！じれったい！》

「はぁ・・・ロックったら。相手の隙を窺ってるんだよ」

スバルが答え終わった瞬間だった。前方から蹴りが飛んできて、正面から受けたスバルはよろめいた。

「つぐ・・・やられたか・・・」

「油断は禁物だよ・・・ロック君の対処だとはいえ、簡単に隙を見せるとだめサー・・・」

「今度はこっちから行くよ！バトルカード、ヒートグレネード！」

スバルは八木に向かって爆弾を放った。

「そんな遅い攻撃当たるはずないよ」

八木は後方に下がり、弾を避けたが・・・。

ズバン！！！！

「なっ！」

爆弾は着弾と共に周りに火花を散らした。

「ぐわああ！こんな攻撃ってありかよ・・・」

八木は苦笑いしながら言った。

「まだだっ！バトルカード、タバフレイム3ギョラクシーアドバンス×3。GA！！！！」

スバルは3枚連続でカードをスロットして、GAを作り出した。

「ペインヘル・フレイムウウウ！」

スバルは両腕に黒い炎を灯し、ゴート・カンフーに向かって何発も飛ばした。

「うおっ！これは・・・はっ！さすがに・・・熱っ！やばいサー・・・」

八木は飛んでくる炎をかわしながら途切れ途切れに言った。

《オラオラ！休んでる暇はねえぞ！》

《それはお互い様の様だな．．．炎を飛ばす本人も消耗しているサ！》

「まだまだ．．．はあ．．．」

さすがのスバルも数十発もの炎を狙いながら撃っていると腕が疲れてきていた。

「ゴート。スバル君の隙が見えたら教えてくれ。ありったけのランスを打ち込んでやるからサ！」

《メエエエ。分かったサ！。分析開始！》

2人は小声で話し合ったが、少し声が漏れていたのがロックとスバルの耳に入ってきた。

《あの2人．．．なにか企んでやがるな．．．》

「そうみたいだね．．．じゃあこつちも何らかの策をとらないと．．．」

《攻撃はまだ休めるなよ。あつちの出方を窺うんだ。きっとあの草むらで巨大化するんじゃないか？》

「だね。じゃああそこ以外の草むらを全部なくしてしまえば．．．」

《巨大化するポイントが限られるな．．．そこで獣化するぞ》

「了解！」

スバルの炎の連打はいつそう激しくなっていた。

第26話「vsゴート・カンフー！」（後書き）

感想待ってます。

第27話「獣化敗れる!？」（前書き）

こんにちわ（^ ^*）阿修羅です。今日は10月31日です！
あゝもう11月ですねえ！
ということで始めます。

第27話「獣化敗れる!？」

「はぁ．．．はぁ．．．さすがに．．．やばいサー!」

《だが、いつか隙が出る》

「分かつてる．．．!」

八木は避けるのに精一杯で体力を消耗するばかりだった。

一方スバル側では．．。

《スバル、そろそろタイミングをずらせ》

「はぁ．．．はぁ．．．分かった．．．」

スバルは疲れきった口調で言った。

《おいおい．．．大丈夫かよ．．．》

「大丈夫．．．!」

スバルは上げ口調で言った。

《!!!! メエエエエ。今だ!》

「OK!」

スバルが一瞬攻撃するタイミングをずらした時だった。八木はサ

ッと残りの草むらに移動し、葉緑素を吸収し始めた。

「よし！作戦通りだ！」

《いくぜスバル！》

スバルはロックにシステム起動を任せ、自分は攻撃を休み、リカバリーを使って回復した。

《獣化システム起動！ファルザーPGM！》

獣化システム・・・起動！ファルザー・・・オン！ビーストアウト獣化！

スバルの周りを赤い光が包み込んだ。

《メエエエ！エネルギー吸収完了サー！》

「うおおおおお！」

八木の周りを緑の竜巻が包んだ。

「ガアアアア！」

ビュオオオオオ！っという轟音と共に周りに強風が吹き荒れた。

「メエエエエエ！」

ボオオオオオン！という音と共に今度は周囲に地鳴りが響いた。

「やっと本気で戦えるサー！」

「僕もだ!」

スバルは低い声で言った。

「メエエエエ! さっそく……行かせてもらっサー!」

「来い……!」

「メエエエエ!」

八木は瞬間的にスバルの前に現れた。

「!!!!!! 早い!」

「ゴート……ランス!!!!」

八木は少し溜めて巨大な2本角をスバルに向かって打ち込んだ。

「ぐああああ!」

「まだ1発の残ってるよ……!」

「つく……!」

八木は残ってる一発をスバルに向かって振りかざした。

「メエエエエエ!」

「くそっ!」

スバルは右手で受身を取ったが、腕からメキメキと音が聞こえた。

スバルは悲痛を上げ、吹き飛ばされた。

「うっう・・・」

「メエエエエ・・・もう終りサー？」

「くそっ！まだだっ・・・！」

スバルは立ち上がり、数メートル上空に浮いた。

「うおおお！フェザー・バルカン！」

スバルは鋭い羽を腕から無数に発射した。

「メエエエエエ。そんな攻撃、通じないサー」

八木は避けることなく、己の体で弾き返した。

「なっ！」

「獣化というものは、こんなものなのかサー！？」

八木は笑いかけると、スバルの場所までジャンプして来た。

「つく！」

「メエエエエ！ゴートスマッシュ！」

スバルは攻撃をもろに受けて地上に叩き落とされた。

第27話「獣化敗れる!？」（後書き）

感想待ってます。

第28話「獣化暴走（ビーストオーバー）」（前書き）

こんにちわ（^ ^*）久々の投稿です。少々短めだと思ひますが、読んでください。

第28話「獣化暴走（ビーストオーバー）」

「っぐ！」

スバルはドサッ！と音を立てて地面に落ちた。

「メエエエエエ。勝負ありサー」

《っへ！まだ勝負はついてないぜ！》

ロックは強い口調で言い放ったが、スバルは気を失っていた。

《スバル！起きろ！》

「メエエエエエ。やはり勝負ありサー。」

八木は巨大化を解き、元の大きさに戻った。

《つく！起きろ、スバル！まだ戦いは終わってねえぞ》

「ガ……ア……」

ロックが力をこめて言った最後の言葉はスバルでは無く、他の何かを突き動かした。

「ガ……ア……！」

《まさか……》

ロックは一瞬なにが起こったか分からなくなったが、以前に1度だけこの状態が起こった事を思い出した。獣化暴走^{ビーストオーバー}である。

《このポンコツプログラムめっ！早く停止しやがれ！》

ロックはハンターの中でP G Mにつかかったが、弾き返された。

「グ……ガア……！」

「スバル君？……一体どうしたんだい！？」

八木もスバルの異変に気づき、声を駆けたが、時は既に遅かった。

「ガアアアアアアアア！……！」

《つく！まずい！ゴート！早く止めてくれ！もう俺にはどうにもできねえ！》

「OKサー」

八木はもう1度草むらへ移動し、巨大化した。

しかし、八木が気づいた頃にはスバルの倒れていた場所には誰もいなかった。

「いったい何処に行ったサー？」

八木が辺りを見回していると突然ゴートが叫んだ。

《メエエエエ！上だ！ケン太！》

「えっ！？上？」

八木は一瞬どう対処していいか分からなかった。

「ギャアアア！」

スバルは八木に飛びつき、動きを封じた。

「くっ！放せ！スバル君！」

しかし八木の言葉はスバルに届いてはいなかった。

第28話「獣化暴走（ビーストオーバー）」（後書き）

終了です。

感想待ってます。

第29話「ブレイク・スマッシュ」

「ガアアアア！」

「つく！やつぱり言葉で説得するのは無理か！」

八木は混信の力を振り絞り、暴走したスバルを押しつけた。

「はぁ……はぁ……じゃ、ゴート。あれをやるよ」

《メエエエ。本気か？ケン太？》

「スバル君が正気を取り戻すにはやらないとね」

《メエエエ。分かったサー》

「ありがとうゴート。はぁぁぁぁぁぁぁ！」

八木はすかさず草むらに入り、集中し始めた。

「ガアアアア！」

暴走したスバルは八木の行動に感づいたらしく、八木に向かって飛んできた。

「ギヤオオオ！」

ザシュ！

スバルの鋭い爪が八木を切り裂いた。

「あぐ・・・！これじゃ集中できない・・・」

《おい、ウォーロック》

《ああ？何だよ？》

《少しの時間だけ、奴の動きを封じてくれないか》

《チツ！分かった！できるだけやってやる。だがチャンスは1回だけだぞ》

「分かったサー！いくよゴート」

八木は再び草むらに移動し集中し始めた。

「ガアアアア！」

暴走したスバルはもちろんそれを見逃すわけもなく、再び八木に向かって飛びだした。

《今だ！ウォーロック！》

《おう！はああああ！ビーストブレス！》

ウォーロックはスバルの目の前に現れて強い咆哮を放った。

「グアアア・・・！！」

《しばらく止まっとけ、スバル！今戻してやつからよ！》

ロツクの咆哮には麻痺性があつたので暴走スバルは空中で静止してもがいていた。

「ガアアツア！」

「うおおおお！」

八木はパワーを溜め終わると空中にいるスバルに向かって飛び出した。

《メエエエ！今だ！》

「うおおおお！これが俺の新技！ブレイク・スマアアツシュ！」

八木は止まっているスバルの真正面に攻撃を打ち出した。

「ガアアアアアアア！」

暴走したスバルは悲鳴を上げ、地面に落ちた。
地面に落ちたスバルは変身が解け、気を失った。

「ふう……なんとか一件落着だね。」

八木も変身を解き、スバルに近寄った。

「もう……大丈夫だね？」

《ああ……なんとかな……やっぱりPGMが完璧になるまで変身は無しかな？》

「それよりこれって完全に気を失ってるね。病院に連れて行くところか？」

《そうした方がいいサー》

《まったく世話のやける》

八木はスバルを背負い、病院へと連れて行った。

第29話「ブレイク・スマッシュ」(後書き)

ふう・・・やっと暴走とまったぜ。

と、言うことで、感想待ってます。

第30話「嬉しい知らせ」（前書き）

どうも、阿修羅です。お久しぶりです。年末年始だったので大掃除や冬期講習などで更新できませんでした。が、正月に入ってからやっとゆとりができました。

見てね〜！

第30話「嬉しい知らせ」

「アメロツパ・とある病院」

スバルは八木との戦いで気を失ってしまい、病院で眠っていた。

「・・・・・・・・かれこれ4時間だね・・・・・・・・」

《長いな・・・・。》

《僕たちの技が強烈すぎたからサー？》

「それもあるかもしれないけれど、やっぱり暴走の反動かなあ？」

《この先が心配になって来たぜ・・・・・・・・》

3人は眠り続けているスバルの横で会話を続けていると、急にスバルの方から「うううう・・・・」と寝起きのような唸り声のような声が聞こえてきた。

「うああああ・・・・・・・・！」

スバルは寝起きの声であくびをした。

《やっと起きやがったか・・・》

ウォーロックがため息をついた。

「かれこれ4時間は眠ってたよ。」

「うゝん……。ここは……。痛っ!!」

スバルは体を起こそうと上体を起こすと体中に激痛が走った。

「痛ったゝ! おゝ痛てゝ! ここは病院? どうして?」

《あゝゝそうだった暴走のあとは記憶が一部消えるんだった……。》

「うゝん……。何も覚えてない……。八木君と戦って……。それで?」

スバルは首を傾げた。

《完結に言うとな、お前は戦いの途中に暴走して、しまいには気を失ってここにいるんだよ》

「(しまいには? 話が全然繋がらないや……。ま、いいか) それで、今僕はここに4時間いたの?」

「そうだよ。長かったねゝ」

《世話のやける奴だ……。》

そんな会話をしていると、スバルのハンターから通信が来た。

「誰だろう? ハイ、星川です」

【あらスバルちゃん。久しぶりね……。その怪我どうしたの?】

「いや、ちょっとばかり暴走しちゃってね・・・」

【またなのね・・・。まあその暴走も今日でおしまい、おさらばよ】

「え？」

《今何て？》

スバルとロックは驚いた。暴走が無くなるだって？？

【無くなるのよ、暴走を止める為のP G Mが修復できたのよ】

「修復？以前にもあったって事？」

《そんなP G Mがあるなら早くくれよ、バーさん》

【まあそう慌てないで、ちょっとクイズよ。当ててみなさい。ものすごく身近に使ってた物よ】

「身近？身近？」

スバルは余計に分からなくなった。

《ピンポン！分かった！答えは・・・》

ロックが答えを言おうとした時だった。

【エースP G Mだよ～～～～！スバル久しぶり～～！】

モニターに現れたのは暁だった。

「え？え？エースPGM？どうして・・・それが制御できるPGMなの？」

《ぐわあああ！暁メエエエ！俺がカッコ良く決めようと思っていたのにいい！》

【ごめん、ごめん。言いたくてうずうずしてたんだよ】

《けっ！》

ロックはすねてしまった。『子供っぽい・・・』

「それで暁さん、どうやって制御・・・」

【それは、お前の獣化PGMと掛け合わせるんだよ！】

第30話「嬉しい知らせ」(後書き)

やった〜！次回ついに「ビーストクロスシステム」登場〜！

感想、待ってま〜っす！

第31話「Beast X System」(前書き)

皆さんこんにちわ。今回のタイトルはかつこ良く英語でキメました。分からない方「ビースト・クロス・システム」と読んで下さい。「・」は入って無いですが、そっちの方がカッコイイんで。

第31話「Beast X System」

「エースP G Mと獣化P G Mを合わせる？それって・・・」

【そう！すなわちノイズの力が^{パワー}合わさって獣化P G Mを押さえ込むのさー！】

暁は得意げに語った。

「す、すごい。で、そのエースP G Mは何処に？」

【ここにあるよ。ちょっとスバル、獣化P G Mをこちらに送ってくれないか？】

スバルは言われるままにハンターからP G Mを暁に送信した。

【じゃあ、2日間くらい待っててくれ】

「2日・・・ですか？」

【2日もあれば、おまえの傷も癒えるだろ？】

「はぁ・・・。分かりました」

スバルは「2日かぁ・・・。今じゃないのか」と心の中で思っ

た。

【じゃあな。2日後。ウォーロックもな】

《フンッ！》

ロックはまだすねていた。

【じゃ！】

ブツッ！

暁からの連絡が切れた。

静まり返った病室に八木が入ってきた。

「スバル君調子どう？」

八木がアメロッパの豊富な果物の入ったバケツトを机に置いた。

「まあまあかな？だいぶ良くなったよ」

《メエエ。ウォーロックはどこに言ったサー？》

ゴートは辺りを見回した。

「ああ、ロックならさつき散歩しに行つたよ」

《フーン》

ゴートは鼻を鳴らした。

こうしてその日が過ぎた。

～昼過ぎ～

スバルのハンターに一通のメールが届いた。

スバルへ

ついに完成したぞ！名づけて「Beast X System」
だ！これは今までのノイズチェンジと獣化を使い分けることも可能

だ！しかし、この2つの機能を合わせることで新たな姿への変身が可能になったぞ！例としては「オックスビースト」「ジェミニビースト」「クイーンビースト」これはノイズを元にした形態だ。

「フレームグレイガ」「アクアグレイガ」「サンダーファルザー」「ポイズンファルザー」この種類は獣化を元にした形態だ。

「……………まあ説明するよりも使ったほうが早いな。安全性は保障するぜ！あと、このカードも受け取れ。」

暁より

暁からの手紙だった。その手紙に含まれていたのは「ビースト・クロス・システム」とGクラスカードの「G・B」と「E・H」がグレイガ・プレス
エレメント・ファルザー届いていた。

《やるじゃねえか、暁の奴！》

「これが……………ビースト・クロス・システム……………」

第31話「Beast X System」(後書き)

ついに登場！感激です！（自分でも）

感想待ってますううううう！

第32話「X（クロス）」（前書き）

第32話「X（クロス）」

《よし、さっそく使おうぜ、その新機能って奴をさあ！》

ウォーロックはもう使うき満々だ。

「ちょ、ちょっと待ってよ。使ったってどこで使うの？病院では使えないし、町だったら迷惑だし、ウェーブロードだって通行人がいっぱいいるんだよ？」

スバルが反抗したが、八木がいい場所を提案してくれた。

「それだったら、この村から東に行つたところに平原や密林があるよ。」

八木は窓からうつすらと見える森を指差した。

《よし、じゃあそこにしようぜ！》

ロックはもう先に行つてしまえ、という気持ちになったスバルは

「ロックだけ先に行つてきたら？そう、下見だよ」

スバルはめんどくさそうに言った。

《スバル・・・なんかおまえ行きたくないなんて思つてないだろうな》

「うつ・・・！」

図星も図星。その通りだ。

《さっさと着替えやがれ!》

「分かったよ……ブツブツ……」

スバルは仕方なく普段着に着替えた。

「八木君はどうするの?」

スバルは八木君のフォローだけが助けだった。

「ごめん、スバル君。ぼくちよつと用事があるんサー」

ガーン……!

スバルの中の唯一の支えが崩れ落ちたかのようにだった。スバル一人でこの興奮したウォーロックを止められるのだろうか?

《さっさと行くぞ!》

　アメロツパ：大平原

スバルは平原の真ん中に立っていた。もちろん電波変換をして。

「行くよ……ウォーロック……」

《手始めにオックスと合わせるぞ》

スバルは左手を前に突き出し、右手で押さえ、叫んだ。

「Beast X System・・・ON！オックス×グレイガ！」

ロックマンの体を赤と青の光が包み込み、やがて青色に染まった。全体が青に包まれた瞬間だった。ロックマンを包んでいた光が一気に爆発し、辺りに爆風をもたらした。

「ふう・・・これがビースト・クロス・システムか・・・」

《なかなかのモンじゃねえか・・・》

煙の中から現れたのはオックスノイズの原型にグレイガの紺色にオックスの赤色の筋がきれいに走っていた。

「ためしにチャージショットを・・・」

ドオオオオオン！

スバルの左腕から青色の砲弾が飛んでいき、目の前にあった岩を粉々に粉碎した。

《す・・・スゲー・・・なんて威力だ！》

「他のだったらどうなるんだろう・・・」

《よっしゃあ、じゃあ今日中に全部試してみようぜ！》

「きょ・・・今日中？本気？ロック！」

その後、夜中まで大平原の方向から爆発音や色とりどりの光が見えた。とさ。

第32話「X（クロス）」（後書き）

なんか終りって感じしてますけど、まだ続きます。

感想まっています。

第33話「蒼燕流の塔へ」（前書き）

お久しぶりです。最近更新速度が低下していますが、ご了承ください。

第33話「蒼燕流の塔へ」

「アメロツパ：八木宅」

八木はスバルたちの朝食を作っていた。その時、家の扉がバンツ！と開いて何かが倒れる音がした。

「誰！？」

八木が玄関を覗き込むとそこには服がボロボロになったスバルが倒れていた。

「ス．．．バル君？大丈夫？」

スバルは弱弱しく口を開いた。

「だい．．丈夫．．．。そ．．．それより．．．」

「ん？何？」

「お腹．．空いた．．．」

「．．．．．」

一瞬の間沈黙が訪れた。

「はあゝゝ。生き返ったあゝ！」

《食った、食ったあゝ！》

2人は腹を抑えながらソファに腰掛けた。

「で、どうだった？新しいシステムの方は？」

八木がスバルに聞くと、スバルは得意げに答えた。

「もうバッチリ！もうどんな敵でも倒せちゃうって感じだったよ！」

《おうよ！もう蒼燕流の何とかってところも潰してやるぜ！》

「蒼燕流の塔」

ウォーロックの言った事を八木が言い直した。

《そうそう、その蒼燕流の社！早く行こうぜ！》

ウォーロックの言った言葉はだれも否定しなかった。

「よし、午後から出発だ！」

スバルが言うと4人はせっせと準備を始めた。

――――午後12時――――

「よし！皆、準備はいい？」

「いいサー」

《いつでもいけるぜ！》

《メエエエ、あんまり張り切るなサー。ウォーロック》

スバルと八木はハンターををセットし、叫んだ。

「トランスコード！002、シューティングスターロックマン！」

「トランスコード！ゴートカンフー！」

スバルは青い光に、八木は緑色の光に包まれた。数秒後、2人を纏っていた光は無くなり、ロックマンとゴート・カンフーの姿があった。

「よし、行こう！」

「メエエエ。僕について来いサー！」

八木が先にウェーブロードに乗って方角を確かめた。

「こっちサー」

八木が手招きするとスバルはウェーブロードに乗り、音速で移動した。

くアメリツパ山岳・蒼燕流の塔く

静かな山奥の高い塔から数本の煙が上がっていた。

「ぐは……き……貴様あ！何者だ！？」

銀髪でショートヘア、空色のＴシャツに下にはところどころに氷のついた袴を着ていた。

「残念だ……蒼燕流氷の型の使い手”コールド”……も
っと腕のあるやつだと思っていたが、期待はずれのような……。
俺は次に進む……。」

「ぐ……ま……待て……。」

コールドはうつ伏せのまま呼び止めたが、

「俺は勝ったんだ。ここは勝ち抜き制だろ？文句は無いはずだ？」

「く……そう……！」

コールドはその場で気絶した。

「……………行くぞ……………。ラプラス……………！最後の
人だ……………！」

第33話「蒼燕流の塔へ」(後書き)

いきなりの展開です！ていうか、最後の人物、分かりますよね？
だつて答え出しちゃってるもん！あと、章管理で「番外編」から「
第6章」に変えました。

感想待ってます！

第34話「ブライ来襲！」（前書き）

こんにちわっ！お久しぶりです。更新速度が著しく低下していますが、物語はちゃんとできています。ではっ、34話始まりますよ。

第34話「ブライ来襲！」

〔蒼燕流の塔：一階～三階フロア〕

スバル達の着いた頃には、一階～三階にかけて全壊していて、この塔が立っている時点で不思議なくらいだった。

「な・・・なんだこれ・・・！一階から三階までが吹き抜けになってる・・・」

《何者かがぶち破った跡だな・・・よく見たら番人たちが倒れてやがるぜ》

スバルは倒れている一人目の番人に近寄り、話を聴こうとしたが、番人は気を失っていた。

「ダメだ。完全に気を失ってるよ。このまま上に進む？」

「この荒れ方だと一階から三階まで突き抜けたと言ってもいいだろうね。でもこんな事をできる・・・??」

八木が言っている途中になにかに気がついた。

「スバル君。ちょっとファルザーフォームでこの壁に爪攻撃クローしてみて。」

「え？いいよ。どうしたの？」

スバルは言われるがままにファルザーフォームに変身して、壁に穴が空かない程度に激しい切り傷を与えた。

「どう？何かわかったの？」

八木はしばらく天井とスバルのつけた切り傷を比べた。

「やっぱり。この壁の傷と天井を破った時についた傷はほとんど同じだ。」

《メエエエ。俺も同じと思うサー。電波体の攻撃の跡には絶対微量な電磁波が残るサー。それがさつきつけた傷と天井の傷の電磁波はほぼ一致するサー。》

スバルはしばらく考え込み、口を開いた。

「と、言うことは。ファルザーの仕業ってこと？」

スバルは言った。

「そうだね。でもファルザーの大きさとこの塔の大きさを比べるとファルザーの方が明らかに大きい……。」

《だあゝもうっ！いちいち考えるの、俺嫌いなんだよっ！分からねえなら先に進めばいいだろっ！？》

ロツクの怒った言葉に誰もが黙りこくった。しばらくして八木が口を開いた。

「先へ進もう。少しでもファルザーの確率があるのならね」

スバルもうなずいた。

「よし。上に行こう。」

4人が移動しようとした時だった。三階の天井が破られ、ガラガラと瓦礫と共に黒い塊が落ちてきてドシヤツと一階の床に落ちた。

「こ……これって……!」

『ど……ドラゴン……龍!』

4人が口をそろえて言った。

《どういうことだ?今上から落ちてきやしなかったか?》

ロックが言った。

「これはファルザーの仕業じゃないね……。この龍には細かな切り傷が目立つ。いくらファルザーの切り傷でもこんなに細かく繊細な傷はつけられないよ……」

スバルが龍に手をかざしながら言った。すると天井からまた何かが落下してきた。

「ぐああああ……。クソッ!」

男は黒い服を身に着け、服には黄色い稲妻型の模様が入っていた。髪はばさばさで黄色で髪の方は赤色だった。

「これほどだったとは……。ハア……。ハア……。ならば、この己の最高の技で倒してやるぞ……。」

男は手に雷の電波を集め、それと同時に龍も起き上がり、男の後ろについた。

「いくぞ、ボルト雷撃……」

男は龍をボルトと呼んだ。そのままボルトと呼ばれる龍は男の前に現れ、男は電気を溜めていた両手をボルトに向けて叫んだ。

「我が最強の技！受けてみる！龍の雷撃ライデン・シヨウキ！！！」

すると両手にあつた電気が龍を包み込み、雷のごとく、龍が敵に向かって突撃した。

「す……すごい……。これが蒼燕流の龍の使い手……。」

スバルが感心しているとスバルと男の間に黒い影が現れた。

「な……い……。今の攻撃を……避けたというのか！？」

男は驚きを隠せずに黒い影を見た。黒い影の正体はまだ黒いベールに包まれていて分からなかったが、そいつの放った攻撃でスバルとロックは一瞬で分かった。

「消えろ、龍の使い手・ボルテックス！！」

影が巨大な剣を振り下ろすと塔もろともボルテックスを切り裂いた。その攻撃の衝撃で包んでいたベールが外れた。

「お……お前は……」

《お前・・・何でこんな所にいやがんだ！？》

「ブライ！なぜここに？」

スバルとロックが言った。そう、黒い影の正体は孤高の戦士・ブライだったのだ。しかし、いつものブライとは違っていた。いつもは純粋な黒に染まっていた雰囲気は今では赤いオーラが備わっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。お前か・・・星河スバル・・・・・・・・。ここに何の用だ？見ての通りここの奴らはすべて葬った。」

ブライはいつもの口調で言った。

「葬った？どういうことだ？ここの皆は氣を失っているだけだろう？」

八木が言った。

「ああ。言っていないかったな・・・・。今の俺には切りつけた相手を内部から殺していく成分がこの剣先、ラプラスにはつけられているんだ・・・・。だから一太刀入れるだけでも相手を死の淵にまで持っていける。まあ一太刀だけならギリギリ生きられるだろうな・・・・。だが二太刀以上は・・・・」

「つく・・・・！ブライ！僕と勝負しろ！」

スバルが叫んだ。ロックもそれに賛成だった。

「待つてよ。スバル君。こいつの話聞いてた？やばいよ。スバル君は強いけれどいくらなんでも一太刀も受けずに倒すなんて無理だよ」

八木は反対だった。

「大丈夫。それはあっちも同じだよ。」

「??？」

八木は分からなかった。「スバル君はそんなことはできないはずだ。」と。

「……………。いいだろう。相手をしてやる。だが、俺は素手で戦う…………。」

ブライはラプラスをハンターに戻し、右手のココウノヤミを大きくした。

《へっ！ずいぶん強気じゃねえか！やっatarouぜ、スバル！》

「OK！ブライ！お前を倒す！」

「……………。やってみるがいい…………。」

二人の間に激しい火花が散った。

第34話「ブライ来襲！」（後書き）

次回！ブライvsロックマンが始まります。あと、途中ででてきた「ココウノヤミ」というのはブライの右手にある紫色の電波のことです。公式サイトデータベースで詳しく載っています。

感想まっています！

第35話「圧倒」(前書き)

こんにちわ。阿修羅です。今回の地震、ものすごい被害ですね。
そんな中でもBeast Xは止まりませんよおお！では、35
話始まりまあっす！

第35話「圧倒」

（蒼燕流の塔）

「うおおおおお！」

スバルは声を張り上げ、ロングソードでブライに突進した。
ブライはそれをムーの障壁で止めた。

「なるほど……以前より数段パワーが上がっているな……。
だが……！」

ブライは障壁でスバルを弾き、のけぞったスバルに強烈なストリートを入れた。

「ぐっ……！」

スバルは何とか耐え、その場で止まった。

「この俺を超えることはできない……。」

ブライは勝ち誇った顔でスバルを見た。

「つく！なめるな！ノイズチェンジ！コーヴァス！」

《あれは使わねーのか？スバル！》

ロックは驚いた。こんな状況でクロスシステムではなくノイズを使うとは思わなかったのだ。

「この俺にノイズの力は通用しない……。」

「うおおおお！アトミック・ブレイザー！」

スバルは右手から巨大な炎をブライに向かって発射した。
ブライは完全にその中に飲み込まれた。

「おおおおおおお！」

「………。」

ダウン！という衝撃と共に炎はかき消され、異様な形をした障壁に包まれたブライが姿を現した。

「き……効いてない……。それに……。あの障壁はいつもの形じゃない……！」

ブライは不気味な笑みを浮かべ、口を開いた。

「言っていないかったな……。なぜ俺がこんなにもパワーアップしたのかを……。」

ブライはココウノヤミをスバルに向け、鳥の紋章を出した。

「そ……それは……！」

「……。知っているのか？なら話は早い。つい先日……。俺はB Aと呼ばれる組織に命令され、しぶしぶ現場に向かった。そこにいたのはファルザーと呼ばれる電脳獣。俺は半日戦い続け、そいつを^{デリット}消滅した。不思議なことにその瞬間から力がこみ上げてきたんだ……。」

・。それがファルザーの力と知った時は正直驚いた……。そして今の俺がここにいる訳だ。貴様に俺は倒せない」

ブライはファルザーの紋章から赤い衝撃を飛ばし、スバルを吹っ飛ばした。スバルはそのまま壁に激突し、ブライが目の前に現れた。

「己の無力を知るがいい！」

ブライはスバルの首をつかみ、上へ投げ飛ばし、先ほどとは違う一点に集中させた衝撃を飛ばし、スバルを三階の天井まで飛ばした。

「ぐっ……………」

スバルはそのまま一階の床に落下した。

「がはっ！く…………ブライ…………！」

《やってくれんじゃねえか…………。そろそろこっちも本調子といこうか…………スバル》

スバルはよろめきながら立ち上がった。

「貴様に何ができる……………」

ブライはスバルの背後に回りこんだ。

「ブライナックル！」

「…………！」

スバルは無数の拳に打たれ、その場に倒れ込んだ。

「・・・・・・・・これが実力の差だ・・・・・・・・諦めるんだな」

第35話「圧倒」（後書き）

圧倒的なパワーにスバルは勝てるんでしょうか？

感想待ってます！

第36話「極獣化」(前書き)

この物語で出てくるダークライトハーヴェスターとはブライの右手首についているリング状のものです。これでココウノヤミを制御しています。

第36話「極獣化」

「つく……！」

スバルはブライの攻撃によりうつ伏せに倒れこんでいた。

「…………やめた……」

「!？」

《どうということだ！ やめってどういことった!？》

ブライはスバルに背を向けた。

「今の貴様を倒したことでなんの得にもなりやしない。それに、まだウイルスを除去している方がマシだった……」

ブライはスタスタと歩きだした。スバルはとっさに反発した。

「待て！ まだ戦いは終わっていないぞ！」

《そつだ！ まだこつちの秘密兵器も出してねえしな!》

スバルは立ち上がり、両手にソードを出現させた。ブライは立ち止まり、スバルの方向へ向きを変えた。

「…………。それほど死にたいのなら…………死なせてやろう！ 後悔するがいい！」

ブライはココウノヤミを赤紫色に染め、ダークライトハーヴェスターが見えなくなるほど大きくした。

「うおおおおおー！」

スバルはダブルソードでブライに突っ込んだ。

「死ね！ 星河スバル！」

ブライは右手のヤミをスバルに突き出し、スバルのソードと激突した。

「うおおおおおー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！」

スバルはブライの攻撃をなんとか受け流し、ブライに隙を作った。

「・・・・・・・・！！！」

「いくぞー！」

スバルはソードで切りかけると見せかけて周波数を変え、二階へ移動した。

「Beast X system！」

スバルは叫び、赤い光に包まれた。光は数秒で消え、赤いロックマンの姿が現れた。

「……！ その姿……貴様もファルザーの力を！」

「……何かが違う……？　なんだ、この感覚？　昨日とは溢れ出してくる力の量が違う」

ロックマンの姿は以前ファルザーの姿になった時より翼が大きく鋭さが増していた。爪も二重になっていて折れても大丈夫なようになっている。（他の部分も変わっているが、細くなるので省略）

「それが貴様の秘密兵器というやつか……だが俺には勝てんぞ！」

「そんなのやってみなくちゃ分からない！」

ファルザロックマンはブライの背後に回りこみ、鋭い爪でクロス
の字に切り裂いた。

「ぐあああ！」

「どうだ！」

ブライは、前のめりになり、倒れまいとこらえた。

「……なんだと！ 貴様の何処にそんなパワーが！？」

「不思議だ……。」

今度はブライの前に現れ、両手から赤い炎をぶつけた。

「あぐっ！」

ロッキーマンは背後に再び回りこんだ。

「以前より全然スピードが違う・・・！」

ブライを強い衝撃で吹き飛ばし、壁に激突した。

「ぐ・・・うう・・・！　ばかな！　どこにこれほどの力が？」

ブライは地面に降り、肩で息をしながら言った。

「一体どうなっている・・・。」

《わかんねえさ。ただ、今ならお前に勝てるってことだけは分かるぜ！》

ロッキは勝つ気満々だった。

「獣化を超えた獣化・・・。。極獣化だ！」

第36話「極獣化」(後書き)

ここで切るよ！極獣化の真のパワーはそう簡単には出さないからね。

まだファルザーしか極獣化してないから。そういえばグレイガの獣化してないな・・・。

感想待ってます。

第37話「引き分け」（前書き）

こんにちは。実は昨日まで38の高熱で寝込んでいましたが、
なんでか急に熱が下がって治りました。（学校は休んでいます）

ここで「極獣化」の読み方ですが、後で訂正したのですが、「スーパービースト」ではなく普通に「きよくじゅうか」と読んで下さい。「スーパービースト」なら「極獣」です。いずれ出すつもりです。では、37話を読んで下さい！

第37話「引き分け」

「極・・・・・・・・・獣化だと？」

「そうだ・・・・・・・・！これでお前に勝てる！」

《へっ！テメエにもう勝ち目はねえぜ！》

ロックはいつもの調子になった。

「フン！それはどうかな？」

ブライはニヤリと笑みを浮かべた。

「？」

「貴様がその力を使ったのならば、俺は剣を抜く・・・・・・・・！」

ブライは右手を前に出し、「ラプラス・・・・」と言った。するとブライの右手にラプラスソードが出現した。ソードの周りには赤いオーラが縁取っていた。

「それがお前の言っていた成分か？」

「そうだ・・・・・・・・！貴様は一太刀もつけずに勝てるという自信があるか？」

ブライは再び笑みを浮かべた。

「勝てるさ……。僕にその太刀は効かない!」

「大きくでたものだな……。では、その極獣化のパワーを見せてもらおうか……」

ブライは勢いよく駆け出し、スバルに向かってソードを振りかざした。スバルはそれを両手で受け止めた。

「ククク……。正面から喰らったな……!」

ブライは不気味な笑い声を上げながら言った。

「……。なにがだ?」

「何……!?」

ブライはスバルから離れた。

「なにが喰らったんだ?」

「どういうことだ!? 確かに今のは正面から受けたはずだ!なのに何故倒れない!」

スバルは自身の爪を前に出した。

「それは……。そういうことか」

ブライは落ち着いて言った。

「そうだ……。お前の成分はこの爪で受けた瞬間に体内ではな

くこの爪にまとわせたんだ。」

スバルが言った瞬間だった。オーラを纏っていた爪がすべて砕け散った。

「フン！だがもう貴様に俺の太刀を防ぐ術はない！貴様の負けだ・・・。」

《へっ！何のために爪が何重になっているか、わかんねえようだな！》

ブライは砕けた爪の根元にもう一つ小さな爪があるのに気がついた。

「まさか・・・。サメの歯と同じ構造か・・・。」

「そうだ・・・。俺の爪はサメの歯と同じように折れても大丈夫なように予備が何重にもなってるこの腕の部分に蓄えられている。前はこんなものなかったけど・・・。」

スバルは自分の出てくる爪を見ながら関心していた。

「その程度で図に乗るな！逆に言えば、俺の太刀は、すべてその爪で受けなければならないということだ・・・。」

「まあ・・・。そうだ・・・。」

スバルは、ブライには勝機があるように見えた。

「ならば・・・。」

ブライはスバルの背後に回りこみ、斬撃を飛ばした。スバルはそれに反応し、爪で攻撃をかき消した。

「これには成分が含まれていない！」

《スバル、上だ！》

ブライは上空から大量の斬撃を飛ばしてきた。

「ダイクレイン
暗黒雨！」

とても受けきれないおびただしい数の量だった。

「貴様のたった二本の腕でこの量が受けられるか！？」

「できるさー！」

「何！？」

スバルは爪に光のオーラを纏わせ、ブライと同じく、大量の斬撃を飛ばした。

「ホーリーフェザー
光の羽根！」

その斬撃はブライのものと衝突し、かき消していった。

「らあああああ！」

「うおおおおお！」

ブライとスバルは休むことなく、飛ばしまくった。しばらくして、攻撃が止んだ後、二人は息を切らせながら地面に降り立った。

「やはり貴様は俺の真のパワーで倒すべき者だ……」

「どついう事だ？ならば今出せばいいじゃないか？」

ブライは背を向け、歩き出した。

「まだ貴様に俺のパワーを見せる時ではないという事だ……。いずれ、戦う時が来たら……。貴様をこの手で潰す！」

ブライは周波数を変え、どこかえ消え去った。ブライが去った後、スバルは電波変換を解いた。その時、ハンターの電話が鳴った。

「あ、委員長からだ。どうしたのかな？」

スバルはハンターのモニターを開いた。

【ちよつとスバル君？今どこにいるのよ！】

出てきて早々怒られた。

「ど……。どこつて……。アメリッパ？」

【あ……。アメリッパアア！？なんでそんなとこいんのよ？明日から学校始めるっていうのに？】

「えええ？学校始まるの？何処で？」

【コダマ中学校よ】

一瞬沈黙が流れた。

「なんで？潰れたんじゃない？」

【不思議なことに、今日の朝起きて買い物に出かけている途中、学校の前を通ったら治ってたのよ！だれが治したかは知らないけれど！早く戻ってきなさいよ！】

ルナの声が響きながら電話が切れた。

《だとさ・・・・・・・・》

「はぁ・・・・・・・・のんびりできると思ってたのに・・・・・・・・」

スバルは深くため息をついた。

第37話「引き分け」(後書き)

今回はちと長めでした。

感想待ってます。

第38話「以外な事実」(前書き)

お久しぶりです。最近またメイプルストーリーにはまっていますね、誰かやっている人がいましたら感想で声かけて下さい。ちなみにメインはレンジャーでつばきにいます。名前は「モスカー」です。

第38話「以外な事実」

～アメロツパ～

スバルは八木家でコダマタウンに帰るための荷造りをしていた。

「今日のスバル君すごかったよ。また一歩先行かれちゃったみたいだね」

「え・・・そう?」

スバルは褒められて頭をかいた。

《もうゴートには追いつけねーよ》

ロツクは鼻で笑った。

《何だと? ウォーロツクウウ! すぐに抜かしてやるからな!》

《できるもんならやってみる!》

二人の間に火花が散った。

「ちょ、やめてよ二人とも。やるならまた今度にしてよ」

八木が言った。

（また今度って事はB Aとか電腦獣の一件が終わってからになるけどね・・・）

スバルは苦笑いをした。

「あ、そろそろ行かなきゃ。日本とは時差があるからね」

「じゃあね、スバル君」

スバルは八木に手を振り、電波変換をしてコスモウェーブに入
った。

「よし、僕たちも次の戦いに備えて修行だ、修行！」

《よし！やるサー！》

八木とゴートはドンブラー湖の方向へと向かった。

「オーストラリア」

「・・・・・・・・・・命令はどうした？」

ハントは男に問いかけた。

「・・・・・・・・・・悪いが、今は奴を倒す時期ではない・・・・・・・・。い
れ^{パワー}真の力を発揮するだろう・・・・・・・・。その時はこの俺の手で潰す」

「ふざけるなっ！奴はスターフォースのときも、オーパーツのとき
も、ノイズのときもそうだ！いつもあと少しのところでパワーアッ
プする！これは奴の戦闘データから確認済みだ！」

「・・・・・・・・・・確かにな・・・・・・・・。だが今のままの奴を倒した
ところでなんの面白みもない・・・・・・・・。現に、今日の戦いでロックマ

ンは“極獣化”という力を手にした……。このまま放っておけば奴はさらに力を増す……」

ハントはその応答にしびれを切らした。

「“極獣化”だと！？聞いていないぞ！そんな事があつたのにもかかわらず、まだ野放しにしておくと言うのか、ソロー！」

男というのはソロだった。ソロはハントに背を向け、歩き出した。

「待て！貴様のボスはこの俺だ！命令に従わんか！」

ソロは脚を止めた。

「……貴様はなにか勘違いをしていないか？俺は“手を貸す”とは言ったが、“仲間になる”とは言っていない……」

「ぐ……」

ハントは退かざるをえなかった。

「だがソロ……今後も我々に協力してもらうぞ……」

「分かっている……そのほうがこちらにも色々と助かるからな……」

ソロはニヤツと笑い、その部屋をあとにした。

（ロックマンめ……今度こそ貴様を潰してやるぞ）

ハントは笑みを浮かべた。

第38話「以外な事実」(後書き)

ええええ！？ソロがB Aに手を貸していたとは！！次はコダマ中学での生活が戻ります。

感想待ってます！

第39話「告知」

「コダマタウン」

スバルはコスモウエーブを渡り終わり、自宅の前に来ていた。

「なんか久しぶりだね」

《それでもねえだろ？一週間くらいなんだからよお？》

ロックがツツコミを入れたがスバルは無視した。スバルは玄関の戸を開けて家の中に入った。

「ただいまー！」

「おかえり、スバル」

「おう、おかえり！」

スバルが帰ってきたのに反応したのはあかねと大吾だけだった。いつもはスバルに飛びついてくるミソラはいなかった。

「あれ？ミソラちゃんは？」

スバルが尋ねた。

「ああ、あの子ならライブに行ってるわよ。夜には帰るって」

「後3時間くらいかな？それまだ明日の準備の確認でもしとくかあ」

スバルは大きく背伸びをした。

- - - 3時間後――

「・・・・・・・・かえって来ないね」

《いろいろあんだろ、きっと。それよりもう寝ろよ？明日から学校
だろ？》

「うん・・・・・・・・ふあ・・・・・・・・分かった・・・・・・・・おやすみ」

スバルは欠伸をしてから眠りについた。

「ただいま〜！」

スバルが寝付いてから30分くらいたった頃、ミソラが帰ってきた。

「遅かったわね。スバルは先に寝ちゃったわよ」

「ごめんごめん。アンコールが鳴り止まなかったもんだから」

ミソラが靴を脱ぎながら言った。

「早くお風呂入って寝なさい」

「はい」

ミソラはそのまま荷物を置いて風呂へと向かい、30分くらい後に出てきて寝室へ行った。

「もう12時前か・・・早く寝なきゃ、明日起きられない・・・」

《起きられなかったら私の音楽で起こしてあげるわよ》

「ありがとハープ」

ミソラはハープに起こす時間を言ってから眠りについた。

――朝7:30――

ミソラは7時に起こしてもらい、朝食を食べていた。

「スバルったら、また寝坊かしら？」

「私が起こしてこよつか？」

「じゃあよろしくね、ミソラちゃん」

ミソラはココアを飲み干して二階へと向かった。

「スゥバール君！起きなさい！」

ミソラが扉を開けた時だった。部屋中に巨大な騒音が響いた。

「きゃああ！何よ、この音!？」

ミソラが叫ぶとそこにはシシカシューがスバルの耳元で叫んでいた。

「うううう分かったよ・・・起きるよロック。だからやめて、そのカード」

《じゃあさっさと着替えて下に降りろ!》

ロックはカードをしまい、スバルを怒鳴りつけた。

「ん」。ミソラちゃん・・・。着替えるから下に行つてて。

「う・・・うん。分かった・・・」

ミソラは部屋を後にした。

スバルは5分後くらいに一階に来て朝食を食べ終わり、玄関で靴を履いていた。

「じゃあ、行つてきます」

「行つてきます」

「はい、いつてらっしゃい二人共」

「そつえば母さん、父さんは？」

「ん。それは言わないことにしているの」

「何それ？まあいつか。仕事かな？」

スバルは少し疑問に思ったが忘れることにした。二人はあかねに見送られて 学校へと向かった。

「はあ。一ヶ月は学校休めると思ってたのに」

スバルはため息をついた。

「私も。学校ってつらいよね」

ミソラもため息をついた。

二人が一緒に歩いていると、ルナ、ゴン太、キザマロの三人に会った。

「ようスバルとミソラちゃん！」

「おはようございます、ミソラちゃん！」

「ちゃんと帰ってきたのね、スバル君」

三人は二人にあいさつを交わし、学校へ向かった。

　　コダマ中学 体育館

今日はコダマ中学の集会だった。生徒たちがざわめいている中、

校長がマイクをとった。

「えー、皆さんおはようございます。皆さんには2つ言いたい事があります。まずはこの学校を直してくれたWAXAの皆さんからのあいさつです」

生徒全員が「WAXA」の単語を聞いた瞬間、ざわめいた。ざわめき立っている中、大吾と天地が入ってきた。

「ええ？何で父さんが？」

スバルが小声で叫んだ。

「それで今日の朝父さんがいなかったのか！」

スバルは一人で納得した。

「皆、おはよう。今日ここに来たのは他でもない。この学校を直したのは私たちWAXAだ。この学校が崩壊寸前だと聞いてね。聞けばロックマンが守ってくれたと言っじゃないか。だから私たちにも何かできないかと、WAXA総動員で修復にかかったわけだ。もちろん本職もあるから、夜のうちにウィザードの力も借りて直してたわけだ。夜中に工事の音が聞こえなかったのはWAXAの技術で作った結界だ。せっかくの機会だ、なにかWAXAについて聞きたい事はあるかい？」

大吾が尋ねた。大勢の人が手を上げたがここは省略する。大吾たちのあいさつが終り、体育館を出ると、再び校長がマイクを持った。

「皆さんに伝えたい2つめのことは、なんとWAXAの人達から皆

さんに修学旅行をプレゼントしてくれました！」

校長が「修学旅行」と口走った瞬間、沈黙がはしったが、その後、「やったー」などという声が響いた。

「修学旅行先についてのお知らせです。1年生はオーストラリア。2年生はアメリッパ。3年生はフランスに決定致しました。」

（オーストラリアとかフランスって修学旅行超えてるよ……これも父さんかな？）

スバルが考え込んでいると校長から「修学旅行についての詳しい情報は各クラスで報告されます。では、解散！」と報告があった。

生徒全員が体育館を出て、自分の教室へと戻っていった。

第39話「告知」(後書き)

少々長めでした。

感想待ってます。

第40話「修学旅行前日」(前書き)

さあ、修学旅行編が始まりました！なんとこの章ではスバルの身に何かが起きます！

第40話「修学旅行前日」

コダマ中学校は集会のあとH・R・修学旅行の連絡後、午前中で学校は終了した。

「にしても急ね。明日出発って」

ルナがため息をついた。

「まあいいじゃない。私オーストラリア行きたかったし」

「僕も」

ミソラとスバルが言った。

「明日のオーストラリアに何持っていくのかな？」

ゴン太が言った。

「しおりも貰ったんですから分かるじゃないですか」

キザマロが言った。もつともだ。五人は十字路でそれぞれの自宅へと帰った。

「スバル家」

「ただいま」母さん。お昼は？」

スバルが帰ってきて早々に昼飯のことを尋ねた。

「ごめんなさいね。今日は修学旅行のことで買い物に行ってたから
カップメンね」

（この時代でもカップメンあるんだ・・・）

スバルは思った。

「二人共。手を洗ってから食べなさいよ。荷物も部屋に置いてきて
ね」

二人は言われるがままに手を洗い、荷物を置いた。一階に下りて
きてから二人はラーメンを食べ、スバルはテレビの前でゴロゴロ。
ミソラはスバルの横でポロロンとギターを弾いていた。

「ふあゝ……。今日はなんだかぬくいから眠くなった……。
ミソラちゃん、僕寝るね・・・」

「オーケー。何かあったら起こすよ」

「ありがと・・・」

スバルはソファアーの上で静かに眠った。

「スバル君を起こしちゃだめだから上で練習しよ」

《そうね》

ミソラとハーブは二階に移動した。

「ふあゝ．．．よく寝た。今何時だ？」

起きたスバルは時計を見た。

「わあ！もう七時だ！三時くらいに寝たから．．．五時間は眠ってたのか！」

《あゝあ。退屈だったぜ．．．。おかげでハープにも付き合わされ
たしよ．．．》

ロックはハンターの中でぐったりしていた。

「ごめんごめん。ミソラちゃんは何処かな？二階かな？」

スバルはミソラを探しに二階へ行った。

「ミソラちゃん」

スバルが部屋の扉を開けると、壁にもたれかかってスヤスヤと寝ているミソラがいた。

「あれ．．．ミソラちゃんも寝てる」

《かれこれ三時間は寝てるわ。練習で疲れたのかしらね？》

ハープがスバルの隣に現れた。

(ミソラちゃんの寝顔ってカワイイな・・・)

スバルがミソラに見とれているとハープが言った。

《あら、スバル君もミソラの可愛さに見とれちゃった?》

「い・・・いや。そうじゃなくて・・・えっと・・・」

《正直に言っちゃいなさいよ。ミソラは寝てるんだから!》

ハープがスバルを肘でつついた。

「う・・・うん」

スバルが顔を赤らめた。

《やっぱりね。起こしちゃいけないからほら、行った行った》

ハープがスバルを部屋から追い出した。

「え・・・ちょ。だってもう夕飯だよ」

《え? そうなの? じゃあ起こさなきゃね》

ハープはミソラを揺すって起こした。

幸いにもハープはミソラにスバルの事を話していなかったらしく、夕飯のときに二人の話題が出ることは無かった。

「あれ？そういえば父さんは？」

スバルがあかねに問いかけた。

「大吾さんなら残業で遅くなるって」

「ちえ。聞きたい事いろいろあったのに・・・」

スバルが舌打ちをした。

夕飯を食べ終わるとあかねが二人に言った。

「明日は早いでしょう？だからもう寝なさい」

『はうい』

スバル、ミソラは交代で風呂に入り、明日の準備をしてから眠りに入った。

第40話「修学旅行前日」(後書き)

次回からは3〜5話かけて旅行の様子を書きたいと思っています。

感想下さい。

第41話「修学旅行？」（前書き）

こんにちは。修学旅行スタートです。さて、何が起こるやら？

第41話「修学旅行？」

くオーストラリア空港く

「うああああ！日差しが気持ちいい」

ミソラが伸びをしながら言った。

「ざっと3時間くらいかしらね？飛行技術も発達してきたわね」

「はあく退屈だったな」

ゴン太が言った。

「コスモウェーブでくればよかったぜ」

《俺も同感だ》

ゴン太とロックが言った。

「飛行機ってのはそういうものなのよ」

（僕もゴン太とロックに同感だ）

スバルもひそかに思っていた。

「よし。全員そろってるな？」

育田先生が生徒の確認をした。

「29・・・30・・・よし。全員いるようだな。じゃあ、これから泊まるホテルにチェックインに行くぞ」

育田先生が言うと、先生を先頭に全員歩いて20分ほどの場所にある海沿いのホテルに歩きだした。

「あつっっ・・・意外と暑いんだな、オーストラリアって」

ゴン太がうちわで扇ぎながら言った。

「そもそもなんであんな長袖なのよ。日本とは季節が逆だって聞いたでしょ？ここは今夏なのよ！」

ルナが指摘した。言われてみればゴン太だけ皆より厚着している。

「あと太ってるからかな？」

スバルが言った。するとキザマロが後からつけたした。

「太ってるゴン太君ならいい機会でしょう。汗をかいて少しでも脂肪をおとしたらどうですか？」

二人に言われたゴン太はため息をついた。

「ゴン太君はちゃんと薄着も持ってきてるんでしょ？」

前にいたミソラが振り向いて言った。

「え・・・はい！ちゃんと、持ってきてます」

ゴン太は少し照れながら言った。

「今日長袖なのが分かったわ。ゴン太、寝ぼけてたわね。」

「ギクツ！！な・・・なんで知ってるんだ？」

今度はルナがため息をついた。

「あなたとは付き合いが長いでしょ？それくらい分かるわよ」

スバルとキザマロがうなずいた。そうこうしているうちにホテルについた。

くシドニーシーサイドホテルく

チェックインを終えた先生が帰ってきた。

「じゃあ皆は各班に分かれてそれぞれの部屋に行くように。荷物を置いたら5時まで街を自由に散策していいぞ。じゃあ解散！」

解散の合図が鳴ると生徒全員が四方に散り、部屋に向かった。スバルの班員はゴン太とキザマロ。別の部屋だがミソラとルナだ。

「じゃあ部屋に荷物を置いたらロビーに集合ね。あとゴン太、あんたは着替えなさいよ」

「はい」

ルナの合図があると部屋に入り、スバルとキザマロは荷物を置き、必要なものを取り出して準備完了。ゴン太は汗で服がくっつき、や

つとのおもいで脱ぎ、いそいで半そでに着替えて準備をした。

5分もした頃、ルナ率いる4班はシドニーの街中へと出発した。

第41話「修学旅行？」（後書き）

行き先はオーストラリア・シドニーの設定です。エアーズロックにも行こうかな？

感想待ってます。

第42話「修学旅行？」（前書き）

休みが終わらないでほしい・・・。

（俺とスバルの切なき願い）

第42話「修学旅行？」

「シドニー：ショッピングモール」

「ちょっと、ミソラちゃん。いったいどれだけ買っの？」

「委員長！もう持ちきれないぜ」

「僕もうギブアップですう」

スバル、ゴン太、キザマロは観光早タルナとミソラの買い物に振り回されていた。

「キャー！これ可愛いー！あ、こっちもいい！でもあっちもな」

ミソラはいつきに3着の服を手にとった。一方ルナは・・・。

「委員長」。いい加減に買っのやめましようよ。お金なくなっちゃいますよ？」

「大丈夫！こんなことを予想して、ちゃんとカード持ってきたんだから！」

ルナはそう言ってゼニーがゼロになったハンターからキラッと光るクレジットカードを取り出した。

「う・・・さすがはお金持ち」

ゴン太とキザマロは後ずさりをした。

「カードの限度額は2000万ゼニーにしてあるから、残り1000万ゼニーになるまで買っわよ！」

ルナは張り切って次の服屋へと向かった。

「と、いう事は……。今まで現金で支払ってきたんだよね？」

「そうですね……。」

二人は顔を見合わせ、ため息をついた。

「ちょ、ミソラちゃん！ いったいいくら持ってきたのさ？」

スバルは自分より重い荷物を持ちながら、次の店へと走っていくミソラを追いながら言った。

「うん。ざっと1000万くらいかな？」

「い……。1000万！？ なんでそんなにあるの？」

「えっとね、ミュージシャン活動とウィルスバスターングで出てくるゼニーを溜めてたら溜まっちゃった。」

（溜まっちゃったじゃないでしょうに……。・・・）

スバルはため息をついた。

「さあ！ さつさと次のお店に行くわよ！ これで最後にするんだから」

「はあ……。や、やっと終わる。」

スバルは「これで最後」という言葉に安心した。

――30分後――

『あゝ・・暑い〜〜〜〜！もう死ぬ〜〜！』

スバル、ゴン太、キザマロはものすごい量の荷物を抱えて涼しいモールから炎天下の中へと出てきた。自分たちの隠れるほどの荷物を持ちながらあるく姿はシドニーの街中で注目の的だった。

「委員長〜、ミソラちゃん。一旦ホテルに戻ろうよ〜」

「俺もさんせい〜い」

「僕もですう〜」

3人は耐え切れず、2人に言った。

「んもう！仕方ないわね〜。荷物をホテルに預けるわよ」

ルナを先頭に4班はホテルへと引き返した。

ホテルの係員は持つてかえってきた荷物を見て驚きを隠せていなかった。係員総出で荷物を運び、暗証番号をルナに渡して4班は再び街中へと出発した。

〜シドニー：オペラハウス〜

「キャーーーーー！オペラハウス〜〜！ねえスバル君、これ本物？本物？」

ミソラが大声で叫んだ。目をキラキラさせてはしゃぐミソラの姿はそんなになかった。

「ほ・・・本物だよ。なんでそんなに興奮してるの？」

「え〜？だってミュージシャンとしては一度はここで演奏してみたいでしょう！ここで演奏してみたいわ〜」

ミソラは手を合わせて妄想しはじめた。

「み・・・ミソラちゃんがあだから、僕たちはアイスでも食べとこつ」

「そうですね・・・。あれ？委員長は？」

「そういえばいないな。どこいったのか・・・」

ゴン太が言いかけると後ろから声が聞こえてきた。

「おい皆こっちなさいよ。こっちにすぐおいしいスイーツ店があるんだって！」

ルナの「スイーツ」という言葉にミソラが反応して男子3人の手をとり、走りだした。

「スイーツ！！！！ クレープあるかな？あるかな〜？」

ミソラはそう言いながらルナに場所を聞き、ルナの手もとり、店へと直行した。

そこは移動式の店でオーストラリア各地を転々とし、めったに目にかれないスイーツ店だった。

「はあゝ・・・なんで私がこんなことしなきゃいけないのよ」

スイーツ店の赤毛の女がため息をもらした。

「いいじゃねゝか姉ちゃん。たまには息抜きしなきゃ」

店の横にあるベンチに座っている金髪で髪がボサボサの男が言った。年は13歳くらいだろう。

「あのねゝ。いくら組織の資金集めだからってなんで私がこんなこと」

「いいじゃん別に。久しぶりにこっち来たんだしさ。レイ姉ちゃん髪ほけば美人だしさ。WAXAの奴らがいてもわかんないだろ？」

赤毛の女はレイだった。

「よつく言うよ。あんたこそ、WAXAを沈めてきたときと同じ格好でいたら見つかったちゃうよ」

「見つからないよ。万が一、見つかったとしても、このディバイン様が負けるものか」

男はディバインと名乗った。

「アフリコットも行方不明って時に・・・」

レイが言いかけていたときだった。

「すみませ〜ん！クレープ1つとアイス4つ下さいな〜！」

ミソラが4人を連れて走ってきた。

（ゲッ！ほ・・星河スバルウウ！？？　なんでここにいるのよ〜！
？）

レイはたじたじだった。

「く、クレープとアイスね。分かったわ。少し待ってね」

ミソラは目をキラキラさせて、4人は目を回しながらぐったりしていた。

「はい。クレープとアイス。値段は1600ゼニーよ」

「おしくて人気の店の値段ってこんなものよね。はい」

ミソラはゼニーを渡してアイスを皆に配った。

「あっちの噴水のところで食べよ〜よ」

ミソラは再び4人を連れて歩き出した。

「な・・・・なんであいつが？」

「俺知ってたよ。修学旅行で来てるらしい」

「なんで言っていけなかったのよ!」

レイはディバインを見た。

「だって言ってこなかったし」

ディバインは口笛を吹いた。

「だってじゃないでしょうが!早くボスに知らせなきゃ!」

「待って姉ちゃん。それよりも俺、いいこと思いついちゃった」

第42話「修学旅行？」（後書き）

今回は長いですね。ミソラがハイテンションすぎてキャラが壊れそうになりました。自分でも心配です。なんか変だったら言ってください。

感想待ってます。

第43話「修学旅行？」（前書き）

明日明日明日明日明日……。休みよ~~~~~終わるなああああ
あああ！

第43話「修学旅行？」

　　〱 シドニー：シーサイドホテル〱

「は〜〜！ 食った食った！」

ゴン太が大きな腹をさすりながら言った。

「まったく・・・ゴン太の食べる量といったら、本当に物凄い量ね・・・」

ルナが言った。

「食堂を1つ潰すところだったね・・・」

スバルが苦笑いをしながら言った。

「さあ、また明日に備えて寝るわよ・・・ふあ〜」

ルナが欠伸をしながら言った後、男子と女子に別れて部屋に戻った。

　　〱 ホテル：男子の一室〱

《だあ〜！今日はつかれたぜ〜》

「ホントだね。ミソラちゃんがあんなになるなんて・・・」

「ミソラちゃんにも意外な一面がありましたね」

キザマロが言った。

《そういえばスバル》

「ん？何、ロック？」

《今日のスイーツ店の女、どこかで見たことあったっけな？》

「僕覚えてない。あの時酔ってたから・・・」

あの時ミソラ以外の4人は猛スピードによりかなり酔っていてアイスの味もあまりよく覚えていない。

「とにかく、明日もどっか行くんだろ？ 早く寝ようぜ」

ゴン太が部屋の電気を消すと「おやすみ」といって三人とも寝付いた。

～女子の一室～

ミソラは風呂を入り終わり、髪をといていた。

「今日のクレープおいしかった」

「あんたのせいで、せつかくのアイスの味がいまいち分からなかったじゃない」

ルナはアイスの事件の他にミソラと同じ部屋が気に食わなかった。

「私はロックマン様といっしょになりたかったのに」

（ルナちゃん、それは無理だよ・・・）

ミソラは苦笑いをした。その後、ミソラははつと気づいた。

「おやおや？ ロックマンということはスバル君と一緒にいたかったのかな？」

ミソラはルナをずいずいと押した。

「ち、ちがうわよ！私が好きなのはロックマン様で、スバル君じゃないー！」

（意味分らないよ……。ロックマン＝スバル君なんだから・・・）

「あ！ そうこうしているうちにもう11時じゃないの！ 早く寝るわよ！」

「先に寝ていてね。私トイレ行ってから寝るから」

そういつてミソラは部屋から出て行った。

（男子・女子トイレ付近のウェーブロード）

「こんな作戦でうまくいくの？」

「まーまー落ち着けて。あの5人の中で電波変換できるのは3人いるが、^{ターゲット}標的はただ1人、星河スバル」

「そいつに埋め込めばいいんだな？」

「そういつとっ」と

ディバインは陽気に言った。

「でもこの一夜で成功するのか？できなければそれまでってアランが言ってたわよ」

「このデータの名は“D A E R K N E S S”（ダークネス）って言うてな、所有者の闇の心を食って成長するP G Mだ。このオーストラリアの遺跡から見つかったモノだ」

ディバインが右手から何重にも箱でロックされたドス黒い塊を取り出した。

「でもなんでチャンスは一度なんだ？」

レイが聞いた。

「さっきも言ったとおり、コイツは所有者の闇の心を喰らう。で、その食った闇の力を何日もかけて体内で増加させる。所有者の闇の心が食い尽くされた時、その者は永遠の闇の住人となる。P G Mを手放さないかぎりな」

ディバインはP G Mをしまった。

「P G Mを手放すなんてすぐにできることじゃないのか？」

レイが質問をした。

「そいつを手放せるかどうかの問題なんだよね、それは2択に迫られる」

ディバインが人差し指を立てた。

「1つ目はさつきも言った。これ以上周りの人々を傷つけない為に、手放すという方法」

そして中指も立てた。

「2つ目は、手放すと今まであふれていた力を失うということ。P G Mを失えば、力を失うという恐怖に襲われることになる。という2つの選択に迫られ、このP G Mを発掘した遺跡の壁画には自ら命を絶つ者や闇の住人になる決意をした者などいろいろいるが、ただ1人、このP G Mを手放し、封印に成功した者がいるんだよね。それで、この前発掘されたのがこの“D A E R K N E S S”って訳」

レイはあまりの恐ろしさに唾をゴクツと飲み込んだ。

「で、そいつを星河スバルに埋め込んで終りかい？」

「そう」 ちゃんとボスと研究部に許可を貰ってるよ」

2人がやり取りをしているとミソラが歩いてきた。

「~~~~~」

ミソラは音楽を聴いていた。

「気づかれるなよ、気配を消しなさい」

「はいはい」

2人は周波数を変え、気配と殺気を消した。ミソラは2人には気づかず、トイレに入っていた。数分後、ミソラはトイレから出てきて部屋へと戻っていった。

- - - 深夜2時――

「でさあゝ。なんでトイレなの？部屋の前でいいじゃないの？」

「姉ちゃん分かってないなゝ。部屋の前だとか起きたらすぐに分かっちゃうだろ？でもこの付近は他の部屋もないし、誰もいないし、監視カメラもないしね。それに修学旅行とかで夜のトイレに行く途中に心霊現象にあうなんて事もあるだろ？」

2人が話をしていると、暗闇から誰かが歩いてきた。

「きた♪ 星河スバル♪」

青いパジャマで寝ぼけたスバルが歩いてきて、トイレに入った。

「出てきたところを狙うわよ」

「OK♪」

スバルはミソラの時と違い、数秒で出てきた。

まだ寝ぼけている。

「今よ！」

レイは実体化し、背後からスバルの頭をつかみ、床にたたきつけ

た。

「あぎゃ！・・・痛ってゝ！だ、誰だ！」

スバルは目覚めた。目覚めたは良かったが、腕は完全に拘束されていた。

「ぐ・・・放せ！お前、あの時の・・・ぐあ・・・」

「デイベイン・・・やっちゃって」

レイが指示をするとデイベインはPGMをスバルに近づけた。

第43話「修学旅行？」（後書き）

感想お待ちしております

第44話「修学旅行の悪夢」(前書き)

今回は戦闘前までにもっていきつと思います。

第44話「修学旅行の悪夢」

〈ホテル・廊下〉

「デイバイン！早くしろ！」

「うぐ．．ぐぐぐ．．．！」

スバルは床に押し付けられている体勢ではなく、ヘッドロックをかけられていた。

（力が．．入らない．．．）

「よし、ロックが解けた。星河スバル、ちよいと我慢しろよ？」

「！？」

スバルが目を開けると自分の体に黒い物体が入り込んでいくのを見た。

「あああああ！ や．．やめろ！」

だがスバルの言ったところにはもう遅かった。PGMはすでに体内へと入ってしまった。

（な．．．なんだ？この感じは．．．）

「あんたには少し眠ってもらおう．．．」

「！！」

レイが力を入れるとゴキツつと鈍い音がしてスバルは気を失った。

「ちゃんと部屋に戻しておきなさい」

レイが言うとディバインはスバルを肩にかつぎ、姿を消した。

ディバインが部屋につくと、スバルを何事もなかったかのようにベッドに寝かせた。

「明日を楽しみにしているぞ……星河スバル♪」

そしてディバインは姿を消した。

一夜明けて、ホテルの一室。

スバルは他の2人より遅れて起きた。

「あゝ……。なんか……。昨日の夜……。なにかあった気がするんだけど……」

スバルが聞いた。

「ん？ 知らねーよ。それより早く着替えるよ、スバル」

ゴン太が今日持つていくものの準備をしながら言った。

「早くしないと置いていかれますよ」

「分かってるって……なんか首が痛いんだよね……寝違えたかな？」

スバルは昨夜の事をあまり覚えていなかった。

「トイレに行つて……それから……？」

スバルは着替えながら言った。

「どうせまた寝ぼけてたんだろ？ さつさと行くぞ」

「あゝ、待つてよ」

スバルはあわてて2人を追つて部屋を出た。

（ホテル・玄関前）

「遅いわよ！ いったいいつまで待たせるのよ！」

「委員長……5分程遅れただけじゃないですか」

「うるさい、うるさい！ 私はこの暑さの中今イライラしてるのよ！」

（それはあんたの都合だよ……）

「ほら！ さつさと行くわよ！」

ルナはせつせと歩きだした。

「あ、委員長！」

キザマロはルナのもとに行き、ピンクの日傘を出した。

「さっ！ 私たちもいこっ」

ミソラがスバルに言った。

（動物園）

『キヤーー！ 可愛い〜〜〜！』

女子全員が釘付けになっていたのはオーストラリアに生息するコアラだった。

釘付けになっている理由はじっとしているコアラのちょっとした動作が超可愛いのだ。

「ねえ飼育員さん！ このコアラ貰えますか？？」

ルナが聞いた。

「無理ですよ。コアラはここにしか生息していませんし、天然記念物ですしね」

飼育員が笑顔で言った。

「ちえ、家で飼おうと思ったのに・・・」

ルナが怒って腕組をした。

「コアラみてなにがおもしろいんだ？」

《同感だ！ 他になにかおもしろい事ねえのか！？》

ゴン太とロックが言った。

《例えば、敵が攻めてくるとかさ》

ロックが言ったときだった。動物園の天井が崩れ、火災が発生した。

「な・・・何だ！？」

「ご希望通り、攻めて来たよ」

第44話「修学旅行の悪夢」(後書き)

次回、戦闘開始です。

感想お待ちしております。

第45話「業火と雷撃」（前書き）

前回のタイトル「修学旅行の悪夢」と内容が一致していなかったような気がします。おかしかったら感想に入れてください、お願いします。

第45話「業火と雷撃」

「希望通りって、誰も希望してないよ!」

「君じゃないよ、星河スバル。君のウィザードさっ」

デイベインがロックを指差した。

「ロックが?」

《頼んではねえが、言ったぞ? ちょうど誰かとやりたかったところなんでな!》

ロックは戦う気満々だった。

「お前は誰だ! B Aの人間なのか?」

スバルが聞いた。

「以前にも私と手合わせしたことを忘れたのか? 星河スバル・・・」

デイベインの後ろからレイが現れた。

「お前は、あの時の!」

《よくもあん時はPGMを奪ってくれやがったな!》

「あの時? どういう事なの?」

ミソラが聞いた。

「僕が初めて獣化 PGM を貰った日の夜、こいつがノイズ PGM を狙って僕と戦ったんだ」

《そんな時の借りを今日返せるんだ！ やるぞ、スバル！》

「よし！ トランスコード、シューティングスターロックマン！」

スバルは青い光に包まれ、ロックマンの姿となって現れた。

「俺たちもやるぞ、オックス！」

《ブロロツ！ 腕になるぜ！》

「待って、ゴン太！」

「！？」

ゴン太が電波変換しようとしたとき、スバルが引き止めた。

「これは僕にやらせてくれ」

「大丈夫か？ 相手は二人だぞ！」

「大丈夫……僕には新しい力がある」

するとスバルは「Beast X System 起動」と言った。

――了解・・・PGM起動・・・グレイガモードへノ変身・・・
開始シマスー

PGMを起動させた後、スバルは青い光に包まれた。

数秒後、光を破って現れたスバルの姿は、5つの青と金色こんじきの鬣に、銀色に輝く鋭い爪、青色の長い尻尾。その姿はまさに狼だった。

「こりゃあ驚いた。奴のいつていた通り、これが“極獣化”ってやつですか」

《どうして奴が“極獣化”のことを知ってんだ！？》

「さあね、あえて言うならば、我々と同じ目的を持った者だ」

レイが言った。

「なあ、それよりはやく始めようぜ？ 皆さんもとつと避難しまいやがったところだしよ」

《こっちの準備はもう出来てるんだよ！》

「おっと、こっちがまだだったな。そんじゃあ、いくよ」

ディバインが言うと、レイは赤い光に、ディバインは黄色い光に包まれた。

「先に言っておこう、ロクマン。私たち二人の戦闘力は、BAの中でも随一だ。貴様一人といえど、絶対に勝つことはできません・・・」

レイとディバインが光の中から姿を現した。ディバインの姿は、ヘッドフォンの辺りが雷の形をしており、腕のアームの部分からはバリバリと電気が漂っていた。背中には電気で作られた翼があった。メインウェポン主力装備は腰に装着された2丁の銃。

「この、業火と雷撃の前ではなっ！！」

第45話「業火と雷撃」(後書き)

感想おまちしております！

デイベインのメインウェポンを銃に設定しました。

第46話「チャージ」（前書き）

こんにちわ。いやあ、困った事がありましたね、ソフトが故障してしまいました（パソコンです）、最終手段として初期化リカバリをやらなければならぬほどでした。メイプルもインストールしなおし・・
・などなど・・・

そんな中執筆しております。読んでください！

スバルのグレイガフォルムはエグゼロツクマンのまんまです。変わってない所は胸のペンダント部分です。

第46話「チャージ」

「業火と・・・雷撃・・・」

《俺達が敵わねえだあ？ ふざけんじゃねえよ！ ぜってー勝ってやる！》

「このグレイガの力を見せ^{パワー}てやる！」

「やてみな」

そうディバインが言うと、腰の銃を抜いた。

「お手並み拝見♪」

「先に言っておくが、こいつの腕前は百発百中だ」

レイが言うとディバインは弾を4〜5発放った。

「よけやしないさ」

スバルはそう言つて、爪ですべて弾いた。

「へえーやんじゃん。普通の弾より速くて強度があるんだけどな。でも・・・」

そういつとディバインの腕のアーム部分に溜まっていた電気が銃に流れ込んでいた。

「ロックマン・・・俺のこのアームにある電気を貯める部分はなんのためかわかるか？」

「？」

「わかるわけないか」

すると、さっきまで銃に流れ込んでいた電流が途絶え、銃が光っていた。

《まさか、電気をチャージしてたのか！？》

「ご名答！ さっきより攻撃力と速さ、貫通力が増したよ」

そういうと銃からはただの銃弾ではなく、雷の柱を帯びた銃弾が放たれた。

《あんな太いのは受け切れねえ！ バリアだ！》

「バトルカード！ スーパーバリア！」

スバルはロックの指示でバリアを張った。

「無駄だよ」

「何っ！？」

バリアは全く役に立たず、一瞬にして突き破られた。

スバルは対応できず、やむ負えなく爪を巨大化し、両手で受けた。

「ぐおお・・・」

「無駄よ、ロックマン。電撃をチャージした彼の銃弾を受けとめる事はできないわ」

「な・・・に!？」

それはレイのいったとおりになった。爪は弾かれ、2発の銃弾はスバルに直撃した。

「ぐああ!」

「その装備、結構硬いんだね。次は突き破るよ」
アイマー

デイベインはというと銃口を再びスバルに向けた。

「さっきのは2割のチャージだ。次は4割くらいでいこうか」

「やらせるか!」

スバルはそういうとデイベインに向かって飛びかかった。

「邪魔はさせないわよ!」

「!?!」

レイが横からスバルを炎の拳で突き飛ばした。

《邪魔しやがって・・・》

「まずは、お前からだ・・・」

スバルは小さくかがみ込み、両手を前に突き出し、地面に食い込ませた。

「何をする気？」

「見てな・・・」

スバルはそういうと、腕をばね代わりにし、レイの方向に猛スピードでと飛んだ。

スバルは空中で爪に赤いオーラをまとわせた。

「うおお！
バーニングクロー
灼熱の爪！」

第46話「チャージ」(後書き)

感想待ってるよん

第47話「王の咆哮」(前書き)

ちわっす！お久しぶりです〜！今日から執筆を再開いたします！

第47話「王の咆哮」

「バーニンググロー!!」

スバルは燃える爪でレイに向かって飛びかかった。

「フッ! ロックマン、炎についての攻撃で私を上回ることなどできないわ!」

レイがそういうと、スバルの攻撃を炎の盾で防いだ。
シールド

「何っ!?!」

「デイベイン……、連携決めるよ……」

「了解……!」

デイベインが合図をおくると、レイは空中で身動きの取れないスバルの上にいった。

「覚悟しろ、ロックマン!」

《いったい何をする気だ!?!》

「わかんないけど、逃げたほうがよさそうだね……」

スバルはそういうと、グレイガにキグナスノイズをXさせた。
クロス

「逃げてても無駄よ、この攻撃の前ではねっ!」

レイが言うと、空中で巨大な炎の円を描いた。

その円は波紋のように広がり、スバルもろとも地上へ落下した。

「ぐあああ！ くそっ！ 周りを炎で囲まれた！」

《しかも何層にもなってやがる！ これじゃあ逃げらんねえ！》

「フレイムサークル！ そして、この炎から生み出されるのは……」

レイが言うと、スバルを囲っている炎から次々とレイと同じ形をした物が現れた。

「なっ、何だ！？」

「フレイムロイド……！ こいつら一体一体が私と同じ戦闘能力を持つ……！ さらにはこのフレイムサークルが存在するかぎり、こいつらは生まれ続けるぞ」

レイがそう言っている間にもフレイムロイドは次々と現れていた。

「貴様に逃げ道はない……！ 上に逃げれば銃の餌食となる」

デイベインは弾をリロードし、雷をチャージしていた。

《完全にやばい状況だぜ……》

「どうやら話す時間もないみたいだ……ねっ！」

スバルはそう言うと、向かってきた数十体のフレイムロイドを爪でかき消した。

しかしロイドはひるまず、次から次へとロックマンへと向かっていった。

「つく！　こんな数、相手にできない！」

「ほらほらロックマン、お釣りがくるぞ」

レイが言うと、ロックマンの背後から数体のロイドが襲ってきた。

「なめるなよ！　尻尾はこういつときのためにあるんだ！」

スバルがそう言うと、尻尾から棘が突き出し、棘のついた尻尾でロイドをなぎ倒した。

「それだけじゃないさ！　アレを使うよ、ロック！」

《暁からもらったやつか！　よし、いっちょやったれ！》

「何をする気？」

「まあ見てな。　バトルカード！」

スバルが叫ぶと、ギガクラスカードをインプットした。

「まさか・・・！　そのカードは！？」

「そう、電腦獣のカードだ！」

スバルの背後にはグレイガの化身が現れていた。

「うおおおお！ グレイガファング！」

すると、化身から荒々しい咆哮が放たれ、フレイムロイドごと炎もすべてかき消した。

「ぐあああ！」

「おおっと！ あつぶねえ、飛ばされるとこだったぜ」

デイバインは持ちこたえたが、レイは壁に吹き飛ばされた。

「終わりだ！ ハウリングビースト！」

スバルはそう言うと、自分の分身を四体出現させ、レイに向かって突撃させた。

「ぐああああ！」

「うおおお！ Xブロー」

スバルはそう叫ぶと、レイに向かってX字のクローを浴びせた。

「うぐ・・・！ ガハッ！」

「終わりだ」

「あんたがね・・・」

「！！！！」

レイが小さくほほ笑むと、スバルは背後から五発の銃弾で打ち抜かれた。

第47話「王の咆哮」(後書き)

スバルピンチ！次回をお楽しみに〜(^ u ^)

感想待ってるよ〜！

第48話「生死の狭間で」(前書き)

こんにちわ。阿修羅です(^u^)

今回の話は2部のDEAKNESに続く引き金となるお話なので要チェックです。

第48話「生死の狭間で」

スバルはドツとその場に膝をついた。

「うぐっ・・・！」

「ハア・・・ハア・・・もう少し溜めが遅かったらやられてたよ」

「姉ちゃん油断しすぎだよ」

ディバインが下に降りてきて言った。

「ガフツ・・・！ もう一人いることを忘れてた・・・！」

《油断しやがって！ 立て、スバル！》

「無理だよ、ロックマンはもう動けないよ。両腕、両腿、右腹を撃ったからね」

ディバインはそう言うのと再び雷をチャージし始めた。

《次撃たれたら終わりだぞ！》

「今の君なら3割で大丈夫そうだな」

「ぐっ・・・！」（体さえ動けば・・・！）

「終わりだよ」

デイベインがスバルに狙いを定めた時だった。

「ショックノート！」

どこから音符が数発飛んできて、スバルを囲うように着弾した。

「チツ！ 誰だ！」

「あたしらをこいつから引き離すつもりだね」

（この攻撃・・・まさか！）

スバルが顔を上げると、目の前にはハープノートの姿があった。

「スバル君、大丈夫！？」

「どうしてミソラちゃんが、ここに？ みんなと非難したんじゃない？」

「どうしても気になって来てみたら大変なことになってるね。こんな傷だらけになっちゃって」

ミソラがスバルにリカバリーを使った。

しかしあまり効果はなかった。

「ふうん、助っ人か。でも意味ないよ、どうせ君も死ぬんだから」

「スバル君は死なせない！」

「だめだよミソラちゃん！ 君じゃ敵わない！」

スバルは尻尾でミソラの足を抑えた。

「君は逃げるんだ!」

「彼の言うとおりさ、諦めて彼をおいていきな。それとも、ここで仲良く一緒に死ぬかい?」

ディバインが2丁の銃を2人に向けた。

「望むところよ! スバル君は死なせないっていったでしょ!」

ミソラがギターを構えた。

「パルスソング!」

ミソラがギターを弾くと、ピンクの音波が放たれた。

「軟弱な電波だ……。あたしがやるよ」

「まかせました」

ディバインは銃を下げた。

「はあああ! 烈火突き(ブレイズスピア)!」

レイは片手の爪に炎をまわせ、強力な突きを繰り出した。

ミソラの攻撃はレイの突きの前ではまったく無意味の攻撃だった。

「きゃあああ！」

ミソラは攻撃をともに喰らって、床に叩きつけられた。

「ミソラちゃん!!」

「ぐうう・・・！」

「そんじゃ、仲良くあの世行きな」

ディバインはチャージの終わった銃を2人に向け、弾を放った。

一方の弾はミソラの右胸に、もう一方の弾はスバルの左胸に命中した。

2人はその場で動かなくなった。

「ん・・・。女の子の方はちょっと外したかな？ でも、ロックマンはおしまい」

「あつけない最期だったわね。これで、組織の邪魔者はいなくなっ
た」

「まった、この子も殺^やっていいこう。俺たち新たな邪魔者になりかね
ないし」

ディバインはそう言って、銃口を向けた。

「・・・・・・・・ここは・・・・どこだ？」

スバルは見知らぬ場所に立っていた。

霧が深くて１メートル先くらいしか見渡すことができない。

スバルは霧の中を歩き続けた。

しばらくすると霧が晴れて、大きな銀色の門が現れた。

「大きい門だなあ・・・・・・・・ん？ 待てよ、僕はさっきまで戦ってたんだよな。だったらどうしてここに？」

スバルはしばらく考えた。

「あ、そうか！ 僕、今から死ぬんだ・・・・。だからこんな場所にいるんだ・・・・・・・・もう少しやりたい事あったのにな・・・・・・・・」

スバルが言うと、門が開いた。

しかし、スバルがくぐろうとすると、目の前にデイベインがミソラに銃口を向ける映像が現れた。

「み・・ミソラちゃん！！ まだ死んでない、ていうか今から殺されちゃう！ どうしよう、防ぐ方法は・・・・」

クゲルガヨイ

「え？」

突然門の奥から声が聞こえた。

彼女ヲ救イタケレバ行クガヨイ・・・現世ヘトツナガル道ダ

「よくわかんないけど・・・ありがとう！」

スバルは走り、門をくぐった。が、その時だった

あたりに銃声が響き、スバルが映像を見に振り返ると、ミソラに弾が命中していた。

「そんな・・・嘘だ・・・！」

・・・

「嘘だあああああ！！！！」

スバルは我を忘れて叫んだ。

そのあと、スバルは現世へと向かって無我夢中で走った。

・・・ダレニモ、トメラレナイ・・・アノチカラハ
強大スギル・・・

第48話「生死の狭間で」(後書き)

今回は長かったですが、読んでくれてありがとうございます！

感想待ってます！

第49話「闇にのまれて……」（前書き）

こんちわ〜（^u^）

闇の力“DEAKNESS”が機動します。この力を止めることはできるのでしょうか？

第49話「闇にのまれて……」

「これで終わってたわね。ボスに報告よ」

「ボスにたんまりとご褒美もらっちゃお♪」

2人がそんな会話をしていると、動かなくなったスバルの体から黒い煙が噴き出した。

「……ない……ぞ！」

「ん？ 何だ？」

《おお！ 起きたかスバル！》

「あの黒いものはどこかで見たことあるわよ」

2人はスバルの方を向いた。

「……許さ……ないぞ！」

《！？ どうしたんだ……スバ……！》

ロックの声は突然遮られた。闇にのまれたのだ。

スバルは黒い煙を噴き上げたままゆらりと立ち上がった。

「あ、分かった！ “DEAKNESS”だ♪ すっかり忘れてた」

「で、どうすんのよ。せつかく仕留めた獲物が生き返っちゃったけど、あんた、どうしてくれんのよ？」

「あれはアランが実験に使ってくれて言ったんだ。俺じゃない」

2人が言い合っていると立ち上がったスバルの体は足元から青かった部分がどんどん黒くなっていた。

「絶対に・・・許さない・・・！ 殺してやる！」

怒りが頂点に達していたスバルの体はグレイガのまま黒くなり、鬣こじきの金色が黒の怒りをいっそう強調していた。

「覚悟しろ・・・！」

「おゝ怖えゝ！ おぞましいねゝ、復讐心つてのは」

「のんきな事言っでないで、さっさと片付けるよ」

「あいさゝ」

デイバインは銃を構え、雷を急速にチャージし始めた。

「時間稼ぎよろ」

「OK」

レイは前に出た。

「こっちも傷を負っているとはいえ、あんたは怒りに身をまかせて

無理やり体を動かしているだけよ。いずれは体が壊れて動けなくなるわ」

「・・・・・・・・消える・・・・・・・・！」

スバルは瞬時にそこから消えた。残っていたのは残像だけだったが、しばらくして消えた。

「！？ どこへ行った！？」

レイがあたりを見渡していると、レイの背後の足元に闇が現れた。

「姉ちゃん、後ろ！」

デイバインが言った時は遅かった。

レイが振り向いた時には闇の中から現れたスバルは爪をたて、レイをすり抜けて、気付いた時はレイの背後にいた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・な・・・・・・・・何も起こらないじゃない」

「いや・・・・・・・・姉ちゃん・・・・・・・・もう終わってる・・・・・・・・」

デイバインは下うつむいてレイに言った。

「・・・・・・・・終わってるって？ どういうこと・・・・・・・・！！！」

突然の出来事だった。

レイは体中から血を噴き出してその場に倒れこんだ。

その体には、無数の切り傷が目立っていた。

「・・・・・・・・闇裂き（ダークスラッシュ）」

レイはうつ伏せに倒れこんだ。

「あぐつ・・・・・・・・！ 逃げる・・・・・・・・ディバイン・・・・・・・・！」

そう言ってレイは動かなくなった。

「あと1人・・・・・・・・」

「つく・・・・・・・・！ あいにく俺は逃げるタイプじゃないんでね！ 死になー！」

ディバインがスバルに銃口を向けて弾を連射した。

しかしそれはヒョイとよけられ、またもやスバルの姿は消えた。

「もう二度とその手にはひっかからねえぜ」

ディバインは背後に銃口を構えた。

「それはどうかな・・・・・・・・？」

「えー!?」

ディバインの読みは外れていた

今度はディバインの足元に真っ黒な闇が現れた。

「足元だとお！ くそうつ！」

ディバインの足は闇にとらわれ、身動きがとれなかった。

その中からスバルが手を伸ばし、ディバインの足をひつつかみ、闇へと引きずり込んだ。

第49話「闇にのまれて……」（後書き）

次回、決着します！勝者はどっちだ！

感想待ってます。

第50話「闇に光る電光」

「スバルの闇」

「おゝいてえゝ。よりもよつて闇に来ちまつた」

デイバインは頭を押さえながら立ち上がった。

「・・・・・・・・」

「！！」

デイバインは背後から鋭い殺気に気付き、攻撃態勢をとった。背後には赤い眼光が光っていた。

「そこか！」

デイバインは闇に向かって銃弾を数発放った。

しかし、赤い眼光は素早く避けたが、一発命中した。

「・・・・・・・・ガアッ・・・・・・・・！」

スバルは再び闇の中に姿をくらました。

「また消えたか・・・・」

「・・・・・・・・」

「だが、今放った銃弾には発信機が付着している。弾が貫通してなければお前の場所なんて……！」

ディバインは銃弾を背後に放った。

「グアア……！」

銃弾は見事に命中し、スバルの肩を貫いた。

「まだまだあ！」

ディバインは雷属性の銃弾を連射した。

「サンダー・レイン！」

スバルは態勢を立て直し、闇をまとわせた爪で攻撃を相殺した。

「やっぱり一筋縄ではいかねえや。なら……」

ディバインは距離をとり、カートリッジを入れ替えた。

「これでくたばれ！」

ディバインは大量の雷をチャージし、銃口をスバルに向けた。

「はああああ！ボルテックス・キャノン！」

銃口からは、カートリッジの銃弾が雷をまとい、一揆に放出された。

「・・・・・・・・・・！」

「お前にこれが防げるか！？」

「・・・・・・・・・・！！」

スバルは両手を広げ、巨大な雷を両手で挟むように雷を受けた。

「くそっ！ 追加だあ！」

デイベインは高速でリロードし、雷をまとった銃弾を追加した。

「・・・・・・・・・・ぐおお・・・！」

「ハア・・・ハア・・・！ これでどーだ！？」

デイベインはエネルギー源である雷を使いすぎ、膝をついた。

「・・・・・・・・・・フツ・・・・・・・・・・！」

しかし、スバルはニヤツと笑い、雷の塊をデイベインに向かって跳ね返した。

「・・・・・・・・・・え？」

デイベインは対応できず、雷をもろに受けた。

「そんなっ！ まさかっ！」

雷はバリバリと音を立てて、デイベインを包んでいった。

「く・・・っそお・・・！　こんな・・・ところ・・・で・・・！」

真っ暗な闇の中で、巨大な雷の塊は完全にデイベインを飲み込んだ。

「ぎゃあああああ・・・ああ・・・・・・あ・・・！」

雷は四方八方に放電し、闇を切り裂いていった。

第50話「闇に光る電光」(後書き)

変な終わり方でした？

感想待ってます！

第51話「報告」(前書き)

どうも、お久しぶりです。久しぶりの投稿なので書きたい事がいっぱいあります。少し長くなるかもしれませんが。

第51話「報告」

スバルが気がつくと、目の前に白い天井が見えた。

「う．．．うう．．．」

「ああ！ よかった、気がついたのね！」

スバルの横にはルナ、ゴン太、キザマロがいた。

「あれ？ 委員長．．？ それと、ゴン太にキザマロ．．．なん
で？」

「なんで？ じゃないわよ！ ここは病院よ、日本の！」

ルナがスバルにどなった。

「スバル君が動物園の中で倒れているところをみんなで見つけて、
最初は向こう（オーストラリア）の病院に搬送されたんだけど、容
体が安定してきたからこっちに移されたのよ」

「それよりよお、スバル．．．一体なにがあっただんだ？」

「何がって．．．？」

スバルは再びベッドに横になって聞いた。

「だってよ、敵の二人組の一人は血だらけ、もう一人は黒焦げ、い
ったい何があっただんだ？」

そのあと、キザマロが続けて言った。

「それにスバル君を助けに行ったミソラちゃんも……」

キザマロが「ミソラ」と口にした瞬間、スバルは急にベッドから起き上がった。

「そうだ！ ミソラちゃんは！？ 容体はどうなの？」

「待て待てスバル。ミソラちゃんはちゃんと生きてるし、いま別の部屋で寝てるよ」

ミソラが無事という事を確認したスバルは、安心してベッドに横たわった。

「そう、よかった……」

「で、スバル。さっきの質問の返答は？」

「そうよ、一体なにがあつたのか話しなさい！」

三人に責められたスバルはしぶしぶ話し始めた。

「ゴン太は知つての通り、僕は獣化をして二人に立ち向かった。でも二人の連携コンビネーションの方が圧倒的で、僕は銃で撃たれて倒れたんだ。でもそこにミソラちゃんが助けに来たんだ。でも、当然ミソラちゃんの敵う相手じゃない。ミソラちゃんも撃たれて倒れたんだ。僕も死にかけた、たぶん狭間まで行つたんだと思う。でもそこでミソラちゃんが撃たれるのを見て……」

スバルの話が止まった。

「見て・・・・・・・・それで？」

「それ・・・・・・・・で・・・・・・・・駄目だ、思い出せない！」

「そこから無意識に戦ってたって事ですか？」

「たぶん・・・・・・・・」

「“怒り”じゃないのか？」

三人が会話していると、別の人の声が聞こえた

聞きなれた声だな・・・・？ 誰だろう？

三人が振り返ると、そこには暁とWAXAの隊員が数名立っていた。

「暁さん！」

《アシッド！》

《お久しぶりです、ウォーロック》

二人の間には早くも火花が散っていた。

「やめてよ、ロック」

「やめとけて、アシッド」

二人に止められたロックとアシッドはお互いにそっぽを向いた。

「元気か？ スバル」

「そつでもないです」

「だろうな」

暁はハハハと笑った。

「スバル、ちょっと話がある。他の三人は席を外してくれないか？」

『分かりました』

暁に言われて、三人は部屋を出た。

「暁さん……話って？」

「いきなり本題に入るぞ、スバル」

スバルは唾を飲み込んだ。

「スバル、お前は闇の力に汚染されている」

「えっ……？」

スバルは何のことか分からなかった。

「何のことかは分からないだろうな、今から説明してやる。お前は闇のP G M “DARKNESS” に汚染されているんだ、今、この時も」

「闇・・・？ DARKNESS？ なんですか・・・それは？」

「DARKNESSはお前の心の中の“怒り”“憎しみ”“罪悪感”などを取り込んで成長している。取り込むのは簡単だが、出すのが難しくてな、今は三日前に力を発動したから弱まっているが、いずれ、活動を開始するだろう」

「そんな・・・でも、いつ・・・そんな事が分かったんですか？」

「動物園の生きていた監視カメラの映像を見て分かったんだ」

「どうして、僕の中にそんなものが・・・？」

「くわしい理由はわからないが、これは事実だ。それで、今日の4時から、お前のDARKNESSを封印するための作業を行う、なあと、封印といってもP G Mを氷で固めて仮死状態にするだけだ」

「仮死・・・状態ですか？　じゃあ、またいつか目覚めてしまうかも・・・」

「目覚めるも目覚めないもお前次第だ、スバル。お前が闇を作らなければいいのさ」

暁がスバルの肩をポンと叩いた。

「じゃあな、スバル。4時に7階の特別治療室にこいよ」

そう言っで、暁は部屋を出て行った。

「闇・・・・・・・・・・か」

第51話「報告」(後書き)

次回、修学旅行編完結！

感想待ってます！

第52話「帰還」(前書き)

こんにちわ

最近レイアウト設定で困っています。ここから編集にて訂正：背景画像ではなくて、宮原悠馬さんのプレアデスの絆やantinosさんラストナンバーズの小説の下にあるイラストの事です。どうやったら設定できますか？

第52話「帰還」

（特別治療室）

「それじゃあ、始めるぞ」

「は・・・はい！」

スバルは仰向けになって3台の大型機械に囲まれていた。

まず初めに動いたのはスバルの頭上にあつた機械がスバルの頭から足の先まで電磁波をあててサーチしはじめた。

その横で暁がなにやら難しそうな顔をしてモニターを見ていた。

「なるほど、そこか！　よし、氷結電波発射だ」

暁がボタンを押すと、次はスバルの左手付近にあつた機械が動きだし、スバルの右肺付近に凍えるような電波を浴びせた。

「う・・・冷たっ！」

「大丈夫だ、すぐ終わるさ」

スバルは目を閉じていたが、しばらくして開けると、機械はもとの位置に戻っていた。

「凍結完了です」

「じゃあ最後だな。スバル、少し体の中が気持ち悪くなるかもしれ

ないが我慢してくれ」

「え……ちょ」

スバルは質問しようとしたが、次の機械が動き出して、再び右肺付近にやてきた。

「よし、ナノサイズ警備ロボを発射！」

「ええ？ 警備ロボットを中に入れるんですか？」

「それしか方法がないんでな」

暁は二カツと笑った。

「少し我慢してくれよ」

するとスバルに向かって赤いレーザーが放たれた。

よくみると黒い粒粒が点々と見える。

「うう……！」

「中で凍結したDARKNESSに鎖をつけてるんだ。あと70%くらいかな」

「意外と……作業はやいんですね……」

スバルは少し苦しそうだった。

「長期戦になるとヤバいからな。凍結後すぐやらないと闇が漏れだしちまう」

「残り40%です」

「順調に進んでるな」

暁は再びモニターの前に戻った。

「やはりDARKNESSもしぶといな、20%地点で鎖を巻かせまいと抵抗している」

「これでは作戦Bを使いますか？」

（・・・・・・作戦B？）

スバルは暁たちの方を見た。

見てみると、暁は電波変換をし、スバルに近づいてきた。

「スバル、ちょっと痛い但我慢しろよ」

「え・・・・・・何を？」

「ちよいとDARKNESSの効力を弱める」

暁はブラスターをスバルの体に向け、光線を放った。

「ぐわあああ！」

「さあ！ さつさと降参しろ！」

暁が光線の威力を強めた時だった。

「暁さん！ DARKNESSが弱まっています。封印完了しました！」

「よし、終わったぞ、スバル」

「ううう……！ やつと終わった〜！」

スバルは大きく伸びをし、言った。

暁は電波変換を解き、扉へ向かった。

「あ、そうそうスバル。もう退院許可がおりたぞ。久々に家に帰れ」

「暁さん、ありがとうございます」

スバルは暁に頭を下げた。

「別にいいって」

そう言って暁は部屋を後にした。

〜病室〜

「で、どうだったの？ スバル君」

ルナが聞いた。

「え・・・？ どうって」

「何してたのよ」

「曉さんに呼ばれてただけだよ」

するとルナは不機嫌そうに言った。

「それだけじゃないはずよ！」

「そ・・・それだけだよ、本当に！」

スバルは必死に言い訳をした。

「ほんとーに、それだけ？」

「本当だって！ 信じてよ」

ルナはしかたなく納得した。

「分かったわよ、信じるわ。あと、私たちはいつでも力になるからね、いつでも相談してきなさいよ！」

「分かったよ、じゃ、明日学校で」

ルナは帰っていった。

「さあて、僕らも帰ろうか」

《それはそうと、いつ話すつもりなんだ？》

ロックが聞いた。

「……話すつもりはないよ。だって、余計な心配はかけたくないからね」

《そうか、俺は別に口出しするつもりはねえが、好きにしろ》

「ありがとう」

短い会話を終えると、スバルはいつもの赤い服に着替えて、電波変換し、家へと帰宅した。

「スバルの家」

「ただいま」

スバルが玄関に入ってくると、「おかえり」とミソラがゆっくりと歩いてきた。

「み、ミソラちゃん！ どうしたの？」

「思ったより、傷がひどくてね。当分学校に行けそうにないや」

ミソラとスバルはリビングに行き、ミソラはソファにもたれかか

った。

「あ、お母さんなら仕事でいないよ。お父さんもだよ」

「そつか。じゃあ僕、先に寝るね」

「私は新曲のタイトル考えなくちゃいけないから、もう少しここに
いるね」

「分かった。あんまり無理しちゃだめだよ」

「ありがと。じゃ、おやすみ」

ミソラはスバルにおやすみを言った後、スバルが完全に部屋に入
ったのを確かめると深くため息をついた。

《ミソラ……やっぱり言わなかったのね》

「だって……」

ミソラはソファに寝転がった。

「遅かれ早かれ、みんな知っちゃうことだしねえ」

《新曲のタイトルだなんて、うまい言い訳ね》

「はあゝ。完治するまで約3年かあゝ……さびしくなるな」

《まさか喉を撃たれるなんてね、声を奪われるよりましだったわね》

「うん．．．歌えなくなっちゃった．．．」

ミソラは再びため息をついた。

夜のコダマタウンの展望台、ある男がそこには立っていた。

「久しぶりだな．．．コダマタウン．．．スバルたちはいるかな．．．」

《ウォーロックちゃん、強くなってるんだろうなあ？》

男と電波体は夜の闇に包まれた。

第52話「帰還」(後書き)

次回から新章開始！

感想待ってます。レイアウト設定の件もよろしくお願いいたします！

第53話「学園祭1」（前書き）

さて、今回から新章突入です！どうぞ、お楽しみください！

第53話「学園祭1」

「うーん……まだ眠いよ……」

スバルは布団にくるまってベッドで寝ていた。

「スバル君、起きてよー！　またいつもと一緒にじゃない！」

ミソラはスバルを起こそうと必死に布団をとろうとしていた。

《ミソラ、こういう時はまたアレを使いませよ》

「そうね、スバル君が起きないなら仕方ないよね」

ミソラはニヤツと笑った。

「バトルカード、トリップソング！」

ミソラがカードを使うと、スバルの耳元にシシディーバが出現し、大音量で歌いだした。

「がああああ！　うるさい、うるさい！」

「じゃ、さっさと起きようね」

ミソラは笑顔になった。

「ううう……分かったよ……」

スバルはしぶしぶ布団から出て、ベッドから起きた。

「じゃ、下で待って……」

ミソラが言っている途中だった。

スバルは寝ぼけていたのか、階段から転げ落ちた。

「ちょ、どうしたの、スバル君!？」

「あ……頭が……クラクラする……」

スバルの目は回り、頭上に星が舞っていた。

「あ、トリップソングの効果忘れてた!」

ミソラはカードの効果をよく見た。

「混乱だっけ……」

「み……ミソラちゃん……もうちょっと慎重に使ってよ……」

スバルは立ち上がり、着替えをクローゼットから出した。

「先下行ってよ」

「オーケー! 遅かったらおいてくからね」

ミソラは下に降りて行った。

「僕も自分で起きる癖つけなきゃな」

スバルはため息をついた。

「母さん、飯」

スバルは荷物を持って降りてきた。

「早く食べちゃいなさい、片付けられないでしょ。今日も仕事なんだから」

スバルは「はいはい」とあいまいな返事をして席に座った。

「ん、そういえば母さん。ロック知らない？」

「知らないわ。またそこらへんうろついてるんじゃないの？」

「そうだといいけどね」

スバルはパンを口に含み、カバンを持って玄関に向かった。

「ら、いっれきまーす」

スバルの口の中にはパンがあったため、聞き取りづらかった。

「早くしないと遅刻するわよ」

「分かってるよ」

スバルは扉を開け、学校に向かって駆け出した。

　　コダマ中学校

「なんとか間に合った！」

スバルは教室に滑り込み、机にカバンを置いて言った。

「スバル君、もうちょっと余裕をもって登校できないの？」

さっそくルナが文句をたらしにきた。

「そんなに早く学校にきてもなにもないしね」

スバルは大きく伸びをした。

「あきれた。あ、そう言えば、あんたんとこのウォーロックが、今日うちにきてたわよ」

スバルはロックの事を聞いて急に飛び上がった。

「え？　ロックが委員長の家には？」

「ええ、なんかモードにいろいろ聞いてたわよ」

「そつえば、俺んちにもきたぞ」

ゴン太が割って入ってきた。

「ゴン太の家にも？」

「ああ。オックスとなんか張りあってたけどな」

「ロック、何してんだろ」

「ロック君、僕の家にも来ました」

キザマロがスバルに言った。

「キザマロの家にもかゝる……探し物でもしてるのかな？」

「たぶんそうだと思いますよ。どちらかというと人探ししてるみたいですよ」

「“人”なの？」

「あ、“電波体”です。ウィザードでも探してるんですかね？」

スバルはため息をついた。

「まったく、ロックっては何やってんだ？」

その時、HRを告げるチャイムが鳴った。

育田先生が扉をガラツと開け、教室に入ってきた。

「今日みんなには発表がある、席につけ」

育田先生は教卓に荷物を置き、しゃべりだした。

「実は、来週の土曜日、この学校で学園祭をやることが決定した」

育田先生が言うと、クラス中がざわめいた。

「全クラス、劇をやることが決まっている。そこで、だれか監督をやってくれんか？」

育田先生が言うと、ルナがさっそく手を挙げた。

「お、いつも白金は積極的だな。他にだれかいないか？」

しかし誰も挙手せず、みんな賛成だった。

「よし、じゃあ白金に決定だな」

「やった！（これでロックマンさまとの共演が決定したも同然よ！）」

ルナは心の中で笑った。

「じゃあ、白金は昼休みに職員室に来てくれ。学園祭についての細かい説明をするからな」

「はいっ！」

そう言って、育田先生は教室を出た。

第53話「学園祭1」（後書き）

新章1話目でしたが、この続きは予想できませんでしょうか？

感想待ってます！

第54話「裏話1」（前書き）

ちわっす。この章の構成は学園祭の話と裏話の交互になっています。裏話は前の話と並行しておきているものと思ってください。

第54話「裏話1」

〈展望台〉

展望台には一人の少年と一人の青年が立っていた。

「例の情報は集まったのか？」

「ああ、ちゃんとここにある」

青年は少年に二つ折りにされたメモ用紙を手渡した。

少年は用紙を開き、読み終わるとポケットに入れた。

「奴らに動きはあったのか？」

少年は聞いた。

「いいや、ないぜ。だが、問題は起きたようだ」

「問題？」

青年は小さいメモリーチップを取り出した。

「これを見ても。お前のよく知っている顔が出てくるはずだ」

青年はチップを渡し、笑った。

「知っている顔？」

《俺も知ってんのか？》

「ああ、二人とも知ってる顔だぜ」

少年はチップをハンターに差し込んだ。

しばらくは雑音と噴煙だけ映っていたが、しばらくして、煙が消え、画面がクリアになった。

「よく見えない・・・アップにしてみよう」

少年は映像をアップにした。

そこには、ある人が映っていた。

「こ、こいつは!？」

《おお。派手にやってやがるな》

少年とそのウィザードは映像を見て驚いた。

そこにはロックマンが映っていたのだ。

「こ、これはどこで？」

少年が聞いた。

「オーストラリアだ。もちろん、お前の知っての通り、俺はWAX^{サテラボ}の者だ。だから、これを持ってるんだ」

「そついやあ、あんた。暁とかと同じエースだったよな・・・？」

「暁よりは劣るけどな。入隊してまだ一年と半年くらいだけどな」

青年はハハハッと笑った。

「それはそうと、この敵の二人は組織のものか？」

「ああ。あと、この二人は今こっちで治療中だ。聞きたいことがあるあるんでな」

「にしても、元気そうでよかったぜ。でも、この姿は電腦獣のものか？」

少年は聞いた。

「ヨイリー博士が作ったPGMだ」

「すげえな」

《ウォーロックちゃんも強くなってるんだろうな？》

ウィザードは腕を回した。

「あ、ヤッベ。そろそろ帰んなきゃ！」

青年は時計を見てあわてて言った。

「ああ、今日は貴重な情報をありがとな」

「また情報が入り次第連絡するからな」

そう言って青年は駆けて行った。

「スバル、また近いうちに会えるかもな」

第54話「裏話1」（後書き）

青年は分かりませんが、少年の正体は分かります？

感想待ってます。

第55話「学園祭2」

〽コダマ中学校〽

終礼の途中、ルナが今後の学園祭の予定について話すために前に出た。

「皆は、学園祭のことは忘れてないでしょうね？」

『忘れるもんか』

クラスの生徒の男子は面倒くさそうに言った。

「ちょっと男子！ そんな気持ちでどうすんのよ！」

『そ〜よ！』

ルナが言つと、女子たちも一斉に声をあげた。しかし、スバルの隣にいたミソラは声をあげず、手を上に突きだして抗議のしぐさを見せただけだった。

「だって、どうせ委員長の作った物語でしょ？」

「何か問題でも？」

ルナは怒り口調で言った。

「だってよ〜、主役はロッキマンⅡスバルだろ？ 小学校の時もそうだったからな」

ギクツ！「べ、別に。私とロックマン様だけが目立つわけじゃないし、それに、ロックマン様とスバル君は全然違うんだから！」

ルナは焦って言った。

（同一人物だよ………）

スバルは心の中で思った。

「連絡があるなら早く言ってくれよ委員長」

「早く帰りたい」

クラス中で文句が垂れた。

「分かってるわよ！　じゃあまず、学園祭の事ね。校長の話では、“学園祭で一番素晴らしい出し物をしたクラスが優勝で、景品がでるよ”って」

「景品？　どうせしょうもない物だろ？　ノートとか作り物のメダルとか……」

「チツチツチ」

ルナが舌を鳴らして言った。

「今回はそんなものじゃないわよ」

ルナの言葉に皆がざわめいた。

「なんと、優勝クラスの一人ひとりに賞金が出るのよ！」

『ええええええ！？』

なんと、賞金がでるらしいのだ。しかも、一人ひとりに。クラス中が歓声を上げた。他のクラスからも聞こえてきた。

「そして、今回私たちのやる劇が……」

クラス中が息をのんだ。

「じゃん！ 題して、“青き英雄と紅蓮の猛牛”よ！」

「……………え？」

スバルは「青き英雄」の言葉ですぐ分かった。（僕だあああ！？）

「な〜んだ。やっぱりスバルが主役か」

「な、なによ！ なんか文句でもあるの！？」

ルナがほっぺをふくらました。

「でもよ、“紅蓮の猛牛”ってさ……………オレ？」

ゴン太がルナに聞くと、ルナが頷いた。

「よっしゃあ！ 目いっぱい暴れてやろうぜ、オックス！」

《ブロロロ。でもよ、ゴン太………体育館だぜ？》

「あ………」

ゴン太は急に気落ちした。

そこにルナが付け足した。

「大丈夫！ 今回の舞台は、^{ステージ}私の家の財産でこのコダマタウンを使うのよ！」

『マジでええええ！？ そんな事できるのか？』

ルナは自信満々に頷いた。

「私ん家を何だと思ってるの？ 超セレブよ！ そんな事簡単だし、親にはもう許可を得ているわ！」

ルナが言つと、皆が意見を出した。

「スゲー！」

「それだとエキストラとか必要じゃね？」

「このクラスだけじゃスタッフとかキャストとか足りないよ」

「コダマタウン燃えちゃうかもよ？ 紅蓮の炎で」

「それをロックマンが止めるんじゃないの？」

いろいろな意見や劇の内容予想が垂れた。

「はい、そこまで！」

ルナが教卓をバンツと叩いた。

「心配しなくても、親がちゃんと一流のスタッフを雇ってくれるわ」

「じゃあさ、やっぱりヒロインはミソラちゃんだよな！」

男子の一人が言ったとたん、ルナが凍りついた。

「ミソラちゃんってドラマにも出てるしね」

「演技力抜群！」

クラス中が賛成だった。

しかし、ミソラがそれを止めに入った。

「ちょっと皆、聞いて」

ミソラが立ち上がって言った。

「どうしたの？ ミソラちゃん」

隣にいたスバルが聞いた。

「今、風邪ひいててね。それで最近それをこじらせちゃって……
・ヒロインは無理かな……って？」

ミソラの発表にクラスが硬直した。

そんな中、ルナが「ヒロインは私で決まりね!」と言った。

第55話「学園祭2」（後書き）

ルナ、ヒロイン決定か？

感想待ってます。

第56話「裏話2」

「コダマタウン・ウェーブロード」

そこには大量のウイルスが沸いていた。そこに、一人の電波人間がいた。

「チッ！ 雑魚がウジ虫のようにわきやがって・・・！」

電波人間の名はジャック・コーヴァス。かつてメテオGを地球に衝突させようとたくらむ組織と共にロックマンと戦った人だ。

今はクインティアと同じWAXAで特別調査隊長として世界を飛び回っている。最近では電脳獣の調査にあたっており、連絡がとれずにいた。しかし最近では、突如BAの情報を持ってWAXAに帰還したとのことだという。

「こいつらの発生源は何処だ？」

ジャックはウイルスの出現してくる電波を探した。

「あつた！ あそこか！」

ジャックはビッグウェーブの看板へ向かい、電脳へウェーブインした。

電脳の内部には電脳獣の残したと思われる残留電波が散らばっていた。

「成程、こいつ目当てでウイルスたちが次々と集まってくるわけか」

《キシャアアア!》

ウイルスたちはジャックを発見すると、電波は俺たちのもんだと言わんばかりに襲ってきた。

「電波を食って強くなったからって……調子に乗んじゃねえ!」

ジャックはウイルスに向かってグレイヴクローを大量に飛ばした。

ウイルスには避ける奴もいれば、反応が遅れて直撃するやつもいた。そいつらは残留電波を既に食っている奴と食っていない奴の違いで変わっていた。

「グレイヴクローだけじゃ足りんな」

《ジャック、ダイブだ! あれならかなり減るぞ》

「おう!」

ジャックは上空に飛び、ウイルスたちに向かって鋭い翼を広げ、斜めにダイブした。

《シャアアア……!》

《メットオオオオ!》

ウイルスの大半は翼にあたり、消滅^{デリート}された。

「残り三分の一くらいかな……」

《後はアレで燃やしちまおうぜ》

「いくぜ！ ペインヘルフレイム！」

ジャックの両手には紫色の炎が燃えたぎり、ジャックは次々と炎をウイルスに投げつけた。

ジャックの技が終わるころにはウイルスはすべてなくなっていた。

「おつわり〜！ さあ〜て、後はWAXAにこの電波を持ち帰るだけだな」

《気をつけるよ。なんたつて、電脳獣のやつだからな》

「分かってら」

ジャックは慎重に電波をWAXA特製のケースに入れた。

《ジャック、帰りにスバルたちに出会って帰るか？」

「……………いや、やめておくよ」

《なんでだよ》

「今会ってもさ、学校の皆にいろいろ聞かれるのめんどいし、それに……………」

《それに？》

ジャックは少し間を開けた。

「それにさ、スバルも忙しそうじゃん。B Aと戦ってて」

ジャックは言った。

《お前もそういう事気にするようになったのな》

コーヴァスはププッと笑った。

「わ、悪いかよ！」

《別に》

「こんにゃろー！」

ジャックは拳をプルプルと震わせた。

《んなことより、早くそれを持って帰ろっぜ》

「急に話題をおゝ・・・・・・・・まあ、いいか・・・・・・・・！」

ジャックは電腦からウェーブアウトした。

第56話「裏話2」（後書き）

感想お待ちしております！

第57話「学園祭3」

「はあゝ．．．．」

スバルは学校の帰り道、大きなため息をついた。

《一体どうしたんだよ》

ロックが聞いた。そういえばいつのまにかハンターに戻ってたっけ。

「どうしたじゃないよ．．．．。また小5の時みたいに委員長がヒロイン役だし、台本はメチャクチャだし」

そう言っつてスバルはロックに台本を見せた。

《．．．．．。確かにな。これは．．．ダメだな》

「でしょ？ はあゝ．．．学園祭は来週に控えてるのに．．．」

《でも実戦で戦いには慣れてるだろ？》

「そうだけど．．．さあ．．．。でも問題はそこじゃないんだよ！」

今度はスバルはロックに台本の背表紙を見せた。

「この厚さ！ これ！ 暗記もロクにできない僕が覚えられるわけないでしょ？」

《バトルカードとかは覚えてるくせにか？》

ロックが言った。

「そ、それはまた別の話！ それにさ、委員長ってば今日なんて言
ったと思う？」

《？》

ロックは首を傾けた。

「こういうわけだよ」

――スバルの回想――

「と、言うわけで、学園祭についてはこれでおしまい！ 皆、帰っ
ていいわよ」

ルナが言つと皆はカバンを持ち、次々と席を立った。

「あ、スバル君とゴン太は残ってね」

『えええゝ？ なんでえゝ？』

「なんでも！ さ、私も帰りたいから早く終わらせるわよ」

ルナは教卓の前に二人を呼び出した。

「じゃ、スバル君。先帰ってるよ」

「う、うん」

スバルには嫌な予感しかしていなかった。それには気付かず、ミソラは行ってしまった。

（一体なんだ？ 話って・・・）

「あんたたちを呼び出したにはわけがあるわ」

『（そりゃわけがないと呼び出さねーよ）』

「ちよつとなによ！ そのシケタ面は！ 今から大事な話があるって時に！」

ルナが二人に指差して言った。

「委員長」。早く話してくれよ」

ゴン太が催促すると、ルナは「分かったわよ」といってカバンから分厚い二冊の本らしきものを取り出した。

「はいこれ」

ルナが渡すとスバルたちは冷や汗をかいた。

「こ・・・これって。まさか・・・」

「そうよ？ あんたたちの台本」

『えええ・・・！ ぶ、分厚くないっすか！？』

「主役と悪役なんだから、それくらいあつて当然でしょ？　ざっと150ページくらいかしらね。その時の台詞のシチュエーションも細かく入ってるからどこでどう使うか、どんな口調でどう表現するかも書いてあるわ」

ルナが言い終わった後には二人の周りのは黒いズーンとしたオーラが漂っているだけだった。

「これを来週のリハーサルまでに覚えてきてね」

『（ら、来週だとおおー！？）』

二人は心の中で不満をもらした。もちろん発言したらお説教の始まりだ。

（無理無理無理、絶対無理！）

（こんなの覚えてるひまがあつたら牛丼が何杯食えるんだあ！？）

「じゃ、私はこれで。じゃあね」

委員長が出て行ったあとの教室には暗いオーラを発してる二人だけだった。

.....

「と、言つわけ」

《成程、どうするつもりだ？》

「もう死ぬ気で覚えるしかないよ……悪いけどしばらくの間、僕の邪魔しないでね」

《仕方ねーな。今回だけは我慢してやらー》

ロックはしぶしぶ了承した。

「ん、そう言えばロックはなにしてたの？」

《オレか？ 人探し……っていうか電波体探し》

ロックはハンターから出てきて言った。

「一体誰を？ ゴン太やキザマロ、委員長の家にまで侵入して」

《いあやあ、実はオックスとハーブ以外に俺たち以外のFM星人の周波数を感じたんだ。ちよっくら搜索してたんだ》

「ええ！ それって問題じゃないの？」

《ん？ なんでだ？》

スバルは驚いて聞き返した。

「だってロックたち以外のFM星人って、また悪さするんじゃないの？」

《いや、オレが感じたのは一度会ったことのある周波数だ。お前も会ってるぞ》

ロックが言うとスバルはさらに驚いた。

「そ、それって……リブラとかオヒュカスとかクラウンとかも入ってくるんじゃないの？」

《でもそいつらはもう存在しねはずだぞ。特にオヒュカスとクラウンはな」

「それじゃあ……コーヴァスかヴァルゴ？」

《でもヴァルゴはすでにクインティアとか言う奴とWAXAでシドウと一緒に働いてるって聞いたぞ》

「じゃあコーヴァスってこと？」

《確率は低いが……そういうこともあり得る。ジャックが今行方不明なら説明もつく》

二人は急に考え込んだ。

その沈黙をロックが破り、こう言った。

《ま、気にすんな！ それはそうと、さっきの話に戻るぞ》

「え、学園祭の？」

《ミソラやスズカに聞いてみるよ。役者だったら台本覚える極意とか教えてくれるかもしれねえぞ？》

「あ、そうか！ ロックの割にはいいことじゃないか！」

スバルはロックをこずいた。

第57話「学園祭3」（後書き）

最近更新速度が遅いですが、でも読んでくださるとうれしいです！

感想お待ちしております！

第58話「裏話3」（前書き）

最近まえがき無かったので書きます。

メイポ、おもしろいね。流口クもおもしろいね。ネットゲーにはまるとなかなか抜けられなくて執筆するの忘れてました。ごめんにえ。

第58話「裏話3」

〔WAXA日本支部〕

「あら、ジャックちゃん。おかえり」

「バーさん。コレ拾ったんだが、電脳獣のものらしい」

ジャックはヨイリー博士にデータを渡した。

「これ、どこで拾ったの？」

「コダマタウンのどっか……いちいち覚えてねーや」

ジャックは頭をかいた。

《そのデータの発する電磁波に、ウイルスがたかってたぜ》

コーヴァスが言った。

「ああ、結構苦労したぜ。んじゃ、データの解読よろしくな」

「分かったわ。ありがとう」

「礼なんかいって」

そう言っただけジャックは研究所から出た。

部屋を出ると、扉の隣にクインティアが壁にもたれかかっていた。

「姉ちゃん。どうしたんだ？」

「ジャック。緊急を要する任務の指令が出たわ」

「え？」

ジャックはクインティアの突然の報告で混乱した。

「なんでだよ？ 緊急？ 今帰ってきたばっかだぞ？ まさか今行くわけじゃないよな！？」

《俺はいきてー》

「ちょ、コーヴァス！」

「安心なさい、今すぐじゃないわ」

「ほっ……！」

ジャックは安心した。

《どんな任務だ？》

コーヴァスがジャックを無視してクインティアに聞いた。

「さっきこの病棟で入院している敵の二人に話を聞いたの」

「え？ 意識が戻ったのか？」

ジャックが聞いた。

「ええ。あなたが出ている間にね」

「それで、掴めた情報は？」

《おーおー、喰いついてるねえ》

クインティアは続けた。

「どうやら、敵は電腦獣のグレイガの捕獲に成功しているらしいの」

「え？」

《マジか！？》

二人は目を丸くした。

「でも、敵が嘘をついている場合もあるし・・・」

ジャックが言うと、クインティアは首を振った。

「いいえ、本当よ。ここ最近、以前の電腦獣の破壊したサーバーと最近破壊されたサーバーや場所を比べてみると、最近破壊されたサーバーと場所に電腦獣の残留電波とそれ以外の電波が確認されているの」

「て、事は」

《もう誰かが電腦獣を手なづけちゃったとしか考えられねーな》

「電脳獣は凶暴だから、手なずけるか操るかしないとすぐに襲われてしまうわ。だから一緒に残っていた電波を予測して、B Aのものと分かったの。可能性は約85%よ」

クインティアが言った。

「それで任務の内容は？」

「B Aの基地を突き止め、破壊するのが目的よ。単純だけど、へたをすれば死にかかわる」

「キャハハ！ まず第1段階は基地の場所を特定すること。第2段階は基地への潜入。第3段階は内部からの破壊よ。それと同時に電脳獣の解放と消滅デリートしなきゃいけないの！」

ヴァルゴがいつもの高い声で言った。

「潜入が成功しなければ、失敗も同然。仮に、潜入できたとしても全滅の可能性だってあるわ」

「成功の確率は？」

「5分と5分。たとえば、ロックマンが加勢しても勝率は5〜6%しか変わらないわ」

「くそう……！」

ジャックは拳を強く握った。

「いつ出発なんだ？」

「一週間後、それまでに準備をしておくことね」

そう言っ てクインティアはこの場を去った。

《一週間後か……。腕になるぜ!》

「一週間後、俺たちWAXAに世界の命運がかかっているのかな・ ・ ・?」

ジャックは考え込んだ。

《そう重く考えるな! もしもの時は、ウォーロックやスバルがいるだろ? あいつらの強さはお前もよく知ってるはずだ! それに獣化まで持つてるんだ、心配ねーよ》

コーヴァスはジャックを励ました。

「分かってら! ちょっと心配だっただけさ!」

《うっそだぁ! めっちゃ不安な顔してたくせによぉ》

「う、うるさい! 黙ってろ!」

その後、WAXAの廊下に数分間、口げんかの声が響いていた。

第58話「裏話3」（後書き）

なんかジャックのキャラが崩壊しているような・・・

感想待ってます！

第59話「学園祭4」（前書き）

セフィトロさんの考えてくれた新キャラは次回登場予定なのでし
ばしお待ちを…………。

では、59話お楽しみ下さい。

第59話「学園祭4」

〔コダマ中学校：体育館〕

1 - A組は町で出し物をする予定なので体育館で準備をしていた。

もちろんスバル、ゴン太、ルナ、その他登場する役の人は台詞の練習をしていた。

「ブロロ……！ 貴様がロックマンか！？」

「そ、そうだ！ もう悪さをするのは……えっと……」

スバルは途中で台詞を忘れて台本を開いた。

「ちょっとスバル君！？ たったそれだけの台詞を言えないようじやとても劇に間に合わないわよ！」

「う、ごめんなさい……」

「まったく！ 今日は台本見ながらもいいから、リハまでにはちゃんと覚えてきてよね！」

「わ、分かりました……」

その日スバルは一人だけ台本を見ながら練習をした。

練習が終わり、体育館を出た後、スバルは皆に言われる。

「おいスバル。主人公なんだからもつと頑張れよ」

「いつもロックマンになって敵の前ではカッコイイこと言ってるんだからすぐできるだろ？」

「アドリブでもいいからもつと頑張つてよね」

と、同じ練習をしていた仲間から苦情が来るのだ。これは今日の練習をいれて三回目である。

スバルも帰ってから必死に覚えているのだが、最近ロックとハープの言い合いが激しくて覚えるものも覚えることができないのだ。

そこでスバルは意外と台詞を覚えているゴン太に聞いてみた。

「あのさ、ゴン太」

「ん？　なんだ、スバル？」

「ゴン太って台詞覚えてるじゃん？　だから覚える方法聞こうと思つてさ」

スバルは聞いたが以外な答えが返ってきた。

「ああ、台詞？　実はあの台本さ、分厚いけど半分以上が細かい動作とか行動なんだ。だから台詞は少なくて覚えやすかったんだよ」

「え……………」

「わりーな、スバル。俺悪役だから破壊シーンとか多いせいだよ」

「そ、そんなあゝ……」

スバルの心は折れた。

(どーしよう………)

スバルがどうするか考えたところだった。

三日前にロックに言われた事を思い出したのだ。

「そっか。オクダマスタジオに行っているんな役者さんにアドバイ
スや特訓してもらおう！」

スバルは家に帰って早速マモロウさんに電話した。

「やあスバル君、久しぶりだね」

「お久しぶりです。マモロウさん。突然なんですけど、この土日に
オクダマスタジオで僕に特訓させてくれませんか？」

スバルは聞くと浦方は驚いた顔をした。

「特訓で。まさか戦ったりするんじゃないよね!？」

「ま、まさか。ただ、今度僕のクラスで劇をする予定なんですけど、
覚える台詞が多すぎて……」

「なんだ、そんなことか。お安い御用さ! 君には大恩があるからね。
いいよ、じゃあ明日10時にオクダマスタジオで待ってるよ」

「分かりました。ありがとうございます！」

そう言ってスバルは電話を切った。

「ふう〜……これでなんとかなりそうだぞ。ひとまず安心だ」

スバルは椅子にもたれかかった。

スバルが一息ついていたら時に部屋の扉が開き、ミソラが入ってきた。

「あ、おかえりミソラちゃん」

「ただいま〜。あ、スバル君に伝言」

「一体何？」

スバルは椅子ごとミソラの方を向いた。

「ルナちゃんからで、“この土日にスバル君の特訓をするから12時に学校に来てね”だって」

「え……………（いきなり問題発生いい！）」

スバルは茫然となり頭の中でどっちに行くか迷っていた。

「じゃね。私は新曲作るから、絶対の部屋に入らないでね」

そう言ってミソラは部屋を出て行った。

「どーしよ……そりゃ絶対浦方さんのところに行っているんな役者さんに鍛えてもらう方が効果的だし……かと言って委員長を無視したら後が怖いし……もうきっぱり委員長に断ろう」

スバルは覚悟を決めて委員長に断りのメールを送った。

メールの文字を打つ手は後の恐怖で震えていた。

「こ、これでいいんだ……月曜日の練習で成果を見せれば認めてくれるはずだ！」

スバルはそのあとともいろいろと考え続けた。

第59話「学園祭4」（後書き）

ん……………次回は裏話飛ばしていいのかな……………？

感想待っています！

第60話「特訓 第一日目・その1」(前書き)

お久しぶりでえ〜っす！

やっと今後のお話がまとまりました！後は更新できる時間があるかどうかです！

それでは、復帰第一話目をお楽しみください。

第60話「特訓 第一日目・その1」

「オクダマスタジオ」

日曜日、スバルは委員長の特訓を断つてここ、オクダマスタジオまで来ていた。

「ほ……………本当にこれでよかったんだよね？」

《どっちが一番上達するかを考えたら当然の結果だろ》

スバルはまだこっちに来たことに不安を抱いていた。

「そ、そつだよね！　こっちで特訓して、明後日委員長に認めてもらえればいいんだから！」

そつ自分に言い聞かせ、館内に入った。

「やあ、スバル君。いらっしやい」

館内に入ってすぐスバルはマモロウに会った。

「こ、こんにちわ。今日はよろしくおねがいします」

スバルはマモロウに頭を下げた。

「それで、どうやって特訓するんですか？」

「こっちだよ。ついて来な」

マモロウはスバルにそう言って、スタジオの奥へと連れて行った。

〈特設ステージ〉

「あれ？　ここって前にミソラちゃんのライブがあった場所……でつかいステージがなくなってる」

「ああ、黒い戦士が襲ってきた後とところどころ故障が見つかってね。廃棄したんだよ」

「黒い戦士……… 暁さんのことだ！」

スバルは暁が初めて暴走した日の事を思い出した。

「あの日を境に、ライブの度にノイズが発生してね。廃棄する前日にWAXAに見てもらったら、大量のウイルスが中に潜んでいたんだ」

「そうだったんですか」

《そんなのオレたちを呼んでくれりゃ、片付けられたのによお》

ロツクはハンターの中で腕を回した。

「スバル君たちが来てくれたとしても、あれだけ汚染されていたら無理だよ」

「ほらね」

スバルはロックに言った。

「それに、新しいステージがもう少しで届くんだ。心配ないよ」

「そうですか……………で、特訓って？」

スバルが聞くとマモロウは「忘れてたっ！」と言うようにスバルの方を振り返った。

「ごめんごめん。今から、君の先生を呼ぶよ」

「え……………今から??」

「そう！でも彼のポリシーはどんな仕事でも時間内にこなすことさ」

マモロウはそう言って彼に電話をした。

「あ、セイヤ。昨日言ってた例の子なんだけど」

「んん？ ああ、例の特訓する子？」

「そうそう。今から来てくれよ」

マモロウが頼むとセイヤは答えた。

「ああ、それなら今向かって……………ていつか今館内」

「あ、そう。じゃ、特設ステージで待ってるよ」

「あいよ」

そう言つてマモロウは電話を切った。

「もうすぐ来るよ」

「えっ……………」

スバルが振り返ると、そこには虹色でキラキラした少し長い髪に派手なジャケットとＴシャツ、ジーパンを着たスバルと同じ年くらいの少年が立っていた。

「へえ。まさか、星川スバルが例の子だったなんてねえ……………」

セイヤはニツと笑った。

第60話「特訓 第二日目・その1」(後書き)

セイヤ登場！セフィトロさん、ありがとうございます！

感想待ってます！

第61話「特訓 第一日目・その2」(前書き)

ぼちぼち物語の方を大きく動かしていこうと思っていますので、
学園祭当日を楽しみにしていて下さいな(*^ー^*)b

第61話「特訓 第一日目・その2」

「彼が、スバル君の先生だよ」

マモロウがセイヤを指差した。

「え？ あの虹色髪の方？」

《変なヤローだぜ》

「ああ見えて、結構優秀なんだよ」

マモロウが言うと、スバルは「ふん」と鼻を鳴らした。

セイヤはしばらくスバルを見つめた後、ゆっくりと歩み寄ってきた。

「やあ、星河スバル」

「こ、こんにちわ」

スバルはぎこちない挨拶をした。

「近くで見るとテレビとはまた違う感覚だね」

「そうかな？」

スバルは照れながら頭をかいた。

「で、要件を詳しく聞こうか？」

セイヤは少し上から目線で言った。

「あの、今度僕の学校で学園祭があるんだけど、その時やる劇の覚える台詞が多すぎて、覚える特訓をしようか……」

スバルはカバンから分厚い台本を取り出し、セイヤに渡した。

セイヤは受け取った台本をペラペラとめくりながら、たまにスバルの方を見た。

分厚い台本を読み終え、スバルに返した後、セイヤは言った。

「結構大変な仕事を任せちゃったね」

「へ？」

スバルは変な声を出し、セイヤに問い詰めた。

「大変な仕事って？」

「もちろん、君の特訓の事さ。この二日間でこの台本のすべてを隙間なく君の脳に叩きこむつもりさ」

セイヤはスバルを指差して言った。

「マモロウ……この二日間、この子借りていいよな？」

「それが仕事を受けてくれるための条件だったろ？」

マモロウは前日のセイヤとの契約内容を思い出していた。

「スバルの来る前日」

「やだね」

セイヤは乱暴に言い放った。

「頼む、この依頼受けてくれ！」

マモロウはハンターの映像モニターごしに頭を下げた。

「なんで僕がそんな奴の先生なんかにならなきゃいけないのさ？」

「そう言わずにさ、頼むよ」

セイヤはモニターの中でため息をついた。

「僕にもいろいろ都合があるんだよ。仕事の予定もあるんだし」

マモロウはお手上げ状態で他に頼もうかと思ったが、ミソラは喉がやられていて、スズカはドラマ撮影で海外に、他の役者もスズカのドラマ撮影のために一緒について行ったり、土日休みに出かける予定があるなどと、他に頼める人がセイヤしかいなかったのだ。

マモロウは当日で明かそうと思っていた事をセイヤに言うことに

した。

「じゃ、僕はこれで」

セイヤが電話を切ろうとした時、マモロウが口を開いた。

「星河スバルだよ」

「……………！」

セイヤがピタリと止まった。

「スバル君が、君の生徒だ」

「へえ……………星河……………スバル……………本当？」

マモロウの予想通りにセイヤは興味を示し、セイヤはニヤツと笑みを浮かべた。

「その依頼……………受けてあげてもいいよ」

「本当か？」

「ただし……………」

セイヤが人差し指を上げた。

「条件が一つ」

「条件？」

マモロウが首をかしげた。

「特訓の際、星河スバルは借りて行くよ。煮るなり焼くなり好きに
していいかい？」

セイヤの条件にマモロウは少し考えたが、

「よし、いいだろう。それがスバル君の為になるならね」

そう言った後、セイヤは無言で電話を切った。

「じゃあ、この二日間、食事と風呂の時以外は僕の楽屋に入ってこ
ないでね」

「え……………ということとは？」

スバルが問うと、セイヤはニツと笑って言った。

「なあに、僕流の特訓さ」

そう言ってセイヤはスバルの腕をひっつかみ、楽屋へと引っ張っ
ていった。

「コダマタウン：マンション」

ルナは、自分の部屋で怒りを震わせていた。

原因は、スバルのメールだった。

「覚えてらっしゃい、スバル君！！ この私の特訓を断った事を後悔しなさいよ！！」

そう言っつて、怒りに満ち溢れたルナはスバルから送られてきたメールを削除した。

第61話「特訓 第一日目・その2」(後書き)

特訓内容どうしよっかな♪

感想待ってます！

第62話「特訓 第一日目・その3」(前書き)

中間テストやだよぉ

だれか代わって下さい！

というわけで、テスト期間の中執筆しております。少し長いかもしれませんが、読んでください。

第62話「特訓 第一日目・その3」

「セイヤの楽屋」

「なんか……………落ち着かないね……………」

《こういうの苦手だぜ……………落ちつかねえ》

二人はセイヤが戻ってくるまで椅子に座って待っているのだが、周りの装飾や掛けてある衣装などが派手すぎてなかなか落ち着かず、ずっとソワソワしていた。

たまにロックが落ちつけなくなり、ハンター内で暴れたすのをスバルは必死になだめることも多々あった。

セイヤは一時間後くらいに部屋に戻ってきた。

「待たせたね……………」

「いや、別に……………」

「さて、まずは君の記憶力について試すよ」

「え？ きおくりよく……………？」

そう言ってセイヤはさっき準備していたと思われる数枚のパネルを取り出した。

「そう。記憶力。まず台詞を覚えることが最優先だからね。感情とかな入れるのはそのあとさ」

「へえ」

「まず、僕が絵や文章の書いてあるパネルを五秒間君に見せるから、そのあとに何が書いてあるか思い出してこの紙に書き出してね」

セイヤはスバルに紙とペンを渡した。

「書き出す……って？ 絵とかはどうやって？」

「単に書いてあった物を箇条書きしてもいいし、大雑把に見た絵を描いてもいいよ」

「わ………分かった」

スバルは少し緊張した感じで返答した。

「それじゃ、問題は5問ある。じゃ、いくよ」

「え、あつ！ ちょっと待ってえ！」

スバルは急いでペンを用意し、書く態勢をとった。

「第一問」

そうやってセイヤは文章の書いてあるパネルを見せた。

『河童の川流れ 海老で鯛を釣る 夏の雨は馬の背を分ける』

パネルには3つのことわざが書かれていた。

スバルは五秒間それをじっくり見てパネルが伏せられると忘れないうちにサッと紙に書き出した。

「かけたら見せてね」

セイヤはそう言って2枚目のパネルを用意した。

「か、書けたよ」

スバルは紙をセイヤに見せた。セイヤは紙に書かれたことわざを漢字の間違いまでじっくり見た。

「正解。これは簡単だったね」

セイヤの発言にスバルはホッとした。

「じゃ、第二問」

セイヤは再びパネルを見せた。今度は絵だ。

このオクダマスタジオに出勤するスタッフの人々やウェーブロードが描かれていた。

スバルは箇条書きではなく、大雑把に建物やバス停、テニスコートなどを描き複数の棒人間を描いたものとなった。

スバルは自分でも自分の画力の無さを悔んだ。

セイヤはなんとか「OK」をだしてくれたが、今度からは箇条書きのほうがいいと言われた。

「第三問」

『祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす 』

スバルは目を丸くした。読めはするものの、漢字まで書くことができないのだ。

五秒経ってパネルが伏せられるとセイヤは「平仮名でもいいよ、別に」と言った。

スバルは何度も思い出しながらなんとか最後まで書いた。

『ぎおんしょうじゃの鐘の音 しょぎょうむじょうの響きあり しゃらしょうじゅの花の色 りょうしゃひつすいのりをあらわす 』

「あつ、惜しいな。理^{ことわり}が“り”になってる」

セイヤはププッと笑った。

「ええ？ それってことわりって読むの？」

「そうそう。じゃ、第四問いくよ」

「ええ！ 待って！」

「第四問」

『寿限無、寿限無、五劫の擦り切れ、海砂利水魚の水行末、雲来末、

風来未、食う寝るところに住むところ、藪ら小路のぶら小路』

いや、無理。スバルはそう思った。寿限無とか全部言ったことも覚えたことも見たこともない。

五秒経って書き出したが、ほとんど白紙で最初の“五劫の擦り切れ”までしか書かれていない。

「これは難しすぎたかな？　じゃ第五問」

「（じゃ、って何？）」

スバルはまた難しいのがくると覚悟していた。

「第五問」

今度は絵。ロツポンドーヒルズでにぎわう大勢の人々。大量に行き交う車。観光客を案内するウィザード。長いエレベーター。

これなら箇条書きでいける！とスバルは思った。

五秒後、スバルはサラサラと書き出した。

セイヤは書き出されたものを見てすぐ「OK」と言った。

「OK！　第一段階はクリアだ」

「え？　第一段階？」

「そう。次からは本格的に台詞を覚えるための特訓をするよ」

セイヤはまたニツと笑った。

第62話「特訓 第一日目・その3」(後書き)

第3問と4問がむずかしすぎたかな？ 寿限無とか出そうか迷った
からなw

感想待ってます。

第62・5話「ビフォール」(前書き)

今回はビフォールの登場話につき(↑ネタバレじゃんっ!w)超短いです

第62・5話「ビフォル」

「はい、違う。もう一回」

セイヤはスバルに厳しい視線でそう言った。

「ちょ……ちょっとタンマツ！」

スバルはセイヤにストップの合図を出した。

「こんな序盤の台詞で止まっていたらとても二日では無理だよ」

「そ………そんなぁ」

「さっ、そんな弱音なんかはいてないで、続きを始めるよ。もう一回20ページの台詞から」

スバルは渋々とページを開き、暗記を始めた。

その後、スバルは台本を見ずにその台詞を言うというのを繰り返しながら特訓をしていた。

ちなみに前話からいないロックは暇すぎてしびれを切らし、出て行ってしまった。

「~~~~~~~~。~~~~~~~~……………」

「また途切れた……。これじゃあ残りのページ数が間に合わないな……………」

「やっぱり二日じゃ無理なんだ……………」

スバルはがつくりと肩を落とした。

「仕方ない……………飯にするか。よく考えたらもう2時だ」

セイヤは時計を見て微笑した。

「スタジオの2階に食堂があるからそこにいこう。ほら、そんなへたばってないでさっさと行くよ」

セイヤはスバルの腕をつかみ、引っ張って行った。

くスタジオ周辺のウェーブロードく

《まったく……………暇すぎるったらありやしねえ……………》

ロックは時々出現するウイルスを消滅させながらほつつき歩いて
いた。
デリート

《そついやぁ最近ウイルスの量が増えてる気がするな……………気のせ

いか？》

《いや、気のせいではない……………》

《！》

ロックは背後からの声にとっさに反応し、振り向いた。

そこには蒼いボディに鋭い目つき、背中には虹の翼がはえた“ウイザード”がいた。

《誰だ、てめえ》

《私はビフォール……………あなたと同じです……………》

《！？》

ロックは首を意味深げに首をかしげた。

《俺と……………同じ？》

《フッフ……………》

ビフォールは微笑した。

第62・5話「ビフォー」(後書き)

ね？ 短かったでそ？ ちゃんとタイトルにも「62・5話」って書いてあるでそ？

感想待ってます。

第63話「ウォーロックとピフォール」(前書き)

ちわゝ(〇、ゝ)ノ

最近亀更新になってきてる作者ですが、ちゃんとストーリーとか考えてますからねっ！

第63話「ウォーロックとビフォール」

《俺と同じってどういうことだよ!?!》

ロックは意味のわからない発言でイライラしていた。

《そうです。そう言ってるじゃないですか……………》

《だから!　なにが同じなんだよっ!》

ロックの怒りはさらに増した。

《同じ電波体としてなにか思い当たることはないんですか?》

《ない!　だからさっさと言いやがれ!》

《はあ……………さっきからその言葉使い……………美しくありませんね……………》

ビフォールはため息をついた。

そのため息が原因でロックの怒りはMAXに到達した。

《だああああ!　もついい!　おめーが誰だか知らねーが、そこまで俺を怒らせたいんなら勝負でやってみろ!》

《なんか内容がかみ合っていないませんが……………まあいいでしょう……………
…あなたの实力を見るにはいい機会ですからね……………》

ビフォールはさつきとはまったく違う雰囲気になった。

爪をたて、虹の羽根は一回り大きくなった。

《私が何者なのか……それは勝負の後でお教えしましょう……ただし……“あなたが勝てば”の話ですがね》

《おもしれえじゃねえか！　だがな、この俺様に勝てるんでも思っのか？》

《フフフ……では、いきますよ！》

ビフォールは虹の翼をはばたかせ、ロックと距離をつめた。

《虹切り裂き（レインボーカット）……！》

ビフォールは爪に虹のオーラをまとわせ、ロックに多数の暫撃をあびせた。

《ぐっ！　なんてスピード……！　こいつは一筋縄じゃいかねえな！》

ロックは飛んでくる暫撃をかわし、ビフォールの背後へと回りこんだ。

《ビーストスイングッ！》

ロックはビフォールの背中に渾身の一撃を喰らわせた。

《へっ！　どーだ見たか、これが俺の……》

《なにがです……？》

《！！》

ロツクは頭上から聞こえた声に驚きを隠せなかった。

ロツクの腕には確かな感覚が残っていた。

彼の攻撃は完全にビフォルに直撃したはず……なのに。

《あなたのスピードはこの程度のもののですか？ 興ざめですね》

《んだと！ 言つとくが、俺の力はまだまだこんなもんじゃねえ！》

ロツクはビフォル目がけて上へ跳んだ。

《ビーストブレス！》

今度は口から貫通性能のある電撃を発射した。

《やはりこんなものですか………》

ビフォルは電撃を体を少し反らして簡単に避けた。

その後、背中に放出してある翼をジェット噴射のように利用し、鋭い爪でロツクを切り裂いた。

《がつ………！》

《虹暗殺……………！》

ロックは傷を押さえながらその場で膝をついた（電波体なので膝はないが）。

（なんてヤローだ……………まったく動きが見えなかった…）

《フツ……………誰も……………私の美しさの前では勝つことはできない……………あなたもそうです》

《くっ……………！》

ロックも今回ばかりは負けを認めた。

《負けは認める……………だが、お前が何者なのかを教えろ……………！》

《フン、まあいいでしょう。お教えしましょう……………》

ビフォールは少し間をおいた。

《私はあなたと同じ異星人です……………それも、FM星のね……………》

《！！　なんだと！？》

ロックは驚いて目を見開いた。

《FM星にいたのか……………！？　いつここへ来た！》

《さあ……………少なくとも、あなたより以前にここへ来ている……………》

《そんな……確か、ここへ初めてきたのが“アンドロメダの鍵”を追ってここへきた奴ら、オックス・キグナス・リブラ・キャンサー・オヒュカス・クラウン・ジェミニだけだったはずだ》

《私はそれ以前にここへきている……母星に連絡が届いていなかったのでしょうね……》

《そうだったのか……》

ロツクは初めて知った事実に驚いた。

《さて、そろそろ私も戻るとするか。久々に体を動かして疲れた》

ビフォールは翼をはばたかせ、宙に浮いた。

《あなたもこないんですか？》

《バカヤロウ！ お前とは帰る場所が違うんだよ》

ロツクはすつと立ち上がった。

《あら、あなたも同じですよ？ 星河スバルの所でしょう？ ならスタジオですよね》

《え……もしかして、お前のオペレーターって……》

《美崎セイヤですよ。今星河スバルの特訓中です》

「はい、違う。もう一回！」

「~~~~~!~~~~~」

「ええええええ！？」

455

第63話「ウォーロックとピフォール」(後書き)

久々に執筆すると疲れますね W W

感想待ってます！

第64話「学園祭前日or殴りこみ前日」(前書き)

今回からラストに向かって動き出します！

では、どつぞっ！(*^ー^。)

第64話「学園祭前日 or 殴りこみ前日」

「コダマタウン」

「で、なんで君までついてくるわけ？」

スバルは家に帰る途中でセイヤに聞いた。

「もちろん君の練習成果を見るためさ。僕の家からじゃ遠いから今日はこの町で一泊するつもりだよ」

「……………僕ん家に泊まるなんて言い出さないでよ？」

スバルはセイヤを睨みつけた。

「そんなわけないだろう。ちゃんと宿に行くさ。じゃ、僕はこの辺で。明日を楽しみにしてるよ」

セイヤは人ごみの中に消えていった。

《んで、委員長のやつにはどうするつもりだ？》

「ちゃんと二日間寝る間も惜しんで特訓したんだ。委員長も許してくれ……………」

「ス……………バ……………ル……………く……………ん……………？？」

「……………」

スバルは背後から猛烈な殺気を感じ取った。

もちろん後ろにいたのはルナである。

「私のお誘いを断っておきながら、今まで何処にいったのお〜？」

「え……そ、それはあ……」

ルナの顔は笑っているが明らかに怒りで満ち溢れていた。

すこしでも刺激すると爆発するくらいまでルナの怒りは溜まっていたのだ。

「さつさと答えないと……どうなるかわかってるわよね？」

ルナは拳を震わせた。

「オ……オクダマスタジオだよっ！　そこで役者さんに特訓してもらってたんだよ！」

「特訓？　なら私でもよかったんじゃないのぉ？」

（ダメだ……！　このままじゃ殺^やられちゃうっ！）

スバルはなんとかルナの機嫌をなおそうと必死で考えた。

「ま、いいわ」

「へ？」

ルナの思いもよらぬ言葉にスバルの声は裏返った。

「いって……?」

「だから、もういって言ってるの」

ルナはプイと後ろを向いた。

「でも、特訓して来たなら台詞、ちゃんと覚えてきてるんでしょ
うね?」

ルナはスバルの目を睨んだ。

「そ、そりゃあ覚えてるさ!」

「フン、じゃあ明日、楽しみにしてるわね」

「まかせといてよ!」

「あ、リハを早朝にやる予定だから、7時に学校に集合よ」

「オッケー!」

「じゃ、また明日ね」

委員長はせつせと家に帰って行った。

「さっ! 明日早いし、帰って寝るか」

スバルもせつせと家へと帰って行った。

「WAXA本部」

ここは広い太平洋にポツリと浮かぶ小さな島。けっして大きいとはいえないが充実した設備が整っている。

今、この本部では明朝から決行されるBA本部殴りこみへの最終調整を行っていた。

世界中の支部からWAXAの隊員が集まっている。

「みんな、いいか！ 明日の決戦で人類の未来が決まるやもしれん！ 我々が勝つか、負けるかで人類の存亡がかかっているのだ！」

WAXA本部の司令官こと、しんごうあゆむ進藤渉は全世界からあつまったWAXAの隊員たちを集め、最後の作戦会議を開いていた。

「BAの本部はオーストラリア北部の山岳にある。その山岳一帯が本部といっても過言ではないほど巨大だ」

進藤の発表に隊員たちはざわめいた。

「本当に俺たちでつぶせるのか？」

日本支部から来ていたシドウが進藤に尋ねた。

「心配いらん。そっちの支部にいる二人の情報だと警備の薄い場所が数か所あるようだ。いくらBAでもこんなに広い基地のすべては

管理しきれんのだろう」

《なら、その一点突破に限るな》

一人のウィザードが言った。

そのウィザードはアシッドと同じく人工的に作られたもので、アシッドと姿は酷似^{フォルム}しているものの、体は水色で黒いラインが走っており、電波体特有の体をつなぐ電磁波のようなものは白い風のようなものだった。

《そうですね。良い考えです。ウィンド。なら、主戦力を先頭と中央に固めてはどうでしょうか？》

進藤は少し考え、アシッドとウィンドの考えに賛成した。

「おっし！　なら俺が先陣切ってやるっ！」

青い髪の青年が手のひらに拳を当てた。

「あんまり調子に乗んなよ。風丸はそうやってすぐフラフラで帰ってくんだからよお」

「うるせえシドウ！　おめえは黙ってる！」

風丸と呼ばれた青年はシドウに怒鳴った。

「え……っと。話進めていいのかね？」

進藤は喧嘩を始めた二人に聞いたが、話が聞こえておらず、返答

なしに進藤は会議を続けた。

「皆の配列は後に各小隊の隊長に連絡しておくが、他に質問はないかね？」

進藤は聞いたが、だれも質問はなく、不満なしという感じだった。

「明日、人類の未来が決まる戦いだ！ 全員、気合いを入れていけええ！！！」

『おおおおおおおおっ！』

全員が拳を突き上げ、雄たけびを上げた。

「シドウっ！ 明日はどっちがMVPの座をとるか勝負だっ！」

「だからなんでそーなるんだっ！」

二人の喧嘩は会議が終わっても続いていたという……。

第64話「学園祭前日or殴りこみ前日」(後書き)

長いと書く方のしんどいですけど、読む方も大変ですよねw

感想待ってます！

第65話「突入」(前書き)

皆さんのおかげで総アクセス数が300,000アクセスを超えました！

これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします！

第65話「突入」

「B E アジト」

「フム……どうしたことが……」

ハントが監視モニターを見ながら首をかしげた。

「妙だな……」

「妙ですね」

ハントの隣にいたアランが言った。ちなみにアランは研究員というだけでなく監視長という役割も持っている。

「第7から第11の監視カメラが同時に映らなくなるとはな」

「これはなにか起こりそうな事態ですね」

「隊員を何人が送り出せ！ 付近にいる警備にも事情を伝えろ」

「了解しました」

ハントはそう言い放つとモニター室から出て行った。

長い廊下をハントの足音だけがこだまする。腰にさげた刀から時々金属音が聞こえ、ハントは暗い廊下を歩き、指令室へと向かった。

「あ、ハント様。ちょうどいいところに」

「どうした」

ハントは鋭い右目で隊員の方を見た。

「日本にでていた情報部員の持ち帰った情報です」

隊員は一枚の紙を渡した。

「どうやら今日決行のようです」

「ほう………ここに来るのか………どうせ無駄だがな」

ハントは微笑してデータを返した。

そのあとハントは隊員たちに命令を下した。

「第7から第11ゲートの警備をなくせ！ 監視カメラも修理はなしだ！ アランにも伝えておけ！」

「りよ、了解しました！」

指令室にいた隊員たちはあわただしく動き出し、アランにもその報告はすぐ伝わった。

「……………WAXA……………奴らが来るのか……………」

《……………》

ソロは暗い部屋で報告を聞き、ベッドから立ち上がった。

「ここを抜けるいいチャンスだ……………いくぞ、ラプラス」

ソロは笑みをうかべ、部屋を後にした。

「WAXA第一小隊ベースキャンプ」
「で、なんで俺とお前が一緒の隊なんだ？」

風丸が気を落としてシドウに聞いた。

「エースは普通先陣だろ？ だから一番最初に特攻をしかける第一小隊に入れられたわけ」

「先陣つてのはいいが……なんでお前と一緒にやんなきゃなんねーんだ！」

《おちつけ風丸》

ウインドが割って入った。

「もう面倒はごめんだよ。どうしてもってなら俺は第二小队の方に移るぜ」

シドウが言った。

「おーそつしろ」

風丸はニタツと笑った。

《それはダメですよ、シドウ》

「なんでだ？」

《いくらエースといえど、総督の許可なしで隊を動かすなど許されませんよ。エースっていったって立場が少し上なだけですからね》

「ちえ………しゃーねーな。じゃ、俺はお前の後ろにいくからよ」

「俺の邪魔しねーなら納得してやる」

風丸は相変わらず上から目線だ。

「邪魔なんか誰がするかよ、んな面倒なこと」

二人が言い合っているとアシッドが全員に声をかけた。

《突入予定時刻10分前です。本小隊は只今よりアジトの第8ゲートに向かいます》

「よし、行くか！」

「絶対邪魔すんなよ！」

「はいはい」

シドウはポケットからうまい棒を一本取り出した。

〽BE第8ゲート付近〽

「暁さん。突入準備が整いました」

「じゃ、いくか、アシッド」

《了解》

「トランスコード001！ アシッド・エース！」

シドウはアシッド・エースへと変身した。

「俺たちもだ！ トランスコード006！ ウィンド・ボレアス！」

風丸も電波変換し、準備は整った。

「じゃ、俺が先陣きるからお前後からこいよ？」

「分かってるって」

シドウは隊の後ろに下がった。

「じゃ、行くぞ！」

風丸はゲートの前に立った。

《意外とぶ厚そうなゲートですね》

「いっちょぶっ放すか」

風丸は肩についている青い円を光らせた。

「いくぜっ！ ガスト 突風キャノン！」

風丸が言つと円から巨大な竜巻をまとった極太のレーザーが発射

された。

ゲートは一瞬にして吹き飛ばされ、当たりに砂埃がたった。

「俺のオメガレーザーの強化版か……なかなかだな」

《でも、私たちも変わっていますかね》

シドウとアシッドが言った。

「さーてと。BEつぶすか……」

「突入だあああ！」

シドウが叫ぶと第一小隊と背後の岩陰に隠れていた第二小隊から第八小隊が飛びだし、アジトの闇の中へと消えていった。

（指令室）

「来たか……アラン、トレース、グレン……迎え討て」

『了解……！』

第65話「突入」(後書き)

新キャラとーじょー！

トレース・グレンの情報は後にデータベースに載せておきます。

感想待ってます！

第66話「氷・闇・紅蓮」(前書き)

なんとか最終更新日から一カ月空けずに更新できました！ヤツ
タ ↓ +。 : . へ (喜 ‘)ノ。 +。 : . | アアツ (↑大
げさw)

内容……は薄いんですが、まあ次回につながるお話なんで、楽しんで読んでもくれるとうれしいです！

第66話「氷・闇・紅蓮」

「BE基地 通路の分かれ道」

「んじゃ、俺こつち行くからお前真ん中いけよ」

「勝手に決めるんじゃない！ 3つも分かれてるのに相談なしにいくかつーの！」

風丸の意見にシドウが反発した。

風丸・シドウ率いる小隊は、ある十字路で立ち止まっていた。なぜならこの小隊にはWAXAの最高戦力である人が二人しかいないからだ。三つある通路のうち一つだけ戦力が不足してしまうのが難点だった。

《では、二つの通路はエースの二人だけに任せて、残りの隊員は余った道を行くというのはどうでしょう？》

アシッドが冷静に判断を下した。

「よし、じゃあ俺真ん中行くから、お前右な」

「さっき俺を真ん中に指名したよな、お前っ！！」

シドウがまた怒った。

《どの道を行っても、結果は同じような感じもしますがね》

《グズグズしている暇はありません。早く基地の中枢を破壊しまし

よう《

アシッドとウィンドが言った。

「つたく、しょーがねー。今回はかりはお前に従うよ」

「よし、じゃ、また後でおち合おう！ シドウ、くたばるんじゃねーぞ！？」

「だれがやられるかつ！」

二人の喧嘩は通路に入るまで続いた。

「 電脳獣コントロールルーム」

ハントは橙色の液に浸かって眠っているグレイガの水槽に手をかざした。

・
・

「貴様が自由になる時は近い……。後は、計画通りに奴らを全滅させてくれればよいのだがな」

ハントは装置の回線をOFFにし、グレイガの目覚めの準備をし

た。

（氷の間）

通路の真ん中を選んだ風丸は床も壁も天井も氷で覆われた奇妙な部屋に入った。

「寒っ！！　なんだこの部屋？　誰の趣味でこんなもん作ったんだよ？」

風丸は震えながら言った。

《早くこんな部屋抜けちゃいましょう》

「おう！」

風丸が走りだしたときだった。

「君は僕の獲物だよ……………」

誰もいないはずの部屋から突然男の声がした。

「？　誰だっ！」

風丸が周りを見渡していると、地面から鋭い氷の槍が突き出した。

それは風丸の左肩を貫通し、氷は刺した後粉々に砕けた。

「ぐあああ！」

《大丈夫か、風丸？》

ウインドは風丸に言うと、突然氷の床から人型の彫刻のような物が浮き出てきた。そしてその氷の部分がはがれ電波変換したアラ
ンが姿を現した。

「アラン・ブリザード………氷の力を思い知るがいい」

「闇の間」

「うわああああ！ 何だこりやあ！？」

《さしずめ、闇の穴ブラックホールといったところでしょうか？ 気味が悪いですね》

シドウは部屋に入ったとたん真つ黒なぬかるむ地面に足をとられていた。

「気味わりいな。なんかの罠かもしれないから、慎重に抜けようぜ」

シドウは深くはまった足を持ち上げながら一步一步慎重に進んだ。

「へえ、意外と冷静なんだね、暁シドウ……」

「！！ 誰だ？ 出てこいっ！」

シドウが叫ぶと、空中に黒い霧が現れ、気付くと一人の乱れた黒髪の女が現れた。

「B Eの幹部の一人か？」

「あつたり」 私なんびとが何人も逃れることのできない暗くて何も無い闇の世界に導いてあ・げ・る？」

シドウはその時、全身に寒気が走った。

「紅蓮の間」

「ぐわあああ！ ダメだ、敵わない」

「つまんねーな。エースの二人は他の道を選んだか、こつちを片付けたら加勢しに行くか」

グレン・バーニングことグレンは次々に紅蓮の炎に焼かれて倒れていくWAXAの隊員たちを見ながらニヤツと笑った。

第6話「氷・闇・紅蓮」(後書き)

トレースのキャラ、始めて描くパターンですね。でもこっぴう奴
いるでしょ？でしょ？

感想待ってます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8113/>

流星のロックマン4 BEAST X

2011年12月25日18時51分発行